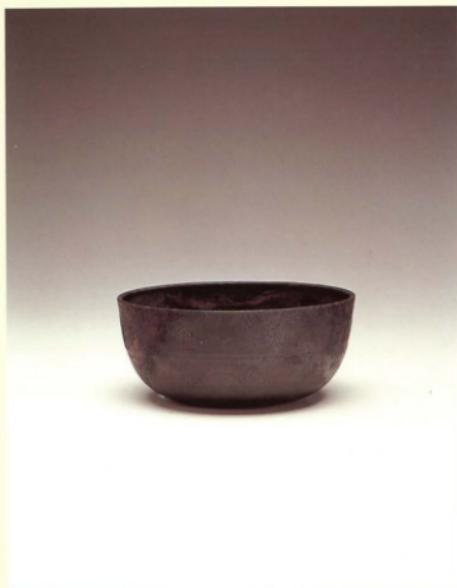


平成11年度  
神戸市埋蔵文化財年報



2002  
神戸市教育委員会

平成11年度  
神戸市埋蔵文化財年報

2002

神戸市教育委員会

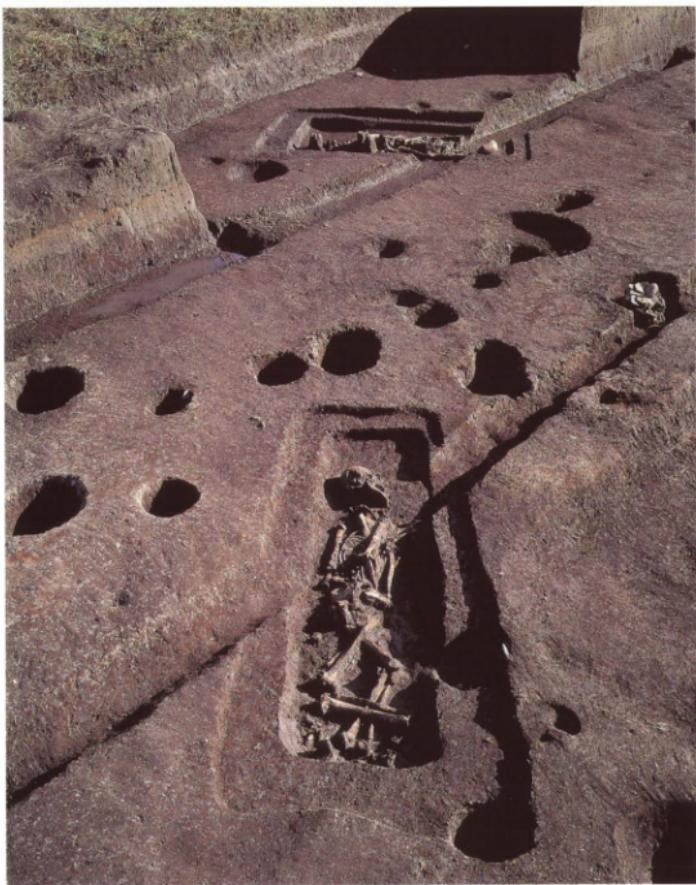


fig. 1 新方遺跡野手西方地区 第5次調査 第12・13号人骨



fig. 2  
新方遺跡野手西方地区  
第4次調査  
SB701出土 滑石



fig. 3  
新方遺跡野手西方地区  
第4次調査  
SB701出土 土器



fig. 4 寒風遺跡 第7次調査 建物群

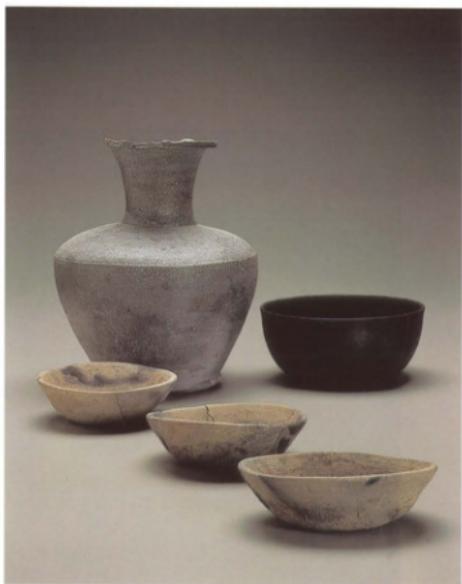


fig. 5  
上沢遺跡 第33次調査  
S E 201出土 銅鏡・土器



fig. 6 上沢遺跡 第33次調査 S E 201出土 動物遺体

# 序

21世紀もいよいよスタートし、新世紀の幕開けとともに、新しい時代の流れを感じさせる年となりました。

「神戸市復興計画」もいよいよ後期の5年がスタートし、ますます復興事業の取り組みにおける重要性が高まってきています。

また、本市においては、昨年度に実施した組織改変により、より充実した文化財行政に努めているところです。

さて、本年報でご報告いたします平成11年度は、復興調査の5年目にあたる区切りの年度でしたが、一部の発掘調査事業については、引き続き兵庫県教育委員会のご支援をいただきました。

このような状況のなかで、上沢遺跡の銅鏡や新方遺跡の人骨、兵庫津遺跡の町屋跡など貴重な発見が相次ぎました。

これらの遺跡をはじめ、本書に掲載いたしました、数々の成果を通じて埋蔵文化財に対するご理解を深めていただければ幸いです。

最後に、調査及び本年報を作成するにあたりまして御協力いただきました関係諸機関、関係各位に対し、厚くお礼申しあげます。

平成14年3月

神戸市教育委員会

# 例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成11年度に実施した埋蔵文化財調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、神戸市文化財保護審議会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

## 調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

檀上重光 前 神戸女子短期大学教授

工楽善通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

和田晴吾 立命館大学文学部教授

## 教育委員会事務局

教育長 鞍本昌男

眞神戸市体育協会

会長 笹山幸俊

社会教育部長 水田裕次

副会長 田村篤雄

文化財課長 大勝俊一

専務理事 田村篤雄（兼務）

埋蔵文化財係長 渡辺伸行

常務理事 中野洋二

文化財課主査 丹治康明・丸山潔

同 静観圭一

菅本宏明

総務課長 前田豊晴

事務担当学芸員 東喜代秀・井尻格

総務課主幹 中西光男

調査担当学芸員 千種浩・黒田恭正

総務課主幹 矢田哲通

谷正俊・山本雅和

総務課主査 丹治康明

須藤宏・富山直人

事務担当学芸員 斎木巖

山口英正・川上厚志

調査担当学芸員 西岡巧次・口野博史

藤井太郎・中村大介

西岡誠司・安田滋

平田朋子

佐伯二郎・池田毅

松林宏典・内藤俊哉

橋詰清孝・阿部敬生

浅谷誠吾・石島三和

関野豊・阿部功

中谷正・中居さやか

## 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班（神戸市調査担当職員）

山田清朝 服部寛

2. 本書に掲載した位置図は、神戸市立中学校教育研究部編集（神戸市体育協会発行）の5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2500分の1地形図を使用した。

3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当者が執筆し、I. 平成11年度事業の概要については東 喜代秀が、II. 復興調査の5年間を振り返ってについては渡辺 伸行が、VI. 平成11年度の保存科学調査・作業の概要については千種 浩・中村 大介がそれぞれ執筆した。本書の編集については、菅本 宏明の指導のもとに阿部 敬生が行った。
4. 本年報に掲載した、上沢遺跡・西北遺跡・平井沢遺跡・勝雄遺跡・吉田南遺跡における植生史関連調査については、パリノ・サー・ヴェイ株式会社によるものである。
5. 市内の各遺跡の調査次数については、現在改正作業中であり、平成12年度より段階的に変更する予定である。本書は従前の調査次数によっているため、今後刊行する報告書の次数表記については各自確認いただきたい。
6. 表紙写真は上沢遺跡出土の銅鏡（本文283頁）で、裏表紙写真は新方遺跡出土の銅鏡（本文239頁）である。

# 目 次

## 序 例 言

I. 平成11年度 事業の概要 .....	1
平成11年度 埋蔵文化財発掘調査一覧 .....	8
平成11年度 神戸市埋蔵文化財調査位置図 .....	16
II. 復興調査の5年間を振り返って .....	23
III. 平成11年度の復興事業に伴う発掘調査 .....	29
1. 深江北町遺跡 第8次調査 .....	29
2. 出口遺跡 第5次調査 .....	35
3. 本山遺跡 第33次調査 .....	41
4. 本山遺跡 第35次調査 .....	47
5. 八幡遺跡 第8次調査 .....	49
6. 都賀遺跡 第17次調査 .....	51
7. 西求女塚古墳 第10次調査 .....	53
8. 日暮遺跡 第15次調査 .....	55
9. 日暮遺跡 第17次調査 .....	59
10. 日暮遺跡 第18次調査 .....	65
11. 兵庫津遺跡 第18次調査 .....	69
12. 兵庫津遺跡 第19次調査 .....	73
13. 兵庫津遺跡 第20次調査 .....	75
14. 兵庫津遺跡 第21次調査 .....	87
15. 兵庫津遺跡 第22次調査 .....	93
16. 三川口遺跡 .....	95
17. 兵庫松本遺跡 第2次-1・2調査 .....	99
18. 塚本遺跡 第3次調査 .....	103
19. 上沢遺跡 第32次-1・2調査 .....	107
20. 上沢遺跡 第34次・36次-I・II調査 .....	133
21. 五番町遺跡 第7次調査 .....	141
22. 長田南遺跡 第2次調査 .....	145
23. 長田南遺跡 第3次調査 .....	149
24. 御蔵遺跡 第17次-1～6調査 .....	151
25. 御蔵遺跡 第31次-1・2調査 .....	153
26. 御蔵遺跡 第21・28・30・32・35次調査 .....	155

27. 御藏遺跡 第14次－1～23調査	165
28. 御藏遺跡 第22次調査	171
29. 御藏遺跡 第24～27・29・33・34・36次調査	173
30. 神楽遺跡 第13次調査	187
31. 水笠遺跡 第1次調査	189
32. 水笠遺跡 第2・3次調査	191
33. 松野遺跡 第6次－1～4調査	195
34. 松野遺跡 第7次－1～3調査	197
35. 松野遺跡 第10次－1～20調査	199
36. 松野遺跡 第11～16次調査	207
37. 二葉町遺跡 第9次－1～4調査	215
38. 若松町遺跡 第3次調査	219
39. 戎町遺跡 第28次調査	221
40. 須磨天神町遺跡 第3次調査	223
41. 垂水日向遺跡 第32次調査	225
42. 赤羽遺跡 第1次調査	227
43. 寒風遺跡 第7次調査	229
44. 新方遺跡	237
45. 新方遺跡野手西方地区 第4～6次調査	239
46. 今津遺跡 第13次調査	255
47. 小山遺跡 第4次調査	257
48. 小山遺跡 第5次調査	261
49. 神出古窯址群	263
 IV. 平成11年度の通常事業に伴う発掘調査	267
1. 郡家遺跡 第65次調査	267
2. 西平野遺跡 第1次調査	271
3. 日暮遺跡 第16次調査	275
4. 紙園遺跡 第8次調査	277
5. 上沢遺跡 第33次調査	283
6. 上沢遺跡 第35次調査	313
7. 茶臼山城址 第7次調査	315
8. 木ノ元遺跡・西北遺跡・平井沢遺跡	321
9. 淡河木津遺跡 第2次調査	333
10. 萩原遺跡 第10次調査	335
11. 勝雄遺跡 第6次－1・2調査	339
12. 長田神社境内遺跡 第13次調査	351
13. 大手町遺跡 第5次調査	355

14. 城ヶ谷砦 第1次調査	363
15. 神出古窯址群	369
16. 寒鳳遺跡 第6次調査	371
17. 新方遺跡	373
18. 吉田南遺跡	377
19. 玉津田中遺跡 平野地区 第15次調査	389
20. 玉津田中遺跡 平野地区 第16次調査	393
 V. 平成11年度の大規模試掘調査	399
 VI. 平成11年度の保存科学調査・作業の概要	409

## 挿図目次

fig. 1 新方遺跡野手西方地区第5次調査 人骨	卷頭	fig. 30 調査位置図	41
fig. 2 新方遺跡野手西方地区第4次調査 滑石	卷頭	fig. 31 調査区設定図	41
fig. 3 新方遺跡野手西方地区第4次調査 土器	卷頭	fig. 32 I区平面図	42
fig. 4 寒鳳遺跡第7次調査 建物群	卷頭	fig. 33 I区北半流路全景〔写真〕	42
fig. 5 上沢遺跡第33次調査 銅鏡・土器	卷頭	fig. 34 I区南北流路内杭列遺構1〔写真〕	42
fig. 6 上沢遺跡第33次調査 動物遺体	卷頭	fig. 35 V区平面図	43
fig. 7 企画展展示風景	2	fig. 36 V区杭列3～5〔写真〕	44
fig. 8 親子で体験 考古学講座	2	fig. 37 V区流路4井堰〔写真〕	44
fig. 9 体験考古学講座	4	fig. 38 V区流路4井堰・杭列7平・立面図	44
fig. 10 現地説明会風景	4	fig. 39 V区全景〔写真〕	45
fig. 11 震災1年後の復興調査文化庁視察〔写真〕	28	fig. 40 第16・33次調査区平面図	46
fig. 12 平成10年度上沢遺跡地元説明会風景〔写真〕	28	fig. 41 調査位置図	47
fig. 13 調査位置図	29	fig. 42 北半部第1遺構面全景〔写真〕	47
fig. 14 第1遺構面平面図	30	fig. 43 北半部第2遺構面全景〔写真〕	47
fig. 15 第2・3遺構面平面図	31	fig. 44 第1・2遺構面平面図	48
fig. 16 第2遺構面全景〔写真〕	31	fig. 45 調査位置図	49
fig. 17 S G01出土墨書き土器〔写真〕	32	fig. 46 調査区西壁断面図	49
fig. 18 S G01出土遺物実測図(1)	33	fig. 47 調査区平面図	50
fig. 19 S G01出土遺物実測図(2)	34	fig. 48 焼夷弾実測図	50
fig. 20 調査位置図	35	fig. 49 調査区全景〔写真〕	50
fig. 21 第1遺構面平面図	35	fig. 50 調査位置図	51
fig. 22 第2遺構面平面図	36	fig. 51 調査区平・断面図	52
fig. 23 第2遺構面全景〔写真〕	36	fig. 52 調査区全景〔写真〕	52
fig. 24 S B01-P2平・断面図	37	fig. 53 調査位置図	53
fig. 25 S B01-P2遺物出土状況〔写真〕	38	fig. 54 調査区西壁断面図	53
fig. 26 S B01-P2遺物出土状況〔写真〕	38	fig. 55 調査区平面図	54
fig. 27 S B01平・断面図	38	fig. 56 調査位置図	55
fig. 28 出土遺物実測図(1)	39	fig. 57 調査区断面図	55
fig. 29 出土遺物実測図(2)	40	fig. 58 調査区平面図	56

fig. 59	調査区全景〔写真〕	57	fig.106	出土遺物実測図（1）	84
fig. 60	S B02〔写真〕	57	fig.107	出土遺物実測図（2）	85
fig. 61	S B01平・断面図	57	fig.108	出土遺物実測図（3）	86
fig. 62	S B02平・断面図	58	fig.109	調査地位位置図	87
fig. 63	調査地位位置図	59	fig.110	第1・2遺構面平面図	88
fig. 64	調査区東壁断面図	59	fig.111	第1遺構面陶衣壺・埋植遺構〔写真〕	89
fig. 65	第1遺構面全景〔写真〕	60	fig.112	第2遺構面全景〔写真〕	89
fig. 66	第2遺構面全景〔写真〕	60	fig.113	第3遺構面平面図	89
fig. 67	第1遺構面平面図	60	fig.114	1トレンチ第3遺構面全景〔写真〕	90
fig. 68	S K01断面〔写真〕	61	fig.115	2トレンチ第3遺構面全景〔写真〕	90
fig. 69	S D01断面〔写真〕	61	fig.116	第4遺構面平面図	91
fig. 70	第2遺構面平面図	61	fig.117	2トレンチ第4遺構面全景〔写真〕	91
fig. 71	S X01〔写真〕	62	fig.118	土坑遺物出土状況〔写真〕	91
fig. 72	出土遺物実測図（1）	63	fig.119	第5遺構面平面図	92
fig. 73	出土遺物実測図（2）	64	fig.120	調査地位位置図	93
fig. 74	調査地位位置図	65	fig.121	第1～4遺構面平面図	94
fig. 75	調査区平面図	66	fig.122	調査地位位置図	95
fig. 76	調査区全景〔写真〕	66	fig.123	第1遺構面平面図	96
fig. 77	S B01〔写真〕	66	fig.124	第2遺構面平面図	96
fig. 78	S B01平・断面図	67	fig.125	第2遺構面全景〔写真〕	97
fig. 79	第15・16・18次調査区平面図	68	fig.126	第3遺構面平面図	97
fig. 80	調査地位位置図	69	fig.127	第3遺構面全景〔写真〕	98
fig. 81	第1遺構面平面図	70	fig.128	調査地位位置図	99
fig. 82	中央区・西区第2遺構面全景〔写真〕	71	fig.129	調査区位置図	99
fig. 83	西区炭檢出状況〔写真〕	71	fig.130	第2次-1調査1区落ち込み1〔写真〕	100
fig. 84	第2遺構面平面図	71	fig.131	第2次-1調査2区全景〔写真〕	100
fig. 85	中央区・西区第3遺構面全景〔写真〕	72	fig.132	第2次-2調査区全景〔写真〕	101
fig. 86	S K02〔写真〕	72	fig.133	第2次-2調査区S R01断面〔写真〕	101
fig. 87	第3遺構面平面図	72	fig.134	第2次-1・2調査区平面図	102
fig. 88	調査地位位置図	73	fig.135	調査地位位置図	103
fig. 89	第1・2遺構面平面図	73	fig.136	S D01〔写真〕	104
fig. 90	第1遺構面全景〔写真〕	74	fig.137	粘土探掘坑〔写真〕	104
fig. 91	東側トレンチ第1遺構面全景〔写真〕	74	fig.138	第1遺構面平面図	104
fig. 92	第1遺構面石列〔写真〕	74	fig.139	第3遺構面平面図	105
fig. 93	東側トレンチ第2遺構面全景〔写真〕	74	fig.140	調査区西壁断面図	105
fig. 94	調査地位位置図	75	fig.141	出土遺物実測図	106
fig. 95	第3遺構面平面図	76	fig.142	調査地位位置図	107
fig. 96	第3遺構面全景〔写真〕	77	fig.143	調査区平面図・S B01・03平・断面図	109
fig. 97	S B01炭化材・遺物出土状況〔写真〕	77	fig.144	調査区北壁断面図	111
fig. 98	S B04地鎮遺構〔写真〕	77	fig.145	第1遺構面平面図	112
fig. 99	第5遺構面全景〔写真〕	78	fig.146	1区第1遺構面全景〔写真〕	112
fig.100	第5・7遺構面平面図	79	fig.147	S E101〔写真〕	112
fig.101	第9遺構面平面図	80	fig.148	1区第2遺構面平面図	113
fig.102	竈1〔写真〕	80	fig.149	1・2区第3遺構面平面図	114
fig.103	竈1西侧生活面遺物出土状況〔写真〕	80	fig.150	1区第3遺構面全景〔写真〕	115
fig.104	出土錢貨拓影（1）	82	fig.151	S D301〔写真〕	116
fig.105	出土錢貨拓影（2）	83	fig.152	S D305〔写真〕	116

fig.153	調査区中央部第4遺構面平面図	117
fig.154	1区第4遺構面全景〔写真〕	118
fig.155	2区第4遺構面全景〔写真〕	118
fig.156	S K402〔写真〕	118
fig.157	花粉化石群集の層位分布	121
fig.158	植物珪酸体群集の層位分布と組織片の 産状	122
fig.159	上沢遺跡第32次－1調査産出花粉化石	128
fig.160	上沢遺跡第32次－1調査産出植物珪酸体	129
fig.161	上沢遺跡第20次調査出土木材樹種	130
fig.162	上沢遺跡第9・20・32次－2調査出土 木材樹種	131
fig.163	上沢遺跡第20次調査出土木材樹種	132
fig.164	調査地位置図	133
fig.165	第1・2遺構面平面図	134
fig.166	第2遺構面全景〔写真〕	135
fig.167	第3遺構面平面図	136
fig.168	第1・2遺構面平面図	137
fig.169	第3遺構面平面図	138
fig.170	第3遺構面全景〔写真〕	138
fig.171	調査区平面図	139
fig.172	調査区全景〔写真〕	140
fig.173	調査地位置図	141
fig.174	1区平面図	141
fig.175	S D04小型丸底壺出土状況実測図	142
fig.176	S D04小型丸底壺出土状況〔写真〕	142
fig.177	1区全景〔写真〕	143
fig.178	S D06〔写真〕	143
fig.179	1区西半南壁断面図	143
fig.180	2区平面図	144
fig.181	2区南壁断面図	144
fig.182	調査地位置図	145
fig.183	調査区西壁断面図	145
fig.184	調査区西壁〔写真〕	146
fig.185	北半部第1遺構面全景〔写真〕	147
fig.186	北半部第2遺構面全景〔写真〕	147
fig.187	南半部第3遺構面全景〔写真〕	147
fig.188	第1～3遺構面平面図	148
fig.189	調査地位置図	149
fig.190	調査区西壁断面図	149
fig.191	調査区平面図	150
fig.192	調査区西部全景〔写真〕	150
fig.193	調査区東部全景〔写真〕	150
fig.194	調査地位置図	151
fig.195	第17次－1・2調査区平面図	152
fig.196	調査地位置図	153
fig.197	調査区平面図	154
fig.198	第31次－2調査区南半全景〔写真〕	154
fig.199	調査地位置図	155
fig.200	調査地近景〔写真〕	155
fig.201	S B01平面図	156
fig.202	S B01〔写真〕	156
fig.203	調査区平面図	157
fig.204	調査区平・断面図	158
fig.205	調査区南壁断面図	159
fig.206	調査区平面図	160
fig.207	調査区全景〔写真〕	160
fig.208	調査区平面図	161
fig.209	S B01平・断面図	162
fig.210	調査区全景〔写真〕	162
fig.211	調査区平面図	163
fig.212	調査区全景〔写真〕	164
fig.213	調査地位置図	165
fig.214	第14次－2調査区平面図	166
fig.215	第14次－2調査区全景〔写真〕	166
fig.216	第14次－12調査区平面図	167
fig.217	第14次－12調査区全景〔写真〕	167
fig.218	第14次－12調査区掘立柱建物〔写真〕	167
fig.219	第14次－22調査区平面図	168
fig.220	第14次－22調査区掘立柱建物〔写真〕	168
fig.221	第14次－23調査区平面図	168
fig.222	第14次－23調査区全景〔写真〕	169
fig.223	第14次－23調査区全景〔写真〕	169
fig.224	御蔵遺跡遠景〔写真〕	170
fig.225	調査地位置図	171
fig.226	第3・22次調査区平面図	172
fig.227	A～C区全景〔写真〕	172
fig.228	D～F区全景〔写真〕	172
fig.229	調査地位置図	173
fig.230	第24次－1調査区西壁断面図	174
fig.231	第24次－1調査区第1遺構面〔写真〕	175
fig.232	第24次－1調査区第2遺構面〔写真〕	175
fig.233	第24次調査区第1・2遺構面平面図	176
fig.234	第24次調査区第3・4遺構面平面図	177
fig.235	S B01〔写真〕	178
fig.236	第1・2遺構面平面図	179
fig.237	調査区平面図	180
fig.238	調査区平面図	181
fig.239	調査区断面図	181
fig.240	調査区平・断面図	182
fig.241	調査区全景〔写真〕	182
fig.242	調査区北壁〔写真〕	182
fig.243	調査区平面図	183
fig.244	調査区平面図	184

fig.245	調査区全景〔写真〕	184
fig.246	溝状遺構断面〔写真〕	184
fig.247	調査区西壁断面図	185
fig.248	調査区平面図	186
fig.249	S X01遺物出土状況〔写真〕	186
fig.250	調査区全景〔写真〕	186
fig.251	調査地位置図	187
fig.252	調査区東壁断面図	187
fig.253	調査区平面図	188
fig.254	調査区全景〔写真〕	188
fig.255	調査地位置図	189
fig.256	調査区平面図	190
fig.257	1トレンチ西半全景〔写真〕	190
fig.258	3トレンチ全景〔写真〕	190
fig.259	調査地位置図	191
fig.260	調査地近景〔写真〕	191
fig.261	調査区平面図	192
fig.262	調査区全景〔写真〕	192
fig.263	調査区西壁〔写真〕	193
fig.264	調査区全景〔写真〕	193
fig.265	調査区平面図	194
fig.266	調査区北壁断面図	194
fig.267	第1～3次調査区平面図	194
fig.268	調査地位置図	195
fig.269	第6次～2調査区平面図	195
fig.270	第6次～1調査区全景〔写真〕	196
fig.271	第6次～2調査区全景〔写真〕	196
fig.272	第6次～3調査区全景〔写真〕	196
fig.273	第6次～4調査区全景〔写真〕	196
fig.274	調査地位置図	197
fig.275	第7次～1・2調査区平面図	198
fig.276	第7次～3調査区平面図	198
fig.277	第7次～1調査区全景〔写真〕	198
fig.278	第7次～2調査区全景〔写真〕	198
fig.279	調査地位置図	199
fig.280	第10次～1調査区平面図	200
fig.281	第10次～1調査区S K03〔写真〕	200
fig.282	S K03出土土器実測図	200
fig.283	第10次～3調査区平面図	201
fig.284	第10次～6調査区平面図	202
fig.285	第10次～7調査区平面図	202
fig.286	第10次～6調査区全景〔写真〕	202
fig.287	第10次～7調査区全景〔写真〕	202
fig.288	第10次～11調査区平面図	203
fig.289	第10次～11調査区全景〔写真〕	203
fig.290	第10次～12調査区平面図	203
fig.291	第10次～13調査区平面図	204
fig.292	第10次～13調査区S K01〔写真〕	204
fig.293	第10次～14～15調査区平面図	205
fig.294	第10次～18～20調査区平面図	206
fig.295	調査地位置図	207
fig.296	調査区平面図	208
fig.297	S D03出土遺物実測図	208
fig.298	調査区平面図	209
fig.299	調査区全景〔写真〕	209
fig.300	調査区南壁〔写真〕	209
fig.301	調査区平面図	210
fig.302	調査区全景〔写真〕	210
fig.303	調査区平面図	211
fig.304	調査区平面図	212
fig.305	調査区全景〔写真〕	212
fig.306	調査区平面図	213
fig.307	第15～16次調査区平面図	214
fig.308	調査地遠景〔写真〕	214
fig.309	調査地位置図	215
fig.310	第9次～1・2調査区平面図	216
fig.311	第9次～4調査区平面図	217
fig.312	S E312〔写真〕	218
fig.313	S T303〔写真〕	218
fig.314	調査区全景〔写真〕	218
fig.315	調査区全景〔写真〕	218
fig.316	調査地位置図	219
fig.317	調査区平面図	220
fig.318	調査区全景〔写真〕	220
fig.319	調査地位置図	221
fig.320	第1～2造構面平面図	222
fig.321	第2造構面上面遺物出土状況〔写真〕	222
fig.322	S D203・S P01～03〔写真〕	222
fig.323	調査地位置図	223
fig.324	調査区東壁断面図	223
fig.325	調査区平面図	224
fig.326	調査区全景〔写真〕	224
fig.327	調査地位置図	225
fig.328	調査区西壁断面図	225
fig.329	調査区平面図	226
fig.330	調査区全景〔写真〕	226
fig.331	自然流路断面〔写真〕	226
fig.332	調査地位置図	227
fig.333	調査範囲位置図	227
fig.334	調査区平面図	228
fig.335	調査区全景〔写真〕	228
fig.336	調査地位置図	229
fig.337	調査区平面図（1）	230
fig.338	調査区平面図（2）	231

fig.339	S B102〔写真〕	232	fig.386	S K01・02〔写真〕	259
fig.340	S B58〔写真〕	232	fig.387	出土鏡片〔写真〕	259
fig.341	S B14・55・57・60〔写真〕	233	fig.388	出土遺物実測図	260
fig.342	S B59〔写真〕	233	fig.389	調査位置図	261
fig.343	S B41・101〔写真〕	234	fig.390	調査区断面図	261
fig.344	S K206〔写真〕	235	fig.391	調査区平面図	262
fig.345	9区南・10区南全景〔写真〕	235	fig.392	調査区南半全景〔写真〕	262
fig.346	調査区全景〔写真〕	236	fig.393	調査区南壁〔写真〕	262
fig.347	調査地位置図	237	fig.394	調査地位置図	263
fig.348	調査範囲位置図	237	fig.395	S K03〔写真〕	263
fig.349	調査区平面図	237	fig.396	S P03〔写真〕	263
fig.350	出土遺物大割図	238	fig.397	調査範囲位置図	264
fig.351	調査地位置図	239	fig.398	調査区平・断面図	265
fig.352	5トレンチ平面図	240	fig.399	出土遺物実測図	266
fig.353	S B301〔写真〕	241	fig.400	調査区全景〔写真〕	266
fig.354	S B301-P2〔写真〕	241	fig.401	調査地位置図	267
fig.355	6トレンチ平面図	241	fig.402	第1遺構面平面図	268
fig.356	出土遺物実測図	242	fig.403	S D01・02〔写真〕	268
fig.357	7トレンチ平面図	243	fig.404	第2遺構面平面図	269
fig.358	7トレンチ全景〔写真〕	243	fig.405	S B02〔写真〕	269
fig.359	S B401平・断面図	244	fig.406	S D03〔写真〕	269
fig.360	8トレンチ第2・3遺構面平面図	245	fig.407	出土遺物実測図	270
fig.361	8トレンチ1区第2遺構面全景〔写真〕	246	fig.408	調査地位置図	271
fig.362	8トレンチ2区第2遺構面全景〔写真〕	246	fig.409	調査範囲位置図	271
fig.363	S B202・203平面図	246	fig.410	S P07〔焼土坑〕〔写真〕	272
fig.364	S D301・S T301平面図	247	fig.411	A区平面図	273
fig.365	S D301・S T301〔写真〕	247	fig.412	A区全景〔写真〕	273
fig.366	S B301平面図	248	fig.413	B-1区平面図	273
fig.367	S B301〔写真〕	248	fig.414	B-1区全景〔写真〕	273
fig.368	8・10~13号人骨平面図	250	fig.415	B-2・C区平面図	274
fig.369	出土遺物実測図	251	fig.416	B-2区全景〔写真〕	274
fig.370	10トレンチ全景〔写真〕	252	fig.417	C区全景〔写真〕	274
fig.371	10トレンチ第1・2遺構面平面図	253	fig.418	調査地位置図	275
fig.372	11トレンチ第1・2遺構面平面図	254	fig.419	調査区平面図	276
fig.373	11トレンチ第1遺構面全景〔写真〕	254	fig.420	調査区全景〔写真〕	276
fig.374	調査地位置図	255	fig.421	調査地位置図	277
fig.375	調査範囲位置図	255	fig.422	第1遺構面平面図	278
fig.376	調査区東壁断面図	256	fig.423	石列1平・断面図	278
fig.377	調査区平面図	256	fig.424	石列1〔写真〕	278
fig.378	調査区全景〔写真〕	256	fig.425	S B201平・断面図	279
fig.379	S R02〔写真〕	256	fig.426	第2遺構面平面図	279
fig.380	調査地位置図	257	fig.427	第2遺構面全景〔写真〕	279
fig.381	調査区平面図	257	fig.428	S B201〔写真〕	279
fig.382	調査区東壁断面図	258	fig.429	第3遺構面平面図	280
fig.383	第3トレンチ全景〔写真〕	258	fig.430	第3遺構面全景〔写真〕	280
fig.384	第7トレンチ全景〔写真〕	258	fig.431	S D01〔写真〕	280
fig.385	第1・4次調査区平面図	259	fig.432	S D01断面〔写真〕	281

fig.433	S D01遺物出土状況〔写真〕	281	fig.479	茶臼山城近景〔写真〕	320
fig.434	S D01遺物出土状況〔写真〕	281	fig.480	調査地位置図	321
fig.435	第7・8次調査区平面図	282	fig.481	調査区平面図	322
fig.436	調査地位置図	283	fig.482	第2次調査区平面図	323
fig.437	第1遺構面全景〔写真〕	284	fig.483	第1次調査区平面図	324
fig.438	S D101〔写真〕	284	fig.484	第1次調査区全景〔写真〕	325
fig.439	第1遺構面平面図	284	fig.485	第2次調査区全景〔写真〕	325
fig.440	S E101 平・断面図	285	fig.486	調査区平面図	326
fig.441	S E101〔写真〕	285	fig.487	西北遺跡第1次調査出土木材樹種	330
fig.442	S E101 断面〔写真〕	285	fig.488	西北遺跡第1次調査・ 平井沢遺跡第2次調査出土木材樹種	331
fig.443	第2遺構面平面図	286	fig.489	西北遺跡第1次調査出土木材樹種	332
fig.444	S E201 平・断面図・遺物出土状況図	287	fig.490	調査地位置図	333
fig.445	枠内⑤層中部遺物出土状況〔写真〕	287	fig.491	調査区平面図	334
fig.446	枠内⑤層下部遺物出土状況〔写真〕	287	fig.492	S E01平・断面図	334
fig.447	枠内⑦層最下部遺物出土状況〔写真〕	287	fig.493	S E01〔写真〕	334
fig.448	井龍組井戸桿〔写真〕	287	fig.494	調査地位置図	335
fig.449	井龍組井戸桿細部〔写真〕	287	fig.495	調査区平面図	336
fig.450	S E201 出土銅鏡〔写真〕	288	fig.496	調査区全景〔写真〕	337
fig.451	S E201 出土銅鏡実測図	288	fig.497	調査区南部全景〔写真〕	338
fig.452	第3遺構面平面図	289	fig.498	S X01・02〔写真〕	338
fig.453	第3遺構面全景〔写真〕	289	fig.499	調査地位置図	339
fig.454	S K302〔写真〕	289	fig.500	A・B区全景〔写真〕	340
fig.455	S E201 出土遺物実測図	290	fig.501	1トレンチ全景〔写真〕	341
fig.456	第28・33次調査区平面図	290	fig.502	5トレンチ全景〔写真〕	341
fig.457	上沢遺跡第8・33次調査出土木材樹種	304	fig.503	7トレンチ全景〔写真〕	341
fig.458	上沢遺跡第3・16・33次調査 出土木材樹種	305	fig.504	11トレンチ全景〔写真〕	341
fig.459	上沢遺跡第3・33次調査出土木材樹種	306	fig.505	A・B区平面図	342
fig.460	上沢遺跡第8・16次調査出土木材樹種	307	fig.506	3・7・13トレンチ平面図	342
fig.461	上沢遺跡第33次調査出土木材樹種	308	fig.507	3トレンチ逆板状遺構〔写真〕	342
fig.462	上沢遺跡第8・33次調査出土木材樹種	309	fig.508	7トレンチ全景〔写真〕	343
fig.463	上沢遺跡第33次調査出土木材樹種	310	fig.509	13トレンチ・同拡張部全景〔写真〕	343
fig.464	上沢遺跡第33次調査出土木材樹種	311	fig.510	勝雄遺跡遠景〔写真〕	344
fig.465	上沢遺跡第33次調査出土種実遺体	312	fig.511	勝雄遺跡第4・5次調査出土木材樹種	348
fig.466	調査地位置図	313	fig.512	勝雄遺跡第2・4・5次調査 出土木材樹種	349
fig.467	調査区平面図	314	fig.513	勝雄遺跡第4・6次調査出土木材樹種	350
fig.468	調査地位置図	315	fig.514	調査地位置図	351
fig.469	調査区位置図	316	fig.515	S B01〔写真〕	352
fig.470	1区全景〔写真〕	317	fig.516	調査区平面図	353
fig.471	2区全景〔写真〕	317	fig.517	S B01遺物出土状況〔写真〕	354
fig.472	3区全景〔写真〕	318	fig.518	S B01中央土坑〔写真〕	354
fig.473	5区全景〔写真〕	318	fig.519	出土遺物実測図	354
fig.474	7区全景〔写真〕	319	fig.520	調査地位置図	355
fig.475	7区北部全景〔写真〕	319	fig.521	調査区割図	355
fig.476	7区平面図	319	fig.522	調査区平面図	356
fig.477	7区礎石〔写真〕	320	fig.523	S B01平・断面図	357
fig.478	S X01〔写真〕	320			

fig.524	S B01〔写真〕	357	fig.571	西地区第2遺構面全景〔写真〕	382
fig.525	S B01〔写真〕	357	fig.572	西地区〔北拡張区〕	382
fig.526	S B02平・断面図	358	fig.573	西地区第2遺構面平面図	383
fig.527	S B02〔写真〕	359	fig.574	西地区調査区合図	384
fig.528	S B02遺物出土状況〔写真〕	359	fig.575	出土遺物実測図	385
fig.529	S B03〔写真〕	359	fig.576	吉田南遺跡出土木材樹種〔写真〕	388
fig.530	S X01〔写真〕	359	fig.577	調査位置図	389
fig.531	S D01〔写真〕	360	fig.578	調査区平面図	390
fig.532	S D01〔写真〕	360	fig.579	流路出土遺物実測図（1）	390
fig.533	S D01平・断面図	360	fig.580	流路出土遺物実測図（2）	392
fig.534	S X01平・断面図	361	fig.581	調査位置図	393
fig.535	出土遺物実測図	362	fig.582	第1～4遺構面平面図	394
fig.536	調査位置図	363	fig.583	1・2トレンチ断面図	395
fig.537	調査区平面図	364	fig.584	S D402〔写真〕	396
fig.538	曲輪西半〔写真〕	365	fig.585	S K401〔写真〕	396
fig.539	曲輪北半〔写真〕	365	fig.586	S D402平・断面図	397
fig.540	S X01平・断面図	365	fig.587	出土遺物実測図	398
fig.541	S X01〔写真〕	366	fig.588	北区試掘地域全体図	400
fig.542	土橋〔写真〕	366	fig.589	八多地区試掘調査地点	401
fig.543	堀切り断面図	366	fig.590	東灘山手地区試掘調査地点	402
fig.544	堀切り断面〔写真〕	367	fig.591	新長田駅北地区試掘調査地点	403
fig.545	調査地遠景〔写真〕	368	fig.592	西区試掘地域全体図（1）	404
fig.546	調査地位置図	369	fig.593	寺谷地区試掘調査地点	405
fig.547	調査範囲位置図	369	fig.594	西区試掘地域全体図（2）	406
fig.548	1トレンチ全景〔写真〕	369	fig.595	垂水地区試掘地域全体図	407
fig.549	調査区平面図	370	fig.596	垂水地区試掘調査地点	408
fig.550	調査地位置図	371	fig.597	青谷南地区試掘調査地点	408
fig.551	調査区平面図	372	fig.598	新方遺跡溝断面上層転写パネル〔写真〕	409
fig.552	調査区全景〔写真〕	372	fig.599	土器をアルミ箔で保護し、	410
fig.553	S B01〔写真〕	372	fig.600	発砲ウレタン樹脂を吹き付ける〔写真〕	410
fig.554	調査地位置図	373	fig.601	裏側から転写用樹脂を塗る〔写真〕	410
fig.555	A-1・2区西壁断面図	374	fig.602	表側の発砲ウレタン樹脂をはずす〔写真〕	410
fig.556	C-4区平・断面図	374	fig.603	人骨のオーバーハングを解消する〔写真〕	411
fig.557	C-4区全景〔写真〕	375	fig.604	人骨を保護する〔写真〕	411
fig.558	S P01断面〔写真〕	375	fig.605	順次トンネルを掘り、発砲ウレタンを充填〔写真〕	411
fig.559	D-1～4区断面図	376	fig.606	全体を発砲ウレタンで包包する〔写真〕	411
fig.560	調査範囲推定概念図	376	fig.607	重機で吊り上げる〔写真〕	412
fig.561	調査地位置図	377	fig.608	裏返す〔写真〕	412
fig.562	西地区第1遺構面平面図	378	fig.609	発掘現場から運び出す〔写真〕	412
fig.563	S B101平・断面図	379	fig.610	埋蔵文化財センターで裏側から調査〔写真〕	412
fig.564	S P111平・断面図	379	fig.611	兵庫津20次 炭化物〔写真〕	413
fig.565	S P111〔写真〕	379	fig.612	発砲ウレタンを吹き付け包包する〔写真〕	413
fig.566	S B102・103平・断面図	380	fig.613	シリコーン樹脂合に設置した炭化材〔写真〕	413
fig.567	S B102・103〔写真〕	380	fig.614	合成樹脂で裏打ちしたワラジ〔写真〕	413
fig.568	西地区第1遺構面全景〔写真〕	381	fig.615	上沢33次 ウサギ遺体出土状態復原〔写真〕	414
fig.569	S X202上層木材検出状況〔写真〕	381	fig.616	同 銅鏡X線透過像〔写真〕	414
fig.570	S X202下層木材検出状況〔写真〕	381			

# I. 平成11年度 事業の概要

## 1. はじめに

平成11年度は阪神・淡路大震災の発生から5年目の節目を迎え、震災復興関連事業についての文化庁次長通知「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針について」と、兵庫県教育長通知「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱い適用要領」に基づいた特例措置の最終年度となった。平成12年度以降は、発掘調査に至った場合の調査費用の負担について、復旧・復興事業として被災者である個人及び中小企業が建設する建物についてはこれまでどおり国庫補助の適用を受けるが、被災者のために住宅を供給する事業については適用が除外されることになった。但し、工事の着手が12年度以降でも、11年度中に文化財保護法第57条2に基づく届出がなされていれば国庫補助の適用を受けられるため、年度末に届出が増加することとなった。

さらに、平成11年5月に改正建築基準法が施行されたことに伴い、本市で6月より建築確認の事前届出制度が開始され、教育委員会でもこの制度に基づき周知の埋蔵文化財包蔵地内での建築行為に対し、文化財保護法に基づく届出の提出の指導を徹底することになった。このため前年度に比べて届出が約3.5倍に増加し、事前の試掘・確認調査も約1.5倍に増加した。しかしながら主として震災復興関連の発掘調査の事業量が減少したため、迅速に対応し工事の進捗に影響を及ぼすことはなかった。

震災復興関連の発掘調査については、調査件数は前年度とほぼ横這いであったが、調査面積は半減した。一方通常事業に伴う発掘調査は、件数は微増したが調査面積は約3割減少している。

## 2. 普及啓発

### 事業

神戸市埋蔵文化財センターでは、特別展示・企画展示を年数回実施し、調査成果を公開している。

### 特別展示

本年度は、『古墳時代を駆けた馬』と題した特別展示を実施した。期間中の10月30日には、立命館大学教授和田晴吾氏の講演会「馬が来た」を実施し、147名の聴講を得た。

### 企画展示

縄文時代から近世の装身具を展示した『むかしのアクセサリーーちょっとおしゃれな神戸っ子ー』と、市内の調査で出土した資料のうち、資料的価値の高いものを展示した『神戸考古百選ー最新資料が語る神戸1万年の歴史ー』の2回の企画展を開催した。

### 学校展示

遺跡から出土した資料を子供たちが直接目で見て触れるながら、地域の歴史や文化を学ぶことを目的に、社会科教育の一環として平成10年度より市内の小学校で展示会を開催しており、本年度は5校で実施した。

展示会名称	開催期間	入館者数
『古墳時代を駆けた馬』	H11. 10/16~11/28	2,066名
『むかしのアクセサリーーちょっとおしゃれな神戸っ子ー』	H11. 3/27~6/6	11,611名
『神戸考古百選ー最新資料が語る神戸1万年の歴史ー』	H11. 7/24~9/5	3,291名

館外展示 地域の身近な遺跡を紹介し、地域の歴史について理解を深めてもらうため、地域の施設を利用し展示会を開催した。

学校 展 示			
展示会名称	開催期間	場 所	
むかしのながた	5／17～5／21	長田区五位の池小学校	
むかしのたるみ	6／4～6／10	垂水区多聞南小学校	
やよいじだいのすま	6／11～7／19	須磨区若宮小学校	
中世の伊川谷	6／28～7／2	西区伊川谷小学校	
むかしのたるみ	7／12～7／16	垂水区舞子小学校	
庄屋さんの庭	11／1～12／25	須磨区若宮小学校	
館 外 展 示			
展示会名称	開催期間	場 所	見学者
発掘された道場の歴史	11／1～11／4	神戸市立農業振興センター	500名
庄屋屋敷の庭	2／17～2／23	大手こもり会館	297名

考古学講座 『親子で体験考古学講座』は学校の休日である第2・第4土曜日の催しとして、体験学習を通じて、先人の生活や技術を学び、歴史に興味を抱いてもらうという趣旨で、小学校高学年から高校生までを対象に開催した。また、昨年度より実施している『赤米作りに挑戦しよう』は本年度も引き続き開催した。さらに、成人対象の『体験考古学講座』についても好評を得て開催している。



fig. 7 企画展展示風景



fig. 8 親子で体験 考古学講座

親子で体験考古学講座

講 座 名	開催日	内 容	参加者
遺跡発掘に挑戦しよう	4／24	遺跡で実際の発掘調査を体験する。	109名
石包丁をつくろう	5／22	滋賀県産高島石で石包丁などの磨製石器をつくる。	114名
古代人の装身具 -勾玉づくりに挑戦-	7／24	印材の青田石や寿山石で勾玉をつくる。	278名
土器・埴輪をつくろう	8／7	乾燥すると硬化する粘土で土器・埴輪をつくる。	253名
縄文時代の葉っぱをさがす	8／21	縄文時代の木葉を水洗選別して取り出し種類を調べる。	81名
古代人の生活体験	11／13	大歳山遺跡公園の復元住居で火起こしや調理をおこなう。	80名
縄文クッキーをつくろう	12／11	ドングリ（シイの実）を粉にしてクッキーを焼く。	36名

親子で『赤米作りに挑戦しよう』

講 座 名	開催日	内 容	参加者
貫頭衣を着て田植えに挑戦	6／12	神出自然教育園の水田において、古代米である赤米	53名
がんばって草取りをしよう	7／31	を実際に田植えから収穫まで体験する。	40名
石包丁で収穫に挑戦	10／23		47名

体験考古学講座

講 座 名	開催日	内 容	参加者
勾玉づくりに挑戦	2／19	印材の青田石や寿山石で勾玉をつくる。	62名
土器・埴輪をつくる 成形	3／11	粘土から土器を成形する。	31名
土器・埴輪をつくる 焼成	3／25	乾燥させた土器を野焼きによって焼成する。	31名
		合 計	1,215名

#### [文化財保護強調週間の催し]

垂水区西舞子にある大歳山遺跡公園では、例年文化財保護強調週間にあわせて11月1日から7日までの期間、復元した竪穴住居の内部を公開するとともに、古代人の生活の一部を体験できるような催しを実施しているが、平日の参加者が少ないため本年度は11月3日(祝)・4日(土)・5日(日)の休日の3日間に限定して開催した。具体的には、舞錐による火起こしや臼・杵による米の脱穀、田下駄の体験、土笛を吹く等の催しで、3日間の参加者は延べ600名であった。

#### [発掘調査現地説明会の開催と報道関係資料提供]

発掘調査及び出土遺物の整理において重要な発見があった場合、市役所内の市政記者クラブで発表を行っている。また、現地調査期間中で安全管理上可能であれば現地説明会を実施している。さらに、要望があれば地域住民対象の説明会も開催している。本年度は3件の説明会を開催した。

記者発表及び現地説明会			
遺 跡 名	内 容	開 催 日	見学者数
兵庫区上沢遺跡	奈良時代の井戸より銅鏡出土	平成11年7月24日	350名
西区新方遺跡	弥生時代の人骨	平成11年11月14日	600名
須磨区大手町遺跡	弥生時代の集落跡	平成12年2月17日	592名



fig. 9 体験考古学講座



fig. 10 現地説明会風景

#### [資料等の貸出し]

平成11年度に各機関等に貸し出した資料は、写真41件193点、出土遺物10件97点である。

#### [刊行物]

平成11年度の埋蔵文化財関係の刊行物は以下の13点である。

(1) 平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報	平成12年3月発行	額価 2,000円
(2) 若松町遺跡発掘調査報告書	平成12年3月発行	非売品
(3) 勝雄遺跡I 第1・2・3・4次発掘調査報告書	平成12年3月発行	額価 2,000円
(4) 南僧尾 -淡河地区農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-	平成12年3月発行	額価 2,000円
(5) 玉津田中遺跡発掘調査報告書 第8・10・12・13・15次調査	平成12年3月発行	額価 3,000円
(6) 白水遺跡第3・6・7次、高津橋大塚遺跡第1・2次発掘調査報告書	平成12年3月発行	額価 3,000円
(7) 祇園遺跡第5次発掘調査報告書	平成12年2月発行	額価 800円
(8) ゆの山御てん 有馬・湯山遺跡発掘調査の記録	平成12年3月発行	額価 600円
(9) 平成5~8年度 神戸市遺跡現地説明会資料集	平成12年3月発行	額価 500円
(10) 平成9・10年度 神戸市遺跡現地説明会資料集	平成12年3月発行	額価 500円
(11) 神戸考古百選 -最新資料が語る“神戸1万年の歴史”-	(企画展図録)	平成11年7月発行 額価 500円
(12) 古墳時代を駆けた馬 (特別展図録)	平成11年10月発行	額価 500円
(13) 神戸市埋蔵文化財分布図	平成12年2月発行	額価 800円

3. 文化財保護  
条例 平成9年に制定された『神戸市文化財の保護及び文化財等を取り巻く文化環境の保全に関する条例』に基づき、文化財保護審議会に諮問し、答申を受けた指定文化財・登録文化財等のうち、平成11年度は埋蔵文化財関係について該当するものはなかった。

4. 指導事業 平成11年度の文化財保護法に基づく届出・通知については別表のとおりであるが、民間事業に伴う発掘届(第57条2に基づく届出)が前年度に比して約3.5倍に増加している。この増加の要因としては以下の2点があげられる。まず事前届出制度の開始である。これは、改正建築基準法の施行に伴い民間機関でも建築確認申請の受付ができるようになったことに伴い、神戸市の条例や要綱の実効性の確保のため『神戸市民の住環境をまもりそだてる条例』に基づく事前届出制度が開始されたもので、建築主が建築確認申請前に本市に対し建築行為の概要を記した事前届出書を提出し、市は届け出られた計画について各課所管事項に関しての助言・指導を実施するものである。従来から周知の埋蔵文化財包蔵地内の建築行為については届出が義務付けられていたにもかかわらず、事業の自主的な届出の提出にとどまり、無届けでの建築行為が後を絶たなかった。これを防止するために、教育

委員会でもこの制度に基づき事前届出書を閲覧し、発掘届の提出の指導を徹底することとなった。さらに、前述したように本年度が震災特例措置の最終年度であり、年度末の届出の増加がもう一つの要因である。

この発掘届の増加に伴い、文化財の取扱いを決定するための試掘・確認調査も約1.5倍に増加している。

## 5. 調査事業

平成11年度の発掘調査事業は、民間事業関連・国庫補助事業の調査のすべてと公共事業関連の調査の一部を教育委員会の直管で実施し、公共事業関連の調査の大部分を健神戸市体育協会に委託して実施した。

本市では便宜上、阪神・淡路大震災に起因する復旧・復興事業関連調査と起因しない通常事業関連調査を区別し処理している。全体の調査件数及び発掘調査面積は別表のとおりである。

前年度と比較すると調査件数は横這いであるが、調査面積は半減している。これは別表のように復興に伴う大規模な開発事業が終息し、小規模な個人住宅等の調査へ移行したこと 등을語っている。これらの調査に要した費用は593,546千円であり、前年度に比して半減している。

### 復興事業に 伴う調査

復興事業に伴う調査は81件で、このうち60件が個人及び中小企業が事業者の国庫補助事業で、大企業及び公共の事業者の経費負担による受託調査は21件である。復興事業関連の国庫補助事業は250,220千円で、前年度に比して半減している。内訳は事前の試掘・確認調査が21,108千円、個人及び中小企業の発掘調査が191,708千円、その他整理・報告書作成等が37,404千円である。

本年度も兵庫県教育委員会の埋蔵文化財専門職員に、本市の発掘調査を1件支援していただいた。

## 6. 市内発掘

### 調査の概要

平成11年度の主な調査成果を時代順にまとめる。

西区新方遺跡では、平成9年に引き続き縄文的な特徴をもった弥生時代前期の人骨が出土し話題を呼んだ。

西区寒風遺跡では、古墳時代後期の大壁造り建物や掘立柱建物、竪穴住居などの遺構を確認した。これらの遺構のうち特に注目されるのは大壁造り建物である。これまでの調査でも確認してきていたが、同一調査区内で遺構の全容を知る機会には恵まれていなかった。今回実施した調査では、1棟の大壁造り建物について、遺構の全体を調査することができ、貴重な資料を追加することができた。

兵庫区上沢遺跡では、奈良時代の井籠組みの井戸から正倉院御物と同じ銅鏡が出土し、上沢遺跡の性格を考える上で貴重な資料となった。

## 文化財保護法に基づく届出・通知・試掘依頼等件数一覧

## 発掘調査、整理作業件数一覧

No.	内 容	件 数
1	発見・発掘届・通知（保護法57条関係）	781件
i	民間事業に伴う発掘届（57-2）	732件
	通常事業関連	93件
	復興事業関連	639件
ii	公共事業に伴う発掘通知（57-3）	42件
	通常事業関連	26件
	復興事業関連	16件
iii	発見届・発見通知（57-5・6）	7件
2	発掘調査の報告（保護法98条2）	96件
3	開発行為事前審査等各種申請	145件
4	試掘調査（依頼件数）	339件
i	通常事業関連	80件
	通常公共関連	28件
	通常民間関連	52件
ii	復興事業関連	259件
	復興公共関連	15件
	復興民間関連	244件
5	工 事 立 会	36件

発掘調査面積（単位：m<sup>2</sup>）

	公共事業関連	民間事業関連	計	延べ調査面積
通常事業	12,851	234	13,085	15,504
復興事業	8,773	11,008	19,781	29,049
計	21,624	11,242	32,866	44,553

発掘調査面積別件数

調査面積	件 数	調査面積	件 数
～ 100 m <sup>2</sup>	57	1,001 ～ 2,000 m <sup>2</sup>	5
101 ～ 300 m <sup>2</sup>	30	2,001 ～ 5,000 m <sup>2</sup>	1
301 ～ 500 m <sup>2</sup>	10	5,001 m <sup>2</sup> 以上	0
501 ～ 1,000 m <sup>2</sup>	11	合 計	114

平成11年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（1）

No.	調査跡名	所在地	調査主体	調査担当者 延べ面積	区別番號 調査期間	調査内容	調査原因
1	深江北町遺跡第8次調査	東灘区深江本町2丁目66番地	神戸市教育委員会	須藤 宏 220m <sup>2</sup> 660m <sup>2</sup>	11. 9. 30～11. 11. 3	古墳初期 池・溝・ピット 古墳後期～平安 池状遺構・ピット 「跡」墨書き土器	共同住宅建設 (国庫補助事業 部分)
2	出口遺跡第5次調査	東灘区森北町3丁目	神戸市教育委員会	須藤 宏 560m <sup>2</sup> 560m <sup>2</sup>	11. 6. 22～11. 7. 31	弥生中期 洪路・古墳中期 洪路 飛鳥～平安 洪路 平安中期～後期 桁立柱建物1棟	共同住宅建設 (国庫補助事業)
3	本山遺跡第33次調査	東灘区本山南町9丁目8-104ほか	神戸市教育委員会	山本 審和 1,995m <sup>2</sup> 1,995m <sup>2</sup>	11. 9. 6～12. 3. 6	弥生前期前半 洪路 弥生中期 洪路・溝 中世以降 清	共同住宅建設 (国庫補助事業)
4	本山遺跡第35次調査	東灘区田中町1丁目30-2	神戸市教育委員会	川上 厚志 60m <sup>2</sup> 120m <sup>2</sup>	11. 6. 2～11. 6. 18	弥生中期 洪路；塗・土坑1基 中世 清・杭列	個人住宅建設 (国庫補助事業)
5	八幡遺跡第8次調査	灘区八幡町2丁目13-4・13-5	神戸市教育委員会	須藤 宏 140m <sup>2</sup> 160m <sup>2</sup>	11. 9. 8～11. 9. 28	中世 棚列 時期不明 土坑	共同住宅建設 (国庫補助事業)
6	都賀遺跡第17次調査	灘区前町4丁目	神戸市体育協会	阿部 功 50m <sup>2</sup> 50m <sup>2</sup>	12. 3. 16～12. 3. 31	中世 清・ピット	山手幹線街路開造
7	藤原遺跡第20次調査	灘区藤原本町3丁目33-1	神戸市教育委員会	富山 直人 100m <sup>2</sup> 100m <sup>2</sup>	12. 2. 28～12. 2. 29	検出遺構なし 寄主内より遺物出土	共同住宅建設 (国庫補助事業)
8	西次女塚古墳群第10次調査	灘区藤原3丁目54-1	神戸市教育委員会	川上 厚志 50m <sup>2</sup> 50m <sup>2</sup>	11. 4. 23～11. 5. 7	奈良～平安 洪路 中世 水田網 埴輪・施割れ跡	共同住宅建設 (国庫補助事業)
9	日暮遺跡第15次調査	中央区向町3丁目7-1-7ほか	神戸市教育委員会	谷 正俊 370m <sup>2</sup> 370m <sup>2</sup>	11. 7. 2～11. 8. 19	飛鳥～平安 桁立柱建物2棟・ピット	共同住宅建設 (国庫補助事業)
10	日暮遺跡第17次調査	中央区日暮通1丁目302・303	神戸市教育委員会	須藤 宏 58m <sup>2</sup> 116m <sup>2</sup>	11. 11. 24～11. 12. 10	古墳～平安前期 塗1条・土坑1基 土器留まり1 平安後期 開闢日跡	共同住宅建設 (国庫補助事業)
11	日暮遺跡第18次調査	中央区筒井町3丁目1-2	神戸市教育委員会	谷 正俊 56m <sup>2</sup> 56m <sup>2</sup>	12. 2. 14～12. 2. 17	飛鳥～平安 開立柱建物1棟・洪路 時期不明 ピット	個人住宅建設 (国庫補助事業)
12	生田町古墳群第1次調査	中央区生田町2丁目386ほか	神戸市教育委員会	谷 正俊 410m <sup>2</sup> 440m <sup>2</sup>	12. 3. 14～12. 3. 31 (H12年度既終)	古墳後期 土坑など検出中	共同住宅建設 (国庫補助事業)
13	兵庫津遺跡第17次調査	兵庫区本町1丁目18・20	神戸市教育委員会	内藤 敦哉 60m <sup>2</sup> 60m <sup>2</sup>	11. 4. 1～11. 4. 6	埋め戻し・現場検収	個人住宅建設 (国庫補助事業)
14	兵庫津遺跡第18次調査	兵庫区本町1丁目1-12・1-13	神戸市教育委員会	佐伯 二郎 100m <sup>2</sup> 300m <sup>2</sup>	11. 4. 1～11. 4. 10	近世 土坑・ピット・礎石	共同住宅建設 (国庫補助事業)
15	兵庫津遺跡第19次調査	兵庫区本町2丁目1-5	神戸市教育委員会	富山 直人 60m <sup>2</sup> 60m <sup>2</sup>	11. 4. 12～11. 4. 16	江戸後期 墓石	共同住宅建設 (国庫補助事業)
16	兵庫津遺跡第20次調査	兵庫区七宮町2丁目3-19	神戸市教育委員会	黒田 忠正 320m <sup>2</sup> 2,880m <sup>2</sup>	11. 6. 14～11. 10. 28	16世紀末～幕末 墓石・道路遺構・礎 伏道構 鐵貨・腰袋・丁綱筋土製品	共同住宅建設 (国庫補助事業)
17	兵庫津遺跡第21次調査	兵庫区七宮町2丁目3-2・3-10	神戸市教育委員会	谷 正俊 280m <sup>2</sup> 810m <sup>2</sup>	11. 9. 21～11. 11. 25	江戸後期 土坑・蒸立ち込み・石列 江戸末～明治初期 磐衣壺・埋築遺構 埋板遺構	社整所建設 (国庫補助事業)

平成11年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）(2)

番	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者 延べ面積	調査期間	調査内容	調査原因
18	兵庫津道跡第22次調査	兵庫区三川町3丁目2-12~17	神戸市教育委員会	富山 直人 200㎡ 800㎡	11. 9. 27~11. 10. 27	14世紀前半 溝2条・溝底状落ち込み 14世紀後半 溝10条 15世紀 水田耕作 室町末 潟13条	店舗建設 (国庫補助事業)
19	三川町遺跡	兵庫区三川町3丁目4-3	神戸市教育委員会	山田 清樹 棚尾 夏 (熊支援) 305㎡	11. 4. 7~11. 4. 28	近世前半以前 水田・堀	共同住宅建設 (国庫補助事業)
20	兵庫松本遺跡 第2次-1・2調査	兵庫区松本通2丁目	神戸市体育協会	西岡 诚司 116㎡ 116㎡	12. 1. 31~12. 2. 14	弥生後期～古墳前期 溝路・落ち込み 土坑	区画整理事業
21	塚本遺跡第3次調査	兵庫区塚本通6丁目2-44	神戸市教育委員会	須藤 宏 50㎡ 150㎡	12. 1. 24~12. 2. 5	平安末 粘土垣根跡・落ち込み 江戸 水路	共同住宅建設 (国庫補助事業)
22	上沢遺跡第32次-1調査	兵庫区五番町2丁目	神戸市体育協会	樋口 清孝 石島 三和 中谷 正 655㎡ 1,310㎡	11. 4. 6~11. 12. 22	弥生末～古墳初期 溝・落ち込み・谷 古墳末～奈良 墓立柱建物6棟・水田 鎌倉 井戸1	山手幹線街路整備
23	上沢遺跡第32次-2調査	兵庫区上沢通8丁目10-16	神戸市体育協会	樋口 清孝 石島 三和 676㎡	11. 8. 18~11. 10. 25	弥生前期 溝4条・土坑3基・ピット 古墳初期 墓立柱建物・溝・ピット 古墳～平安前朝 溝5条	山手幹線街路整備
24	上沢遺跡第34次調査	兵庫区上沢通8丁目4-30・31・38	神戸市教育委員会	閑野 雄 40㎡ 130㎡	11. 7. 9~11. 7. 26	古墳前期 溝1条・ピット5基 古墳中期～奈良 墓立柱建物2棟・溝 中世 溝1条・ピット5基	分譲住宅建設 (国庫補助事業)
25	上沢遺跡第36次-1調査	兵庫区上沢通8丁目4-32-36	神戸市教育委員会	川上 厚志 40㎡ 80㎡	11. 10. 12~11. 10. 21	弥生中期 墓穴住居1棟・土坑2基 奈良 ピット1基 中世 土坑2基・ピット1基	分譲住宅建設 (国庫補助事業)
26	上沢遺跡第36次-2調査	兵庫区上沢通7丁目1-12	神戸市教育委員会	石島 三和 155㎡ 155㎡	12. 1. 11~12. 1. 19	古墳初期 溝	店舗兼個人住宅建設 (国庫補助事業)
27	芦原地区	北区有野町芦原	神戸市教育委員会	川上 厚志 45㎡ 45㎡	11. 4. 15~11. 4. 22	試掘調査 免見通知なし	区画整理事業 (国庫補助事業)
28	五番町遺跡第7次調査	長田区西落合5丁目	神戸市体育協会	阿部 敏生 370㎡ 370㎡	11. 5. 26~11. 6. 27	古墳前期 溝路・溝 時期不明 ピット	山手幹線街路整備
29	長田南遺跡第2次調査	長田区五番町5丁目	神戸市教育委員会	谷 正俊 38㎡ 114㎡	12. 2. 23~12. 3. 8	鶴文後期～弥生前期 溝路伏落ち込み 弥生中期～後期 ピット15基 弥生末 溝2条 平安末 ピット4	個人住宅建設 (国庫補助事業)
30	長田南遺跡第3次調査	長田区五番町8丁目	神戸市教育委員会	富山 直人 38㎡ 38㎡	11. 6. 11~11. 6. 16	弥生後期 溝2条・落ち込み3ヶ所	店舗建設 (国庫補助事業)
31	御坂遺跡 第14次-1～23調査	長田区御坂通5・6丁目	神戸市教育委員会	安田・山本・細 板井・内藤・河原 高橋・山口・山田 1,371㎡ 2,179㎡	11. 4. 14~12. 3. 31	飛鳥～奈良 墓立柱建物 (H12年度報告書刊行済)	区画整理事業
32	御坂遺跡 第17次-1～6調査	長田区御坂通4丁目	神戸市体育協会	西岡・安田 池田・阿部 中野 539㎡ 539㎡	11. 6. 14~11. 12. 21	飛鳥 墓立柱建物1棟 奈良 水源め1基・溝・落ち込み (H12年度報告書刊行済)	区画整理事業
33	御坂遺跡第21次調査	長田区御坂通4丁目14番地13・14	神戸市教育委員会	谷 正俊 200㎡ 200㎡	11. 6. 4~11. 6. 24	飛鳥～奈良 墓立柱建物1棟 時期不明 溝	郭便賀兼個人住宅建設 (国庫補助事業)
34	御坂遺跡第22次調査	長田区御坂通5丁目	神戸市体育協会	池田 裕功 150㎡ 150㎡	11. 6. 8~11. 7. 8	古墳末～平安 岩穴・溝・落ち込み	留吉寺第2住宅建設

平成11年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（3）

No.	調査名	所在地	調査主体	調査担当者 延岡直樹	面積 m <sup>2</sup>	調査期間	調査内容	調査原因
35	御城遺跡第24次～1調査	長田区御城通6丁目21街区1	神戸市教育委員会	阿部 功	18m <sup>2</sup> 54m <sup>2</sup>	11. 7. 6～11. 7. 26	飛鳥～奈良 溝・土坑 奈良～平安 溝2条	個人住宅建設 (国庫補助事業)
36	御城遺跡第24次～2調査	長田区御城通6丁目	神戸市教育委員会	川上 厚志	120m <sup>2</sup> 480m <sup>2</sup>	11. 8. 11～11. 9. 6	飛鳥 溝10条・ビット8基 奈良 溝・ビット 奈良～平安 土坑2基・ビット6基	個人住宅建設 (国庫補助事業)
37	御城遺跡第25次調査	長田区御城通5丁目	神戸市教育委員会	池田 敏	55m <sup>2</sup> 110m <sup>2</sup>	11. 8. 19～11. 8. 20	古墳初期 溝1条・ビット 奈良～平安 溝1条	個人住宅建設 (国庫補助事業)
38	御城遺跡第26次調査	長田区御城通5丁目46～56、60	神戸市教育委員会	川上 厚志	100m <sup>2</sup> 100m <sup>2</sup>	11. 9. 3～11. 9. 30	古墳初期 土器塗り 飛鳥 潟	個人住宅建設 (国庫補助事業)
39	御城遺跡第27次調査	長田区御城通5丁目6～90～9	神戸市教育委員会	谷 正俊	24m <sup>2</sup> 24m <sup>2</sup>	11. 9. 8～11. 9. 13	弥生末～古墳初期 水田跡群	個人住宅建設 (国庫補助事業)
40	御城遺跡第28次調査	長田区御城通4丁目9～21ほか	神戸市教育委員会	富山 直人	40m <sup>2</sup> 80m <sup>2</sup>	11. 9. 9～11. 9. 10	平安～鎌倉 溝1条	個人住宅建設 (国庫補助事業)
41	御城遺跡第29次調査	長田区御城通5丁目	神戸市教育委員会	川上 厚志	72m <sup>2</sup> 72m <sup>2</sup>	11. 10. 4～11. 10. 7	検出遺構なし	個人住宅建設 (国庫補助事業)
42	御城遺跡第30次調査	長田区御城通4丁目10～1、9～11ほか	神戸市教育委員会	佐伯 二郎	45m <sup>2</sup> 45m <sup>2</sup>	11. 10. 13～11. 10. 22	飛鳥～平安 溝6条・土坑5基・柱穴	個人住宅建設 (国庫補助事業)
43	御城遺跡第31次～1・2調査	長田区御城通4丁目	神戸市体育協会	口野 博史 佐伯 二郎	99m <sup>2</sup> 99m <sup>2</sup>	11. 10. 13～12. 3. 2	飛鳥～平安 土坑・溝・ビット	国連2号線並塀
44	御城遺跡第32次調査	長田区御城通4丁目10～11～13ほか	神戸市教育委員会	佐伯 二郎	63m <sup>2</sup> 63m <sup>2</sup>	11. 10. 26～11. 11. 11	飛鳥～平安 無立柱建物2棟・柱穴・溝	個人住宅建設 (国庫補助事業)
45	御城遺跡第33次調査	長田区御城通4丁目23～1ほか	神戸市教育委員会	富山 直人	100m <sup>2</sup> 100m <sup>2</sup>	11. 11. 2～11. 11. 19	13世紀前半 溝3条	店舗兼個人住宅建設 (国庫補助事業)
46	御城遺跡第34次調査	長田区御城通5丁目53～3、4	神戸市教育委員会	佐伯 二郎	64m <sup>2</sup> 64m <sup>2</sup>	11. 11. 16～11. 11. 18	時期不明 溝1条	店舗兼個人住宅建設 (国庫補助事業)
47	御城遺跡第35次調査	長田区御城通4丁目7	神戸市教育委員会	口野 博史	144m <sup>2</sup> 144m <sup>2</sup>	12. 1. 25～12. 2. 3	奈良後半～平安 柱穴2基・溝2条・落ち込み2ヶ所	店舗兼個人住宅建設 (国庫補助事業)
48	御城遺跡第36次調査	長田区御城通6丁目	神戸市教育委員会	黒田 義正	42m <sup>2</sup> 42m <sup>2</sup>	12. 2. 18～12. 2. 29	時期不明 ビット11基・落ち込み	個人住宅建設 (国庫補助事業)
49	神奈遺跡第13次調査	長田区神奈町3丁目	神戸市体育協会	西岡 巧次	100m <sup>2</sup> 100m <sup>2</sup>	11. 8. 18～11. 9. 6	中世 水田跡1条	区画整理事業
50	神奈遺跡 水笠遺跡 松野遺跡	長田区神奈通3丁目・水笠通2丁目・松野通1丁目ほか	神戸市教育委員会	川上 厚志	300m <sup>2</sup> 300m <sup>2</sup>	11. 7. 22～11. 8. 9	試掘調査 遺構・遺物包含確認	区画整理事業
51	水笠遺跡第1次調査	長田区水笠通3丁目	神戸市体育協会	安田 達 中村 さやか	593m <sup>2</sup> 593m <sup>2</sup>	11. 8. 23～11. 9. 30	弥生中期 溝・ビット	区画整理事業

平成11年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）(4)

番	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
52	水笠道路第2次調査	長田区水笠通3丁目	神戸市体育協会	谷 正康 53㎡ 53㎡	11.11.26~11.12.2	弥生 漢2条	個人住宅建設 (国庫補助事業)
53	水笠道路第3次調査	長田区水笠通3丁目5-1	神戸市体育協会	谷 正康 50㎡ 50㎡	12.1.17~12.1.19	時期不明 ピット1基	個人住宅建設 (国庫補助事業)
54	松野道路 第6次～1～4調査	長田区若松町7丁目	神戸市教育委員会	口野 博史 富山 直人 中村さやか 474㎡	11.4.14~12.3.27	古墳時代後期 独立柱建物、穴式住居 縄文時代初期 独立柱建物、井戸 (H12年度報告書刊行済)	市街地再開発 (国庫補助事業)
55	松野道路 第7次～1～3調査 No.23	長田区若松町6丁目	神戸市体育協会	口野 博史 中村さやか 442㎡ 442㎡	11.5.6~12.3.31	古墳時代後期 清 縄文時代初期 井戸、ピット、溝 (H11年度報告書刊行済)	市街地再開発 課金収集事業
56	松野道路 第10次～1～20調査	長田区松野通4丁目	神戸市体育協会	口野 博史 富山 直人 阿部・岡田 1,366㎡ 1,366㎡	11.8.4~12.3.15	弥生前期？ 清 古墳 墓 中世 ピット	区画整理事業
57	松野道路第11次調査	長田区松野通4丁目	神戸市教育委員会	山本 雅和 56㎡ 56㎡	11.8.17~11.8.23	平安末～鎌倉初期 清3条・ピット	工場建設 (国庫補助事業)
58	松野道路第12次調査	長田区松野通4丁目	神戸市教育委員会	阿部 駿生 中谷 正 33㎡ 33㎡	11.11.19~11.11.24	検出遺構なし	個人住宅建設 (国庫補助事業)
59	松野道路第13次調査	長田区松野通4丁目	神戸市教育委員会	口野 博史 18㎡ 18㎡	11.11.29~11.12.3	古墳 清1条・ピット 縄文 落ち込み1ヶ所・ピット 近世 井戸	個人住宅建設 (国庫補助事業)
60	松野道路第14次調査	長田区松野通4丁目	神戸市体育協会	富山 直人 48㎡ 48㎡	12.1.13~12.1.19	12世紀後半～13世紀末 ピット20基	個人住宅建設 (国庫補助事業)
61	松野道路第15次調査	長田区松野通4丁目	神戸市教育委員会	富山 直人 50㎡ 50㎡	12.2.15~12.2.22	時期不明 清4条・ピット1基	個人住宅建設 (国庫補助事業)
62	松野道路第16次調査	長田区松野通4丁目	神戸市教育委員会	富山 直人 100㎡ 100㎡	12.2.15~12.2.22	時期不明 清1条・ピット1基	個人住宅建設 (国庫補助事業)
63	二葉町道路 第9次～1～4調査	長田区駒町6丁目 二葉町6丁目	神戸市体育協会	安田・瀬田 中谷・中堀 1,545㎡ 1,545㎡	12.8.3~12.8.29	12世紀前半～13世紀半 独立柱建物 木棺墓・井戸 (H12年度報告書刊行済)	市街地再開発 (国庫補助事業)
64	二葉町道路第9次調査	長田区駒町5丁目7	神戸市体育協会	浅谷 誠吾 500㎡ 500㎡	12.2.28~12.3.29	6世紀 土坑・清 中世 新作痕	市街地再開発 (国庫補助事業)
65	若松町道路第3次調査	長田区若松町11丁目	神戸市教育委員会	川上 厚志 42㎡ 42㎡	11.11.18~11.11.24	中世 ピット4基	個人住宅建設 (国庫補助事業)
66	戎町道路第28次調査	須磨区戎町3丁目15	神戸市教育委員会	川上 厚志 80㎡ 170㎡	11.11.2~11.11.17	弥生中期初頭 清4条・柱穴3基 古墳後周 清	共同住宅建設 (国庫補助事業)
67	須磨大津の遺跡 第3次調査	須磨区天神町5丁目	神戸市体育協会	西脇 巧次 浅谷 誠吾 100㎡ 100㎡	11.5.21~11.6.10	中世 落ち込み1ヶ所	須磨中央幹線道路整備
68	下細地区	垂水区下細町鶴見山	神戸市教育委員会	富山 直人 70㎡ 70㎡	11.4.27~11.5.7	試掘調査 発見遺構なし	区画整理事業 (国庫補助事業)

平成11年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（5）

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者 総調査面積	撮影面積 調査期間	調査内容	調査原因
69	垂水日向遺跡第32次調査	垂水区日向1丁目	神戸市体育協会	内藤 健哉 130m <sup>2</sup>	11. 11. 2～11. 11. 26	中世 潟・自然流路	市街地再開発
					130m <sup>2</sup>		
70	舞子古墳群	垂水区舞子2丁目81番地ほか	神戸市教育委員会	富山 道人 100m <sup>2</sup>	12. 3. 25～12. 3. 31	試掘調査 古墳填土觀・溝渠	宅地造成 (国庫補助事業)
					100m <sup>2</sup>		
71	赤羽遺跡第1次調査	西区伊川谷町瀬戸和字大狂言1501-1ほか	神戸市教育委員会	山本 雅和 160m <sup>2</sup>	11. 7. 7～11. 7. 16	平安中期～後期初期 柱穴・落ち込み 柱穴・ピット	共同住宅建設 (国庫補助事業)
					160m <sup>2</sup>		
72	寒風遺跡第7次調査	西区伊川谷町瀬戸和字寒風	神戸市教育委員会	西岡 誠司 937m <sup>2</sup>	11. 10. 25～12. 1. 11	古墳後期 大量埴輪堆积・雨立柱建物 壁穴柱頭・排列・土坑・溝 ピット	共同住宅建設 (国庫補助事業)
					937m <sup>2</sup>		
73	新方遺跡	西区伊川谷町瀬戸和字新方875-1	神戸市教育委員会	黒田 義正 34m <sup>2</sup>	11. 4. 9～11. 4. 20	弥生 自然流路 5世紀～平安後期 段状構造・溝	宅地造成 (国庫補助事業)
					102m <sup>2</sup>		
74	新方遺跡野手西方地区第4次調査	西区玉津町西河原字野手	神戸市教育委員会	山本 雅和 125m <sup>2</sup>	11. 4. 1～11. 5. 27	古墳中期後半 壁穴住居1棟 古墳末・土坑	区画整理事業 (国庫補助事業)
					575m <sup>2</sup>		
75	新方遺跡野手西方地区第5次調査	西区玉津町西河原字野手・字西方	神戸市教育委員会	山口 真正 茂谷 誠吾 1,900m <sup>2</sup>	11. 8. 23～11. 12. 24	弥生前期後半以前 柱穴・区画溝 弥生中期 木棺墓 古墳中期～後期初期 壁穴住居	区画整理事業 (国庫補助事業)
					800m <sup>2</sup>		
76	新方遺跡野手西方地区第6次調査	西区玉津町西河原字野手	神戸市教育委員会	山口 真正 600m <sup>2</sup>	12. 3. 6～12. 3. 31	弥生中期後半 自然流路1条 古墳前期 土坑1基・用途不明遺構1 12世紀後半～13世紀前半 土坑2基	区画整理事業 (国庫補助事業)
					300m <sup>2</sup>		
77	今津遺跡第13次調査	西区玉津町今津字岡下・字今津	神戸市教育委員会	黒田 義正 36m <sup>2</sup>	12. 3. 22～12. 3. 28	弥生以降 自然流路2条 中世 土坑・ピット	宅地造成 (国庫補助事業)
					36m <sup>2</sup>		
78	日輪寺守遺跡第7次調査	西区玉津町小山字日輪寺561-16	神戸市教育委員会	山本 雅和 720m <sup>2</sup>	12. 3. 21～12. 3. 31 (H11年度継続)	伐採・遺構面被出中	宅地造成 (国庫補助事業)
					720m <sup>2</sup>		
79	小山遺跡第4次調査	西区玉津町小山屋寺	神戸市教育委員会	須藤 宏 200m <sup>2</sup>	12. 2. 29～12. 3. 24	弥生前期 土坑2基 時期不明 壁立柱建物1棟・溝 古墳初期 ? 墓園跡	共同住宅建設 (国庫補助事業 接分)
					200m <sup>2</sup>		
80	小山遺跡第5次調査	西区玉津町小山43街区3	神戸市教育委員会	富山 道人 32m <sup>2</sup>	12. 3. 5～12. 3. 23	時期不明 ピット1基	共同住宅建設 (国庫補助事業)
					32m <sup>2</sup>		
81	神出古窯社群	西区神出町東字天神前871-1	神戸市教育委員会	谷 正廣 91m <sup>2</sup>	12. 2. 4～12. 2. 9	平安末 土坑3基・溝1条・ピット11 基・落ち込み2ヶ所	倉庫建設 (国庫補助事業)
					91m <sup>2</sup>		

平成11年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）(1)

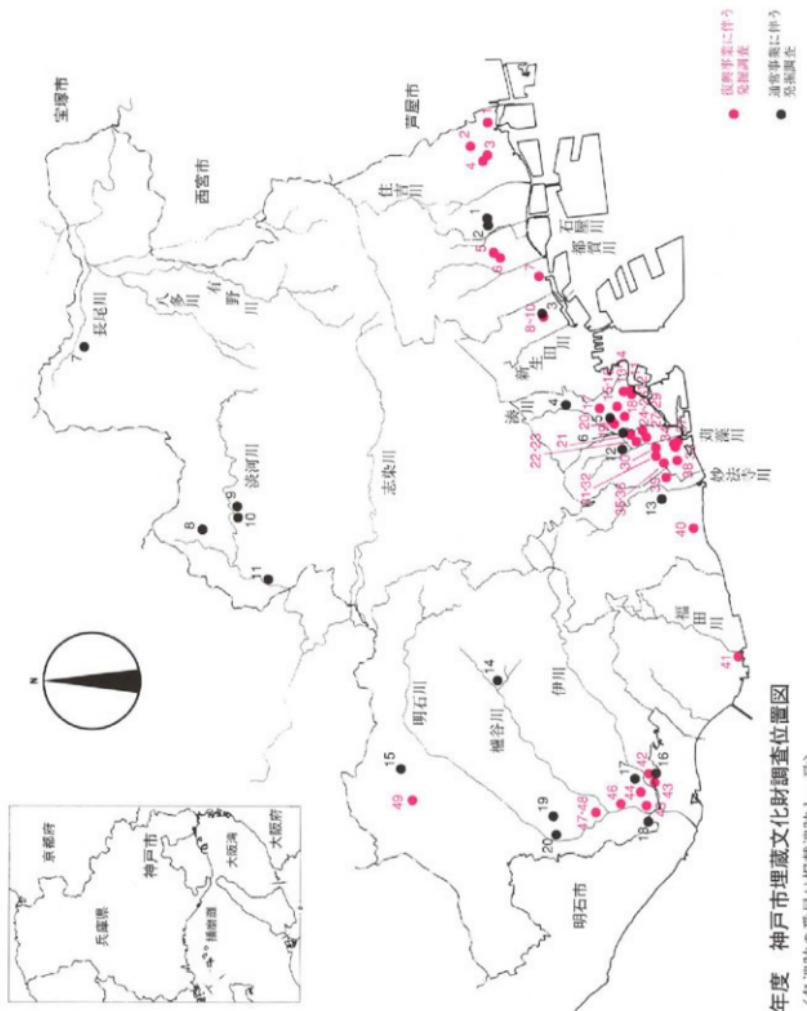
番	調査名	所在地	調査主体	調査担当者 延べ面積	調査期間	調査内容	調査原因
1	難波遺跡第65次調査	東灘区御影町御影字上ノ山1647号	神戸市教育委員会	西野 100m <sup>2</sup> 145m <sup>2</sup>	11.11.9～11.11.19	飛鳥時代 潟 古墳後期 突穴住居・竪柱建物・溝・ 土器窯	店舗建設
2	西平野遺跡	東灘区住吉町1～3丁目、御影町御影、西平野	神戸市教育委員会	川上 厚志 180m <sup>2</sup> 180m <sup>2</sup>	11.12.14～11.12.22	試掘調査 遺物包含構造確認	区域整理事業 (国庫補助事業)
3	西平野遺跡第1次調査	東灘区西平野1丁目	神戸市体育協会	内藤 俊哉 150m <sup>2</sup> 150m <sup>2</sup>	12.2.3～12.3.2	弥生後期 突穴住居1棟 10件記 竪柱建物1棟	区域整理事業
4	相賀遺跡第16次調査	灘区神奈前3丁目 9番	神戸市体育協会	岡野 繁 450m <sup>2</sup> 900m <sup>2</sup>	12.2.2～12.3.31 (H12年度最終)	弥生末 竪柱建物・土坑・石組 近世 水溜め・土坑	公園建設
5	只見遺跡第16次調査	中央区只見川3丁目74～5号ほか	神戸市体育協会	谷 正樹 35m <sup>2</sup> 30m <sup>2</sup>	11.8.5～11.8.13	飛鳥～平安 ピット2基	区域整理事業
6	赤坂遺跡第8次調査	兵庫区上新園4丁目10号ほか	神戸市体育協会	西岡 誠司 152m <sup>2</sup> 456m <sup>2</sup>	11.4.2～11.5.18	弥生後期～古墳前期 溝1条 平安時代 竪柱建物1棟・ピット 平安以降 石列1列	神戸三田駅周辺整備
7	上沢遺跡第33次調査	兵庫区上沢通8丁目8	神戸市体育協会	口野 博史 岡野 雄 600m <sup>2</sup>	11.4.19～11.8.9	弥生後期～古墳前期 土坑2基 弥生末 突穴住居1棟・溝6条 古墳時代 井干1基(井干掘)・掘跡	公園建設
8	上沢遺跡第35次調査	長田区五番町3丁目	神戸市体育協会	佐伯 二郎 石島 一和 600m <sup>2</sup>	12.2.2～12.3.7	古墳中期 突穴住居1棟・溝1条・上 段1基、セト21基 (H11年度に報告書刊行済)	公園建設
9	奉山山城第7次調査	北区長尾町上津字 西高津	神戸市体育協会	西岡 誠司 311m <sup>2</sup> 311m <sup>2</sup>	11.8.5～11.10.21	本丸・櫓石・土坑・溝・ピット 二の丸・堀切	区域整理事業
10	附物遺跡	北区八多町附物	神戸市教育委員会	川上 勲志 97m <sup>2</sup> 95m <sup>2</sup>	11.4.12～11.4.14	試掘調査	埋場監修事業 (国庫補助事業)
11	木ノ元遺跡	北区淡河町南櫛尾 字木ノ元	神戸市教育委員会	西岡 巧次 34m <sup>2</sup>	12.2.14～12.2.18	確認調査 ピット5基	埋場監修事業 (国庫補助事業)
12	木ノ元遺跡第3次調査	北区淡河町南櫛尾 字木ノ元	神戸市体育協会	西岡 巧次 400m <sup>2</sup> 400m <sup>2</sup>	12.1.6～12.3.1	15世紀 落ち込み1ヶ所 時期不明 土坑1基・ピット	埋場監修事業
12	西北遺跡第1次調査	北区淡河町南櫛尾 字西北	神戸市体育協会	佐伯 二郎 阿部 敏生 阿部 功 1,800m <sup>2</sup>	11.4.1～11.7.25	13世紀 竪柱建物1棟 16世紀後半 突柱建物・水溜め (H11年度に報告書刊行済)	埋場監修事業
12	西北遺跡第2次調査	北区淡河町南櫛尾 字西北	神戸市体育協会	佐伯 二郎 河原 功 1,600m <sup>2</sup> 1,600m <sup>2</sup>	11.6.3～11.7.25	16世紀後半 水溜め・土坑・溝 (H11年度に報告書刊行済)	埋場監修事業
12	平井遺跡第2次調査	北区淡河町南櫛尾 字平井沢	神戸市体育協会	西岡 巧次 中谷 正 887m <sup>2</sup> 887m <sup>2</sup>	11.7.23～11.10.8	中世 ピット 時期不明 水溜め・土坑 (H11年度に報告書刊行済)	埋場監修事業
13	淡河木津遺跡第2次調査	北区淡河町木津	神戸市体育協会	西岡 巧次 浅谷 浩吾 1,000m <sup>2</sup> 1,050m <sup>2</sup>	11.4.14～11.5.18	中世 竪柱建物1棟・ピット 近世以降 井干1基	埋場監修事業
11	戎原遺跡第10次調査	北区淡河町戎原字 戎ヶヶ位置K27	神戸市教育委員会	西岡 巧次 266m <sup>2</sup> 265m <sup>2</sup>	12.1.18～12.2.24	中世 河道陥落ち込み・水溜め2基・ 溝2条	埋場監修事業 (国庫補助事業)

平成11年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）（2）

Su	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者 延誤在至候	探査面積 m <sup>2</sup>	調査期間	調査内容	調査原因
14	勝坂遺跡 第6次 1調査	北区淡河町勝坂	神戸市体育協会	池田 級	700m <sup>2</sup> 700m <sup>2</sup>	11. 11. 2 ~ 11. 12. 22	12世紀後半~13世紀前半 溝・ピット 落ち込み	圃場整備事業 （国庫補助事業）
15	勝坂遺跡 第6次 1・2調査	北区淡河町勝坂	神戸市体育協会 阿部 駿生	池田 級 阿部 駿生	160m <sup>2</sup> 160m <sup>2</sup>	12. 12. 15 ~ 12. 3. 29	中世 陶板状施設・土坑・復塗？ 近世鉄道 潟	圃場整備事業 （国庫補助事業）
16	長田社境内遺跡 第13次調査	長田区長田町2丁目	神戸市教育委員会	山本 審和 中西さくら	116m <sup>2</sup> 116m <sup>2</sup>	11. 10. 29 ~ 11. 11. 12	弥生後期 溝1条 弥生末 墓穴住居1棟 近世鉄道 潟	雨水管布設
17	三葉町遺跡第10次調査	長田区久保町6丁目	神戸市体育協会	佐伯 二郎 池田 級	150m <sup>2</sup> 150m <sup>2</sup>	12. 3. 6 ~ 12. 3. 31	中世 溝3条・ピット	雨水管布設
18	大手町遺跡第5次調査	須磨区大手町4丁目	神戸市体育協会	中谷 正	490m <sup>2</sup> 490m <sup>2</sup>	12. 1. 6 ~ 12. 3. 1	弥生中期 土坑4基・溝1条 弥生後期 土坑・壁穴住居2棟 古墳後期 墓立柱植物1株	山麓斜面築造
19	寺谷地区	西区樋谷町寺谷字 松原はか	神戸市教育委員会	西岡 巧次	220m <sup>2</sup> 220m <sup>2</sup>	11. 12. 6 ~ 11. 12. 27	試掘調査 中世 土坑・ピット	圃場整備事業 （国庫補助事業）
20	城ヶ谷砦	西区樋谷町福谷字 城ヶ谷709・732	神戸市教育委員会	阿部 功	74m <sup>2</sup> 74m <sup>2</sup>	11. 6. 3 ~ 11. 6. 10	試掘調査 縄文 溝1条・土坑3基・廃土坑2 基・ピット18基	神戸経済緑化路整造 （国庫補助事業）
21	城ヶ谷砦第1次調査	西区樋谷町福谷字 城ヶ谷	神戸市体育協会	佐伯 二郎	887m <sup>2</sup> 887m <sup>2</sup>	11. 7. 23 ~ 11. 10. 8	14~15世紀 漬切り・曲輪 16世紀 上塙	神戸経済緑化路整造
22	城ヶ谷砦	西区樋谷町福谷	神戸市教育委員会	佐伯 二郎	86m <sup>2</sup> 86m <sup>2</sup>	11. 9. 7 ~ 11. 10. 6	縄文調査 14~15世紀 漬切り	神戸経済緑化路整造 （国庫補助事業）
23	樋谷遺跡第1次調査	西区樋谷町樋谷	神戸市体育協会	同部 功	69m <sup>2</sup> 69m <sup>2</sup>	11. 12. 8 ~ 11. 12. 10	中世 落ち込み2ヶ所	雨水管布設
24	長坂遺跡	西区伊川谷町長坂	神戸市体育協会	山野 博史	209m <sup>2</sup> 209m <sup>2</sup>	11. 11. 5 ~ 11. 11. 19	中世 溝1条	雨水管布設
25	青谷南遺跡	西区玉津町水谷	神戸市教育委員会	富山 健人 中谷 正	284m <sup>2</sup> 284m <sup>2</sup>	11. 5. 20 ~ 12. 3. 31	試掘調査 弥生土器・石棒出土上	桜林施設改修 （国庫補助事業）
26	西町第62地点遺跡 第10次調査	西区樋谷町新野字 北1663-3	神戸市体育協会	西岡 誠司	76m <sup>2</sup> 76m <sup>2</sup>	11. 5. 26 ~ 11. 6. 11	古墳後期 土坑2基	青谷新木桜林改修
27	神出古窯址群	西区神出町東30番 2	神戸市教育委員会	川上 厚志	54m <sup>2</sup> 54m <sup>2</sup>	11. 6. 23 ~ 11. 7. 5	中世 粘土窯跡	個人住宅建設 （国庫補助事業）
28	寒風遺跡第5次調査	西区伊川谷町寒風 字寒風・イガキ組 ほか	神戸市体育協会	中谷 正	80m <sup>2</sup> 80m <sup>2</sup>	11. 5. 12 ~ 11. 5. 20	古墳後期 墓穴住居1棟・大型土坑1 基・土坑1基・ピット1基	雨水管敷設
29	寒風遺跡第6次調査	西区伊川谷町寒風 字1748	神戸市体育協会	西岡 巧次	48m <sup>2</sup> 48m <sup>2</sup>	11. 9. 8 ~ 11. 9. 30	古墳時代 墓穴住居1棟・溝1条・ピッ ト24基	玉津島引附路築造
30	新方遺跡	西区伊川谷町新方	神戸市教育委員会	川上 厚志	80m <sup>2</sup> 80m <sup>2</sup>	12. 3. 3 ~ 12. 3. 30	弥生末~古墳初期 溝1条・ピット9 基・落ち込み1ヶ所	工場整備

平成11年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）（3）

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
31	古田南遺跡	西区森友1丁目	神戸市教育委員会	山口 勇正 浅谷 錦苔 1,220㎡ 2,440㎡	11. 5. 24～11. 8. 9	奈良後半～平安前期 獨立柱建物3棟 ・壇	玉津丸堀周縁池 堆設
32	西戸田遺跡第6次調査	西区平野町西戸田字原地	神戸市体育協会	阿部 功 160㎡ 160㎡	12. 2. 23～12. 3. 2	中世 土坑1基	神戸二見緑道改設
	玉津町中遺跡 平野地区第15次調査	西区平野町芝崎 初中・中津	神戸市体育協会	池田 敏 1,600㎡ 1,600㎡	11. 4. 1～11. 4. 14	埋め戻し	道路改設
33	玉津町中遺跡 平野地区第16次調査	西区平野町中津	神戸市体育協会	阿部 功 96㎡ 96㎡	11. 10. 25～12. 1. 26	弥生中期～後期 土坑 弥生末～古墳初期 土坑 古墳中期 壇	塗装実測跡水質布設
34	楠・窓田町遺跡	中央区楠町7丁目	兵庫県教育委員会	久保 弘幸 黒川 美紀 350㎡ ㎡	11. 4. 12～11. 4. 21	12世紀 獨立柱建物・柱穴・溝 近世後期 壇	病棟建設
35	楠・窓田町遺跡	兵庫区窓田町2丁目1～15	兵庫県教育委員会	藤田 淳 仁尾 一人 942㎡ ㎡	11. 10. 19～11. 12. 27	弥生 溝・柱穴・土坑 家町 井戸・溝・柱穴・土坑 江戸時代以降 溝・穴倉・井戸・柱穴	病院施設建設
36	御船遺跡	長田区大瀬通1丁目	兵庫県教育委員会	甲斐 審光 川村 憲也 37㎡ ㎡	11. 5. 17～11. 5. 19	中世 ピット1基 (平成12年度の調査の結果、獨立柱建物の一基と判明)	道路建設
37	御船遺跡	長田区大瀬通2丁目12	兵庫県教育委員会	藤田 淳 仁尾 一人 135㎡ ㎡	11. 4. 19～11. 4. 27	弥生末～古墳初期 土坑 古墳 溝 鍛冶床 土坑	道路建設
38	梅子浜遺跡	垂水区東梅子町	兵庫県教育委員会	確定・村上 山上・小川 25㎡ ㎡	11. 4. 19～11. 5. 15	古墳 円筒埴輪2基 男性人骨保存(2号棺)	公園整備
39	新木遺跡	西区植木町香野	兵庫県教育委員会	甲斐 昭光 川村 健也 田中 秀明 5,497㎡ ㎡	11. 9. 30～12. 3. 17	13世紀初頭 墓敷地2・溝路	道路建設



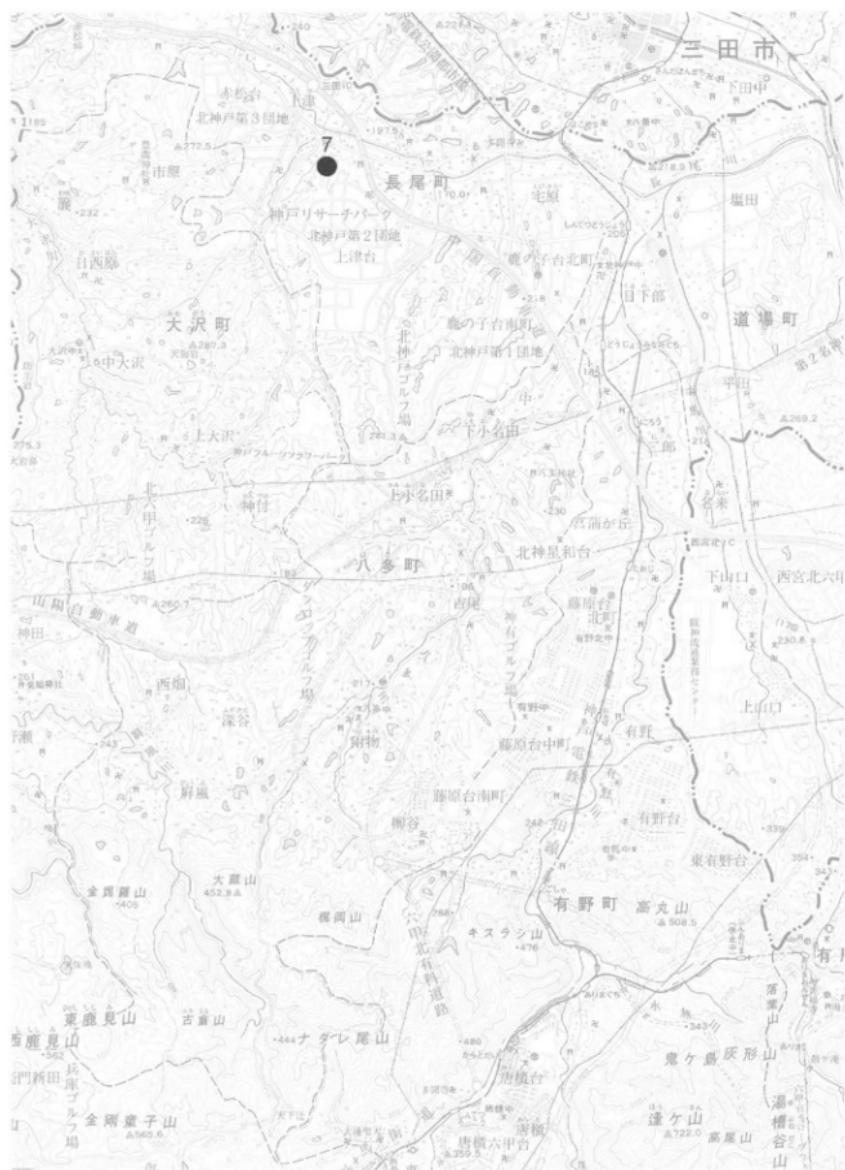
平成11年度 神戸市埋蔵文化財調査位置図  
(各遺跡の番号は堀越道跡と一致)



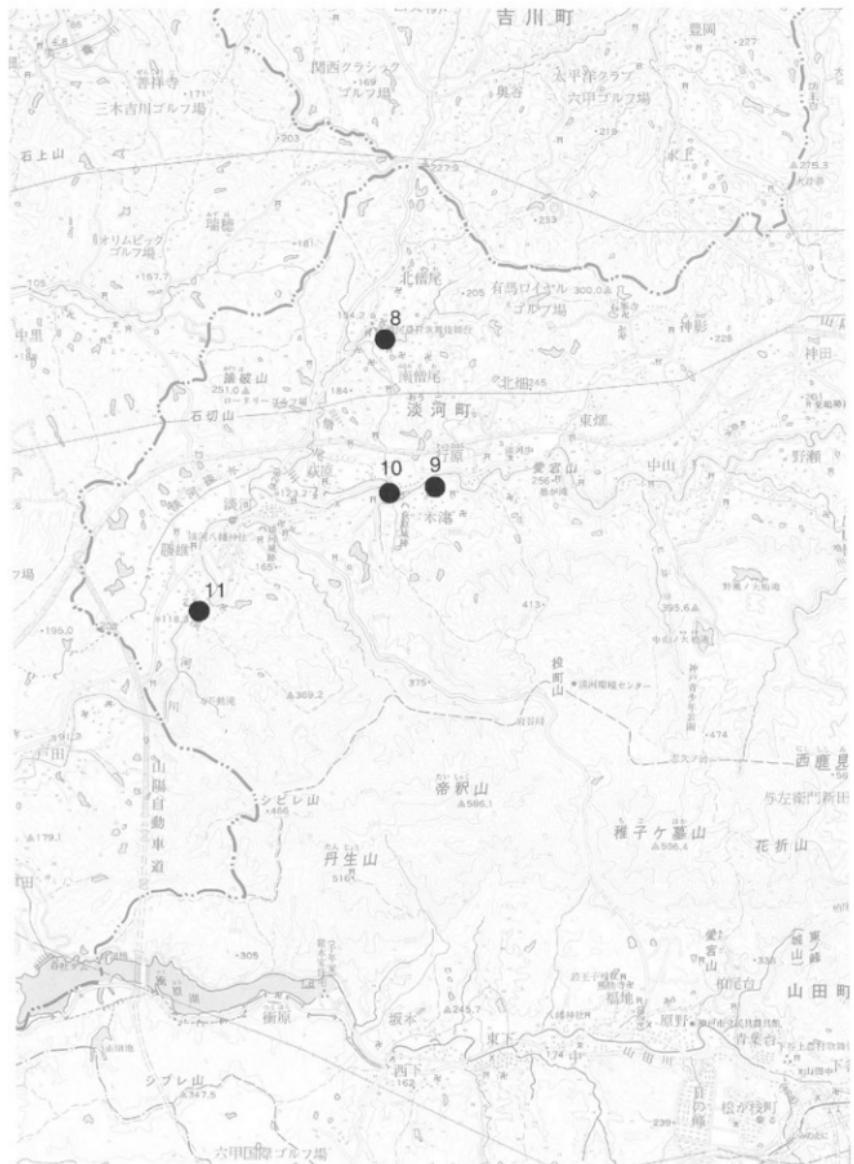
調査地点位置図 1



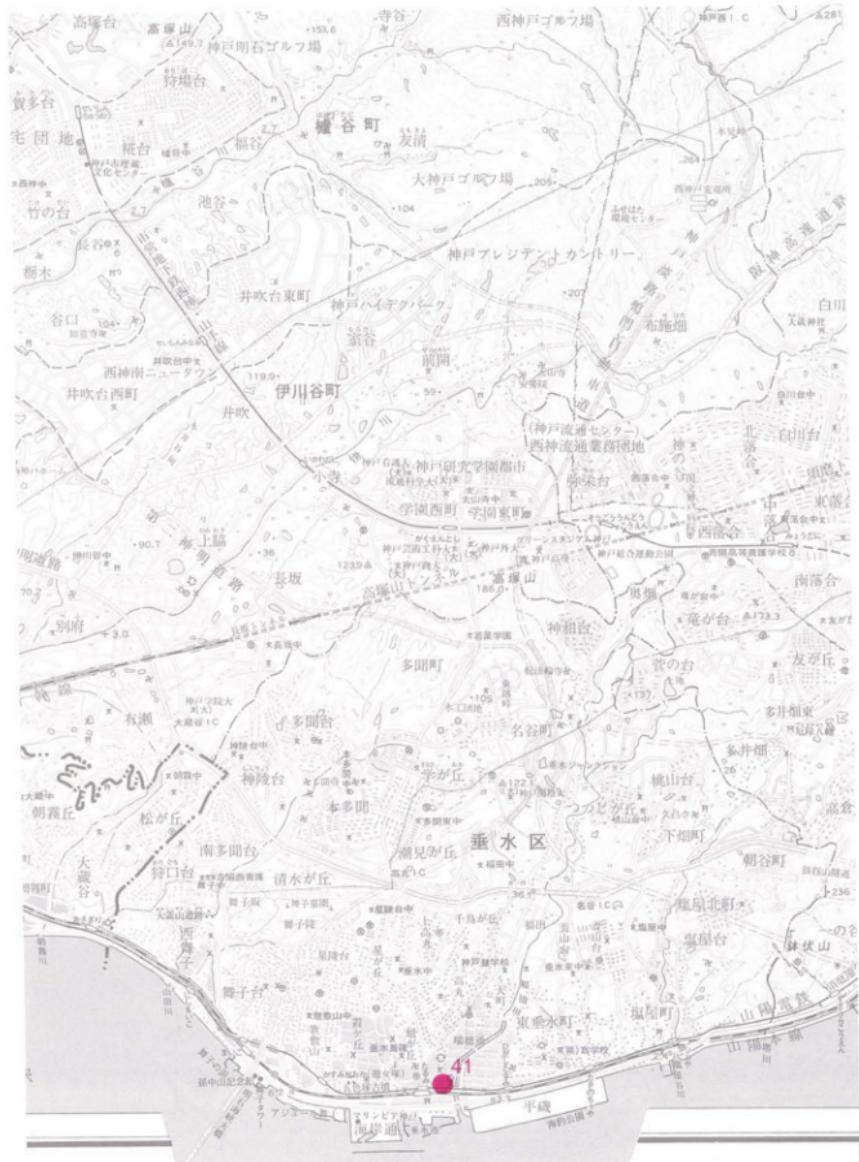
調査地点位置図 2



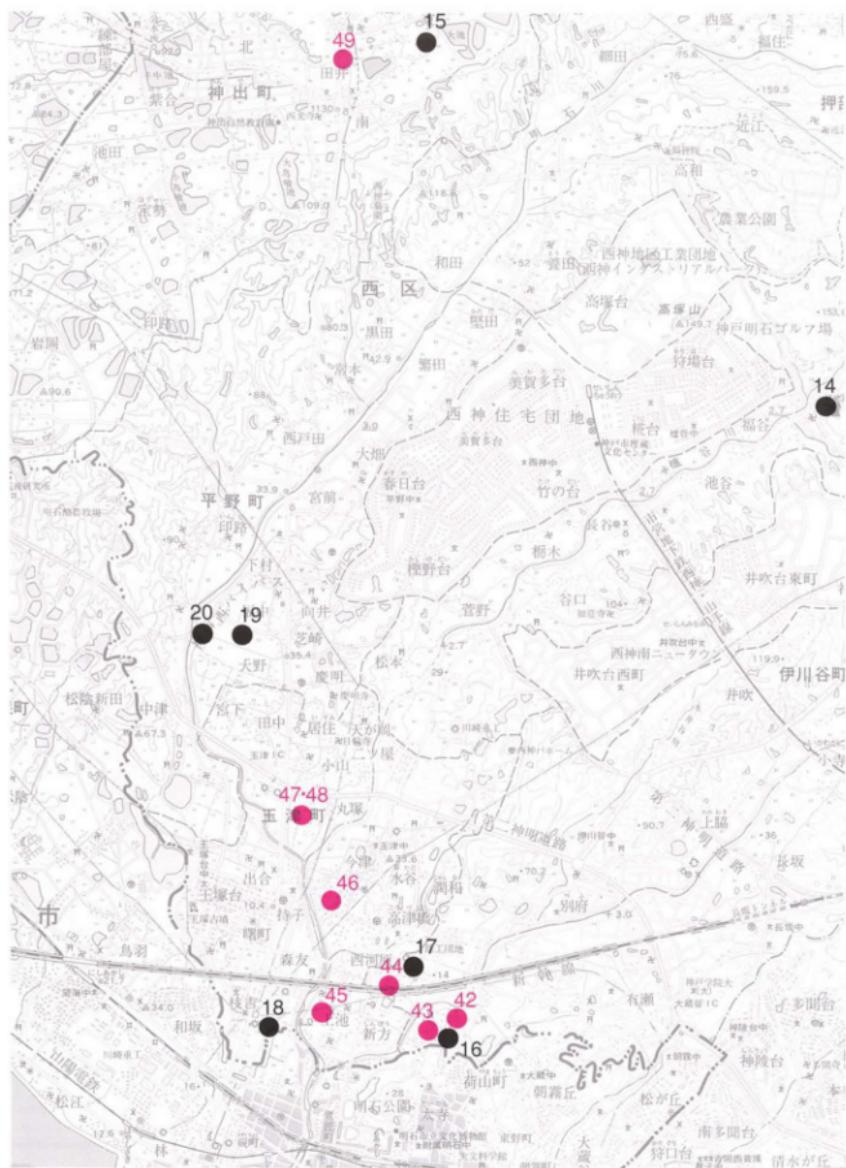
### 調査地点位置図 3



#### 調査地点位置図 4



## 調査地点位置図 5



### 調査地点位置図 6

## II. 復興調査の5年間を振り返って

### 1. はじめに

あの未曾有の大惨事と多くの犠牲者を出した兵庫県南部地震から5年が経過した。震災時の埋蔵文化財行政の指針を示した国「基本方針」の適用期間も終了した。この5年間を振り返って、我々の埋蔵文化財行政という部門が果して市民に理解され、受け入れられたか。また、非常時における埋蔵文化財保護のあり方を模索した結果、後世の批判を招くことがないよう必要最低限の調査を行なう方針で臨んだが、これで妥当であったのか。これらの点を以下に検討してみたい。

### 2. 震災直後の市民の反応

大規模の災害に見舞われて、自身や家族の生活再建のことで頭が一杯の市民にとって、住宅建築に先立ち、埋蔵文化財保護のための発掘調査が必要となるという事態は、恐らく念頭にはなかったことだろう。混乱した状況の中でもいち早く住宅を建て、生活の場を確保することが最優先課題であった。そのような状況の中で発掘調査に協力して頂いた市民には、頭が下がる思いである。発掘調査への協力を取り付けるために、何回となく地元へ説明のために足を運んだ。倒壊した市場の再建にあたる商店主たちの反応は、発掘調査が既に業務として社会的に認知されている以上、それまでは反対しない。速やかな実施を要望するというものであった。また、復興区画整理事業が進められるまちづくり協議会からは、自分たちの居住している地区に文化財が存在するのであれば、十分調査をしたらいいという了解を得た。ただし住民の生活再建の妨げにならないようにという注文つきであったが。また、自分たちの住んでいるところで出土したものを、貴重な遺産として顕彰したいという要望も寄せられ、「11. 町づくりと文化財」の項で述べるように、区画整理地内の公園としてこれらが生かされることになった。<sup>(1)</sup>

### 3. 震災時における文化財保護制度の模索

確かに震災直後には遺跡調査の実施についての戸惑いがあり、実際の復興事業に際し、通常の制度を適用して発掘調査を行うのでは、市民の理解が得にくいと思われた。開発者側からの調査不要論が飛び交う中、埋蔵文化財の保護をどう図るかについて、文化財サイドで震災時の制度や体制の整備を具体化するまでに2ヶ月を要した。この間、既存の制度を非常に適用するのを躊躇させられたが、建築基準法第84条による建築制限や市条例による重点復興地域が定められたことで、無秩序な建築が抑制され、埋蔵文化財の保護上も効果を奏した。公共事業については、平成7年6月に神戸市復興計画が発表されてから、市内部の住宅局・都市計画局と情報交換を密にして、調査に向けての体制作りを進めることができた。

復興事業で予想される調査の費用を公費で負担することや、震災前後で大きな変更がない建物再建の場合の取扱い方針が決定してからは、スムーズに事が進んだ。<sup>(2)</sup>

### 4. 調査費用の公的負担

市内で半壊・半焼以上の住宅被害が129,611棟を越え、住宅に何らかの被害があった罹災証明の発行件数が557,657件に達し、速やかな住宅建設、住宅供給が求められた当時の

情勢下では、非罹災の住宅関係事業者の住宅建築、宅地供給にまで補助制度が拡充されたのは止むを得ない判断であった。しかし震災後3年を経過すると、この制度を利用して公費により、埋蔵文化財調査を済ますという業者が現れてきたのも事実である。しかし、多くの被災市民の協力が得られたのは、生活再建に多額の費用が必要とされる中、少なくとも調査費は公費で補填されたということであった。<sup>(3)</sup>

## 5. 市民の生活再建と復興調査

被災市民の生活再建において、自力再建できた地域と復興区画整理事業・市街地再開発事業区域に編入され、再建に公的制約が加わった地域とで差が生じた。地震の恐怖を体験した市民の多くは二度と倒壊しないような住宅を堅固な地盤の上に建築しようとして、そのための地盤改良や基礎杭打設などの工法を採用した。そのため、比較的規模の小さな個人住宅でも発掘調査が必要となる事態となった。震災直後のことでもあり、建築主でもある被災市民は発掘調査による必要以上の掘削には、神經質になっていた。震災復興調査の特徴ともいえる掘削深度の厳密な遵守を、調査担当者は義務づけられた。こうして市民の意向を汲んだ形で復興調査は始められた。震災復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の保護との調整という課題に答える形で、建築着工までに調査を終了させ、回を重ねるうちに次第に市民の理解を得るようになってきた。<sup>(4)</sup>

平成7年度～平成11年度の文化財保護法各届出件数・発掘調査件数・面積の推移

年 度 届出等	7 年 度	8 年 度	9 年 度	10 年 度	11 年 度	計
法57-1届出	15	5	4	1	1	26
法57-2届出	393	315	218	200	732	1,858
法57-3通知	46	44	26	30	42	188
法57-5、6	8	3	5	6	7	29
法98-2通知	360	234	95	105	96	890
開発事前審査等	231	242	207	151	145	976
試掘調査依頼	301	218	234	222	339	1,314
発掘調査依頼	41	57	65	71	72	306
復興調査件数 面積(㎡)	63 80,949	86 87,913	89 73,376	84 44,107	81 19,781	403 306,126
通常調査件数 面積(㎡)	48 32,716	24 18,515	24 15,085	27 17,970	33 13,085	156 97,371
県支援職員数	8	25	9	4	1	47

\* 法98-2通知件数は、平成9年度から試掘を除外

## 6. 発掘調査の支援体制

震災直後の被災包蔵地調査で、234haに及ぶ地域で今後復興事業が発生すると予測された時点での、神戸市職員のみではこの事態に即応できないことは明らかであった。したがって、当時は復興の妨げになる埋蔵文化財調査という意見が唱かれたのも事実である。しかし、国・県の尽力により全国から専門職員が派遣され、復興事業に大きく影響を及ぼす様な遅滞がなかったことは幸いであった。派遣職員の中には、被災市民の複雑な思いが交錯

した視線を感じながら、住宅密集地で様々な要望や課題を調整しながら行ういわゆる都市型の調査を初めて経験した人もいた。また、補助金の適正な執行という条件の下、種々の制約が課せられる中で、発掘調査を実施していただいた。依頼する側も依頼される側も初めての経験であった。この5年間で403件、面積にして30.6haの復興調査を終えることが出来た。

## 7. 調査支援の課題と問題点

今回の調査支援は、全国から兵庫県教育委員会へ一旦職員を派遣し、その後さらに被災市町へと再派遣される形で実現されたが、最も大きな被害を受けた神戸市では、単独で支援を受け入れる道も模索していた。都市型の同様な調査経験を積んでいる指定都市からの支援を希望していたが、それに実際応じられる市が限られたことと、文化庁からの単独支援の自衛要望があったことから、断念した。

さて復興調査は、派遣側の県の事情によって通常半年以上のサイクル、若しくは3ヶ月単位で人が交代するというシステムで始まった。県の復興調査班と市の受け入れ窓口との調整や情報交換は、現地での立会い等を通じて綿密に行われたと認識しているが、派遣されてきた職員を含めた三者の関係では、十分な意思疎通が図られたとは言い難い。県、市と派遣職員が支援という緩やかな絆で結ばれていたが、三者三様の思いが交錯して、調査支援という新たな仕組みが十分機能する形では結実しなかった。

派遣職員と受け入れ側のスムーズな交流を図る上でも、派遣職員が市町ごとに一定期間固定する方法もあった。災害救助法や自治法上も特に問題はなかったと考える。そうすれば調査地周辺遺跡の理解も深まり、当該市の行政指導の手順や発掘調査の方法についての理解も得られ、職員間の交流も深まることであろう。神戸市では交流促進を図るために、月1度の全体会議の席に派遣職員の出席を要請し、一部実現はされたものの、期待された成果を上げなかつた。また、調査方法について、派遣職員に対する事前の研修やマニュアルがあつてもよかったですという意見もあるが、被災市民の救援活動等で受け入れ準備に時間を割けなかつた地元市立場としては、派遣職員の受け入れ窓口である兵庫県にその作成、調整役を期待したかった。

調査終了後の整理・報告書の作成については、復興調査開始後に10市10町連絡会議の席で具体的に検討されることになった。県市町間で整理作業システムの統一を目指したが、次々と復興調査が優先される中で検討時間も少なく、合意に達しなかつた。各市町間で整理の条件、環境が余りにも異なりすぎた。その結果年報に報告されたもの他、報告書を作成する場合は、派遣職員の個人的努力に帰される形となつた。

今回の支援を通じ、全国各地からの派遣職員相互の人事交流が進み、調査方法の相互比較や検討が派遣された場で行われたのは、副次的といえ予期せぬ成果であったが、その果実が受け入れ側市町職員まで拡がらなかつたのは残念である。

今回の調査支援の教訓から、反省点も含め学ぶべき点があるとすれば、平素から危機管理対策の仕組みを構築していくことだろう。大規模な災害時には、当該地の職員は住民の救済で殆ど所管業務に手を割けない。そのため外部からどのように支援していくべきか。<sup>(5)</sup>今回の事例がその貴重な前例として生かされる事を望みたい。

## 8. 地域文化の発掘 一遺跡の拡大と考古学上の新発見一

震災復興事業に伴って、新たに発見された遺跡や従来の遺跡の範囲がさらに拡大したという事例が相次いだ。都市の復興がすなわち地域文化の発掘と密接に係わっていることが示された。この5年間の復興調査で、市街地の東灘区・須磨区にかけて新発見の遺跡は14ヶ所、範囲が拡大した遺跡は17ヶ所であった。新たに遺跡となったもので主要なものは、東灘区・灘区の御影郷・魚崎郷・西郷の各古酒蔵群、中央区二宮遺跡、同小野柄遺跡、兵庫区兵庫松本遺跡、長田区野田遺跡、同若松町遺跡、同水笠遺跡、須磨区大手町遺跡、同須磨天神町遺跡があり、範囲が拡大した遺跡には、東灘区本山遺跡、同西岡本遺跡、同岡本北遺跡、同住吉宮町遺跡、中央区日暮遺跡、同雲井遺跡、兵庫区上沢遺跡、長田区松野遺跡、同御蔵遺跡、同長田神社境内遺跡、須磨区戎町遺跡、同大田町遺跡などがある。遺跡の拡大ないし包蔵地化については、その後のまちづくり協議会の席で、住民に経済的負担を強いる事柄を、事前に住民への説明もなく、一方的に行政内部で決定することについて、手続き的な点で疑問が提出された。現行制度上の問題はないが、少なくとも事前の住民説明は必要となろう。

考古学的に注目を集める発見があった遺跡として、東灘区本山遺跡（弥生時代前期の木製品出土）、同住吉宮町遺跡（洪水で埋もれた古墳・地震で横ずれした奈良時代の井戸検出）、北区湯山御殿跡（初めての温泉の考古学的調査）、兵庫区兵庫津遺跡（近世兵庫の町家跡検出）、同上沢遺跡（奈良時代の井戸から銅鏡出土）、長田区二葉町遺跡（鎌倉時代の複材構造船出土）、西区新方遺跡（弥生時代前期の人骨検出）などがあげられる。これらの新発見により、神戸の街に豊富な歴史資料が蓄積された。<sup>(6)</sup>

## 9. 文化財の危機管理と復興調査の国際検証

平成9年1月に東京芸術大学主催で国際シンポジウム「災害から文化財を守る」が開催された。緊急時の文化遺産保護のための危機管理対策について討議され、神戸・東京宣言として発表された。既存組織の協力、連携による危機管理体制の構築の重要性が確認された。また平成11年には兵庫県の主導で震災対策国際総合検証が行われ、復興事業に対する埋蔵文化財調査もその対象となった。国内検証委員会・信行氏により、兵庫区、長田区の復興区画整理事業に伴う発掘調査の検証が行われ、神戸では都市の復興事業が地域文化の発掘につながり、都市再開発事業が深く文化復興と係わる側面があることが示された。震災後の発掘調査が日常的に行われる現実から、住民の目や意識に変化が現れ、発掘を行ったことで住民の理解が進んだと触れられている。発掘調査の成果を地域に定着させる試みについて、制度的にわが国では細分化された分野の専門家はいるが、その成果を広く市民に情報提供するコーディネーター的専門家は養成されず、それが課題であると指摘された。<sup>(7)</sup>我々の仕事を別の視点で検証・評価してもらえたのは有難かった。

## 10. 埋蔵文化財行政への反映

震災後の復興調査では、住宅を無くした市民の住宅再建が一気に集中したことや、土地区画整理事業や市街地再開発事業などの土地の区画や形状を変更する事業も多発したため、従来の地図で埋蔵文化財の行政指導の履歴を管理することは困難となってきた。そこで平成9年から街区を標準として、包蔵地図の変更修正を行った。平成11年度には市内全域の

建築確認申請された建築計画の掌握を行うとともに、G I Sを用いた発掘届出システムの構築に着手し、コンピューターで土地の埋蔵文化財情報を一元管理するシステムを確立した。この結果、多数の復興事業に対する多岐にわたる埋蔵文化財の取扱いを地図上で厳密に記録することが可能となり、過去に遡って詳細な調査記録のデーターを管理することも可能となった。

## 11. 町づくりと文化財

復興が進む中、新たに造られる建物や整備された公園に文化財を活用できないかという要望が寄せられた。それに応えて、兵庫区上沢の弥生の里公園内に発掘調査の成果を取り入れたオブジェを置き、長田区御蔵地区集会所やアスタギャラリー、日吉2再開発ビル内に出土品や写真を展示した。地震により住民の構成が変わってしまった地区では、郷土に愛着を持って住みつづける核として文化財を利用できないかという気運が生まれた。文化財を地域住民のアイデンティティの源泉として、地域おこしや町おこしに活用する。これからはこの分野を重視すべきであろう。

## 12. 終わりに

我々の祖先の歩みを知る上で、土中の文化財が大切であるという認識が、神戸市民に果して根付いたかという質問に対し、震災後の市民の反応は冷静かつ好意的であったと答えたい。この5年間市民の暗黙の支持と了解を得て、我々は震災後の埋蔵文化財行政を担うことが出来た。文化財保護法制定後、戦後培ってきた埋蔵文化財保護の一定の水準を、災害時においても維持することができたのは、多くの人々の支援を得たからだと思う。文末にあたり、深く感謝したい。

### 註

- (1) 東灘区小路市場や同区保久良市場、長田区中央市場では市場の関係者からそのような意見を聞いた。  
兵庫区の松本地区まちづくり協議会や上沢地区まちづくり協議会では、遺跡のパネル写真や出土品を会場に持ち込んで説明した。長田区御蔵5・6丁目まちづくり協議会では、300年先に伝える顕彰碑を建設する予定になっている。
- (2) この間の事情は、渡辺伸行「震災復興と神戸市の埋蔵文化財行政」『考古学ジャーナル』435 1998  
参照
- (3) 各年度の復興補助金は以下のとおり（単位 千円）

	事 業 額	執 行 額	継 越 額
平 成 7 年 度	918,278	295,000	623,278
平 成 8 年 度	438,638	628,500	433,458
平 成 9 年 度	330,000	490,000	273,458
平 成 10 年 度	429,438	475,000	227,896
平 成 11 年 度	99,204	250,220	76,880
累 計	2,215,558	2,138,720	1,634,970

- (4) 御菅地区・鷹取東第2地区・新長田駅北地区復興区画整理事業地などでは、仮換地後進やかな調査を実施するために区画整理担当課との緊密な連携をとり、住民の住宅着工に支障をきたさない仕組みを作り上げた。兵庫区兵庫松本遺跡、同上沢遺跡、長田区御藏遺跡等では発掘調査成果を地元住民に公開。また各地の復興調査現場では、調査中途段階から逐次調査内容の紹介を現場の仮説フェンスで広報するなど、多様な方法で住民の理解を得るように努めた。
- (5) 調査支援の課題については、渡辺伸行「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財の調査」『地震災害と考古学 I』日本考古学協会 2000. 3 参照  
復興班の支援を受け調査を実施した遺跡で、報告書を行ったものには以下のものがある。  
 『魚崎中町遺跡 第3次』1998・『住吉宮町遺跡第17・18次』1998・『本山遺跡第22次』1998・  
 『塙井遺跡第8次』1998・『若松町遺跡』2000・『御藏遺跡第8・9・10次』2000・『住吉宮町遺跡第19・20次』2001・『沢の鶴大石巖』2001・『日輪寺遺跡第4～7次』2002・『岡本北遺跡第2次』2002
- (6) 復興調査の成果については、各発掘調査報告書のほか『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』1998～『平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報』2002・神戸市教育委員会『ひょうご復興の街から』1997・神戸市教育委員会『地下に眠る神戸の歴史展刈』1998を参照
- (7) 端 信行「歴史遺産の復旧等、地域文化をめぐる課題とあり方」『阪神・淡路人震災 震災対策国際総合検証事業検証報告』第6巻 兵庫県 2000. 8  
その他参考文献  
 神戸市教育委員会「第4章 教育施設の再建 (2) 社会教育・体育施設の復興」『阪神・淡路大震災 神戸の教育の再生と創造へのあゆみ』1996. 1  
 神戸市『阪神・淡路大震災－神戸市の記録 1995年－』1996. 1  
 杉田年章「神戸市内の文化財等の被害状況と復旧」『季刊 都市政策』第83号 1996. 4  
 国際シンポジウム組織委員会事務局「国際シンポジウム 災害から文化財を守る」資料 1997. 1  
 原書は1997 Kobe/Tokyo International Symposium RISK PREPAREDNESS FOR CULTURAL PROPERTIES Tokyo 1999  
 神戸市教育委員会「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財」『平成6年度 神戸市埋蔵文化財年報』1997  
 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課編「災害から文化財を守る－阪神・淡路人震災文化財復旧・復興事業の記録－第2分冊（埋蔵文化財編）』1999. 3  
 阪神・淡路大震災と埋蔵文化財シンポジウム実行委員会「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財シンポジウム」資料 1999. 12  
 神戸市「第13章文化 第4節埋蔵文化財」『阪神・淡路人震災 神戸復興誌』2000. 1  
 阪神・淡路人震災と埋蔵文化財シンポジウム実行委員会「震災を越えて』2001. 1



fig. 11 震災1年後の復興調査文化庁視察



fig. 12 平成10年度上沢遺跡地元説明会風景

### III. 平成11年度の復興事業に伴う発掘調査

#### 1. 深江北町遺跡 第8次調査

##### 1.はじめに

深江北町遺跡は六甲山南麓、東の芦屋川と西の高橋川にはさまれる沖積地に立地する。当遺跡は神戸市の南東端にあり、東に隣接する芦屋市域には津知遺跡が所在するが、両者は遺跡の時代・性格等が共通しており、同一遺跡として把握できる。

深江北町遺跡は、昭和59年に実施した試掘調査によってその存在が確認され、これまでに7次にわたる調査を実施しており、今回が第8次調査となる（平成8年度に第8次調査として実施し、既に『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』に掲載されている調査の次数については、現在実施している市内各遺跡の調査次数の再検討によって、第7次調査と改めることとなった）。なお、津知遺跡では平成11年3月現在で17次（含試掘・工事立会）の調査が行われている。

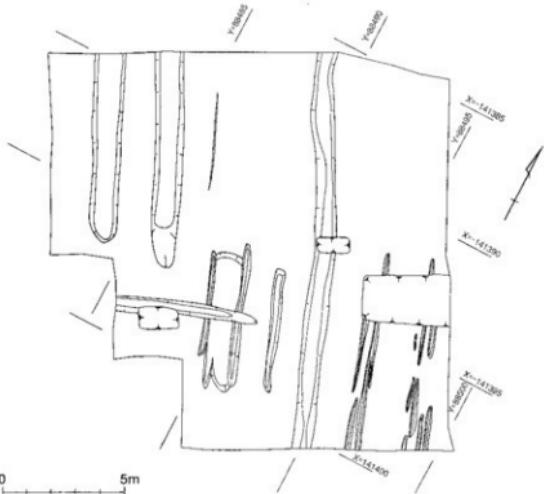
当遺跡の所在する東灘区はかつての摂津国西部にあたり、六甲山南麓の狭い平地ではあるものの、海路としての瀬戸内海に面し、また陸路として山陽道の通る交通の要衝であった。深江という地名も港としての入江に関連するものと考えられ、津知も辻あるいは津路、芦屋駅の別称といわれる須岐駅の音のいずれかに通じるものだろう。

深江北町遺跡・津知遺跡のこれまでの調査の結果では、弥生時代中期の遺物・弥生時代後期から古墳時代の墓域・奈良時代から平安時代前期の官衙関連遺構・中世の集落などが確認されている。特に奈良時代から平安時代の遺構からは銅帶、硯、鏡、錢貨、瓦、墨書き土器、綠釉陶器、灰釉陶器など一般的な集落からは出土することの少ない遺物が多く出土しており、山陽道にあったと文献に伝えられる葦屋駅との関連で注目されている。



fig. 13  
調査位置図  
1 : 2,500

- 2. 調査の概要** 工事の影響を受ける約220m<sup>2</sup>について発掘調査を実施した結果、3面の遺構面を確認した。縄文時代の海岸線よりも海側に位置するため、堅固な基盤層は検出されず、遺跡の基盤層となる土層は花崗岩の風化した「真砂土」である。現地表（標高2.3m～2.7m）下0.8～1.2mで第1遺構面を、同0.8～1.3mで第2遺構面を、同1.4～1.8mで第3遺構面を検出した。
- 第1遺構面 検出遺構** 標高1.3～1.6mで検出した。遺構は耕作痕と考えられる溝のみで、現在の条里の方向にほぼ並行、あるいは直交して延びるもののが大半である。耕土（3a層）から出土する遺物の大半は中世のものである。
- 第2遺構面 検出遺構** 標高1.3～1.4mで検出した。北部に水場と考えられる遺構、中部～南部に柱穴群・土坑を検出した。
- S G01** 水場と考えられる池状の遺構で、南岸部分を検出した。遺構検出面からの底面までの深さは約1mを測る。
- 古墳時代後期の須恵器のか、飛鳥時代から平安時代の大量の土器などが出土している。この中には墨書き器、転用硯、綠釉陶器、瓦などがあり、当遺跡の官衙的な性格をあらわしている。墨書き器は現段階で約20点確認しており、「驛か」、「垣か」、「家か」、「蜂」、「神口（万か）」、「大口」などの墨書きがみられる。このほか、木器・骨・馬歯・土鍬などが出土している。
- また遺構底面には馬と思われる足跡が一面に残されていた。
- 柱穴群** 柱穴・土坑等が80基以上検出しており、掘立柱建物を構成するものを含むと思われる。この中には火災に遭い、その後柱を抜き取った痕跡の残るものがある。



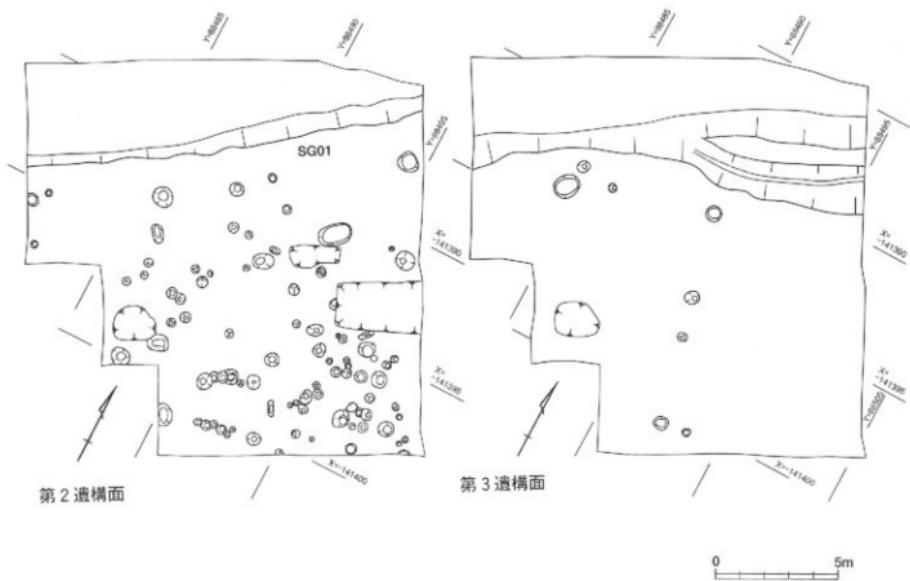


fig. 15 第2・3遺構面平面図



fig. 16  
第2遺構面全景

- 第3遺構面** 第2遺構面の下層は50cm程度の厚さで洪水砂が堆積しており、これを除去すると標高約0.9mで第3遺構面を検出した。検出した遺構には、溝・池のほか、炭が集中し、焚き火跡と考えられるものもあるが、他には不明確な小穴等があるにすぎない。
- 出土遺物** 出土した土器は古墳時代前期のものである。池・溝からは完形あるいはそれに近い土器が出土している。また、地表面に置かれたものがそのまま潰れた状態で、手づくね土器や壺などの土器が出土している。
- 地面上に据え置かれた土器や手づくね土器、焚き火あとなどの存在から、これらが祭祀的な行為の結果が洪水砂でパックされたものである可能性が考えられる。
- 3. まとめ** 第2遺構面で確認した墨書き土器、硯、縁釉陶器、瓦などの存在は、従来より指摘されている、当遺跡が官衙的色彩の強い遺跡であるという考えをさらに補強するものとなった。また、馬の飼育には次くことのできない水場を検出したことや、その底面において馬の蹄あとを多く確認したことにより、官衙のうちでも駅に関連する遺跡である蓋然性が高くなつたと考えられる。ただし、官衙的な色彩の遺構・遺物が確認されている範囲が広く認められている一方で、明確な官衙的建物などは確認されていない現段階では、駅に関連すると考えられる馬の水場が確認されたに止まる。古代山陽道の位置の比定を含め、葦屋駅の位置を推定あるいは確認するには、今後の調査の蓄積が必要である。

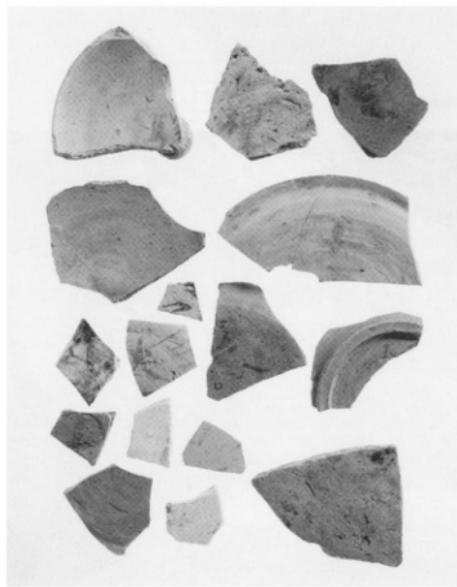


fig. 17 SG01出土墨書き土器

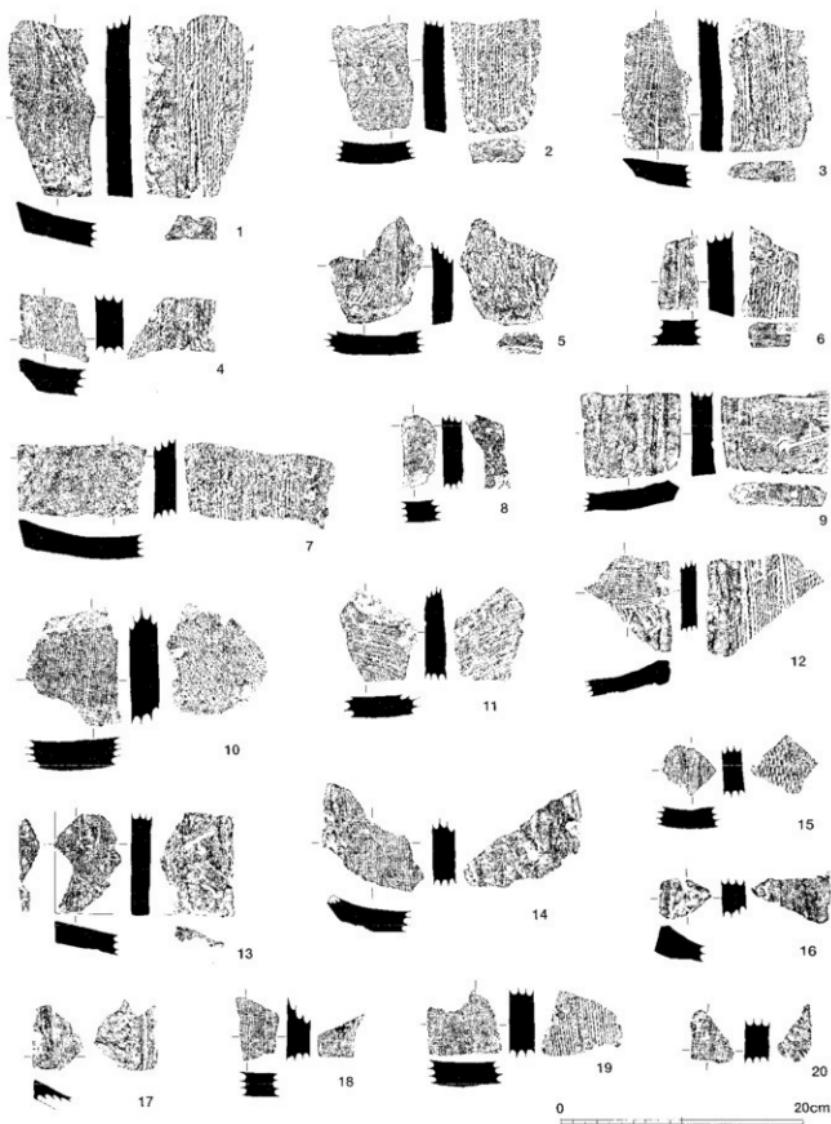


fig. 18 SG01出土遺物実測図 (1)

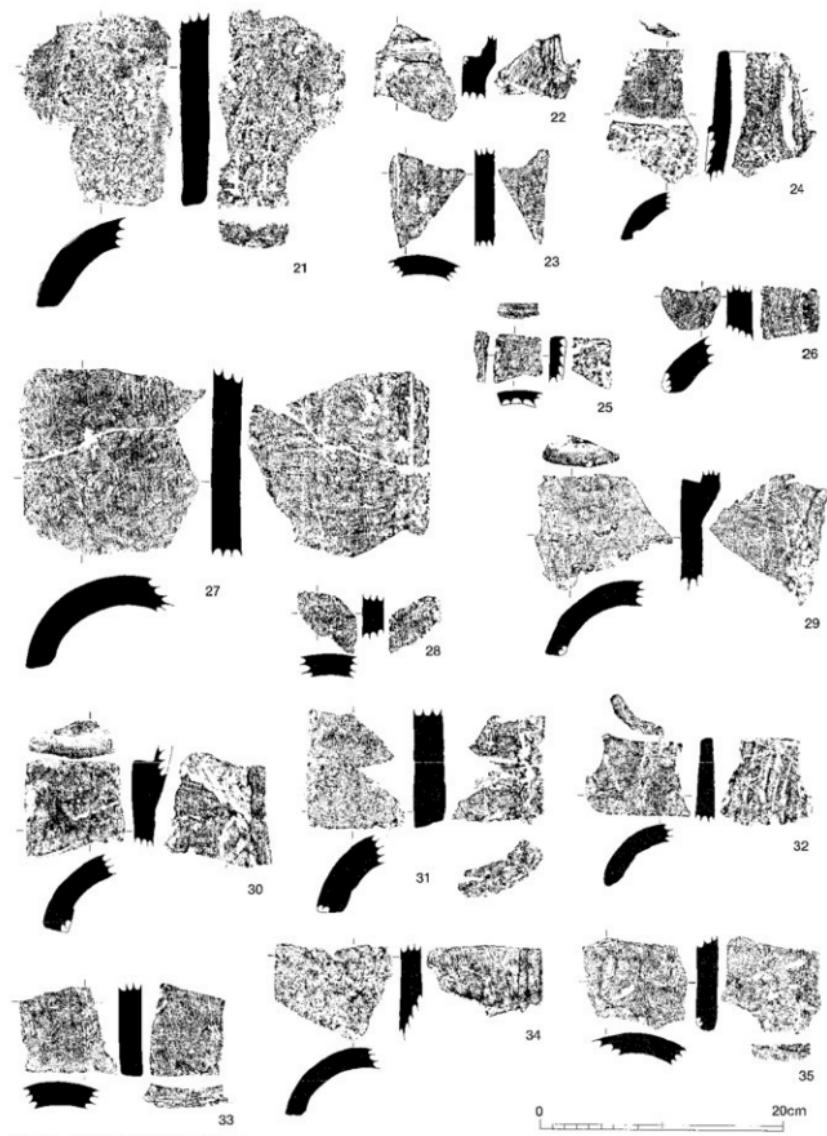


fig. 19 SG01出土遺物実測図(2)

## 2. 出口遺跡 第5次調査

### 1. はじめに

出口遺跡は六甲山南麓の傾斜地、東の芦屋川・西の高橋川に挟まれる位置に所在する。

出口遺跡は、六甲山南麓の傾斜地から沖積地である平地の変換点付近に位置し、北は傾斜地、南は平地となっている。これまで調査地点は全て遺跡範囲北部の傾斜地にあたるが、ここでは弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、平安時代などの遺構・遺物が確認されている。当遺跡と、北側に接して存在する森北町遺跡とは遺跡の内容が共通し、両者は同一の集落遺跡であると把握される。南の平地部分はこれまで調査が行われていないため、その内容は明らかでない。西に隣接する第1次調査地点では平安時代の屋敷地、流路及びそれに架かる橋などが確認されている。

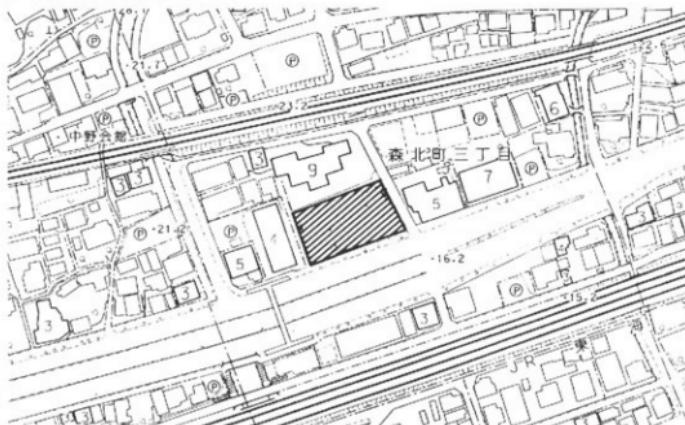


fig. 20  
調査地位置図  
1 : 2,500

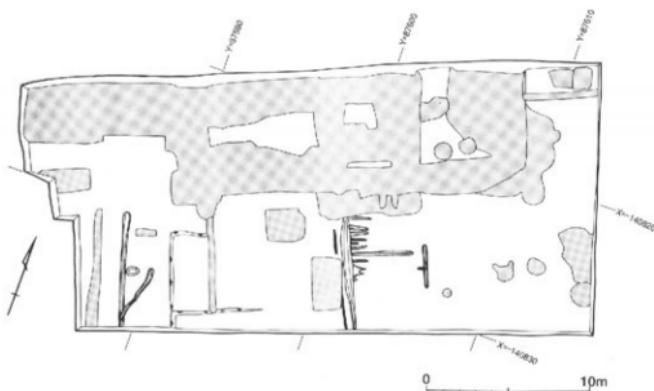


fig. 21  
第1遺構面平面図

2. 調査の概要 工事の影響を受ける約560m<sup>2</sup>について発掘調査を実施した。調査の結果、北部及び西部で1面、南東部で2面の遺構面を確認した。現地表の標高は約16.7～17.0m、調査地南東部で検出した第1遺構面（3a層下面）の標高は約16.0m、第2遺構面（4a層下面）の標高は調査区北端で約16.4m、南端で約15.8mを測る。

第1遺構面 調査区の南東部で耕作痕と考えられる溝を検出した。耕土（3a層）から平安時代から鎌倉時代の遺物が出土している。

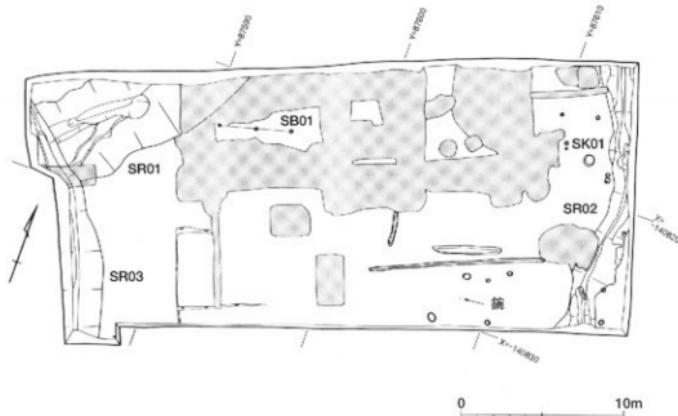


fig. 23  
第2遺構面全景

**第2遺構面** 北部及び西部は遺構面が1枚となっており、自然流路、土坑、掘立柱建物などの遺構を検出した。これらの遺構のうちには第1遺構面と第2遺構面のどちらに対応するのか明確ではないものも含まれるが、出土遺物から、多くは第2遺構面に対応すると考えられる。ここでは一括して第2遺構面のなかで記述する。南東部では2面の遺構面を確認し、溝、自然流路などの遺構を検出した。遺構面に対応する表土層である4a層の出土遺物の大半は平安時代のものであるが、その中に古墳時代に遡る銅鏡片が含まれており注目される。

**S B01** 心々間の距離で2.1~2.2mを測る柱穴3基を調査区北部で検出している。周辺部分は擾乱が多く確定できないが、これらの柱穴は掘立柱建物の一部を構成するものと考えられる。

P 2からは、平安時代中期から後期の土師器小皿5枚以上、須恵器杯片、古式土師器？破片などがまとめて出土しており、何らかの祭祀に関連するものと推測される。

**S R01** 調査区の西部で検出した北東から南西に流下する自然流路で、S R03より古い時期のものである。幅約6m、検出面からの深さ約1mを測る。埋土は砂礫および砂礫混じりのシルトとなっている。古墳時代中期後半から後期初めの遺物が多く出土している。土師器・須恵器などのほか、韓式土器（硬質・軟質）、鉄製鋤先などが出土している。完形に近い形で出土した土師器甕（図中72）内部の土砂の水洗作業を実施したところ、滑石製臼玉を検出した。森北町遺跡第7・10次調査などでも多量の土器や滑石製臼玉・有孔円盤などを出土した同時期の自然流路を確認しており、そのいずれかの下流部分であると推測される。

**S R02** 調査区の東部で検出された北から南に流下する自然流路で、幅約1.8m、遺構検出面からの深さ60~90cmを測る。埋土は砂礫から構成されている。弥生時代中期の土器、サヌカイト塊等が出土している。

**S R03** 調査区の西部で検出した北から南に流下する自然流路で、S R01より新しい時期のものである。遺構検出面からの深さ約1mを測る。右岸が調査区外となるため確定できないが、幅は3~4m程度と予想される。埋土は、砂礫および砂礫混じりのシルトとなっている。飛鳥時代から平安時代の土師器・須恵器などのほか、サヌカイト製石匙が出土している。西隣接する第1次調査地点で確認されている流路の下流部分にあたると考えられる。

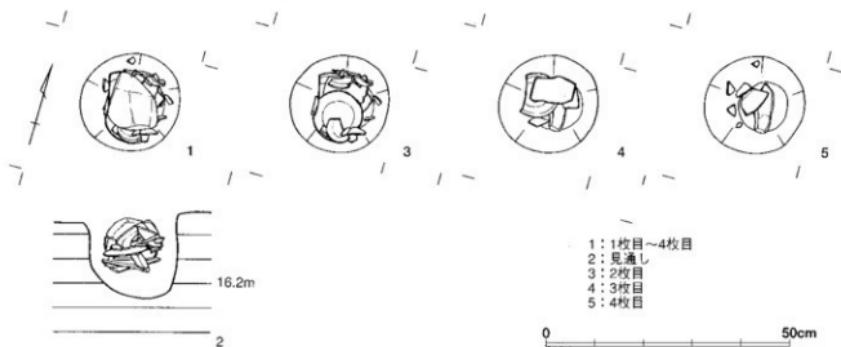


fig. 24 S B01-P 2 平・断面図

3. ま と め 今回確認した平安時代中期から後期のものと推定される掘立柱建物は、第1次調査検出の屋敷と同時期のものと考えられる。同時期の遺物包含層の広がりも確認し、橋の架かった流路を挟んでその東側にあたる当地区も共通の生活域としての屋敷地であったといえる。

また森北町遺跡およびその周辺では、これまでに銅鐸、中国製鏡、他地域から搬入された古式土師器、陶質土器、初期須恵器などの特徴的な遺物が出土している。以上の遺物の存在から当地域は、弥生時代末から古墳時代にかけて他地域との交流の拠点となり、宝器あるいは貴重な文物を所有しうる有力な集団の居住する集落であったことが推測されてきた。古墳時代終末期に、新しい思想である仏教とともに日本に移入された銅鏡の破片の出土は、当該時期に至ってもこの集団が引き続き居住していた可能性を示すものだろう。



fig. 25 S B01-P2 遺物出土状況



fig. 26 S B01-P2 遺物出土状況

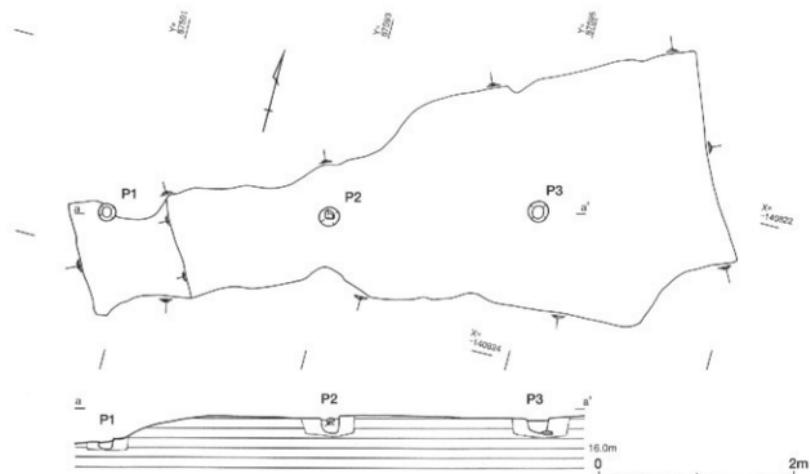
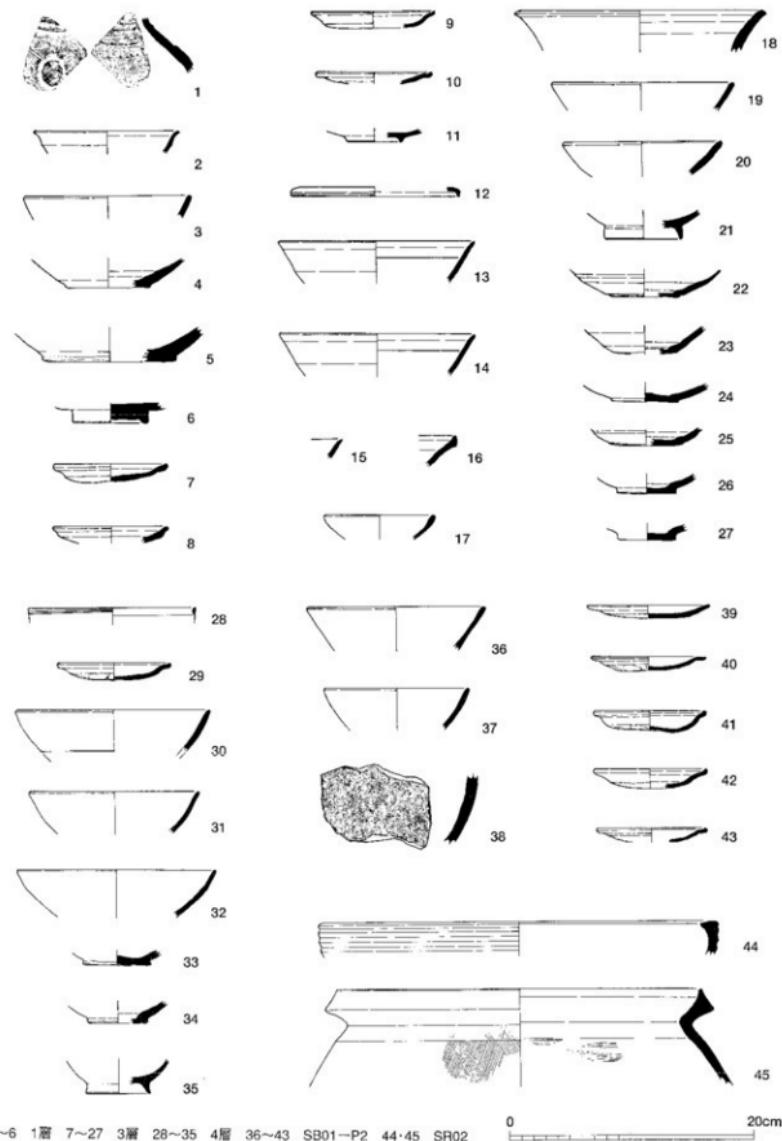


fig. 27 S B01平・断面図



1~6 1層 7~27 3層 28~35 4層 36~43 SB01~P2 44~45 SR02

fig. 28 出土遺物実測図(1)

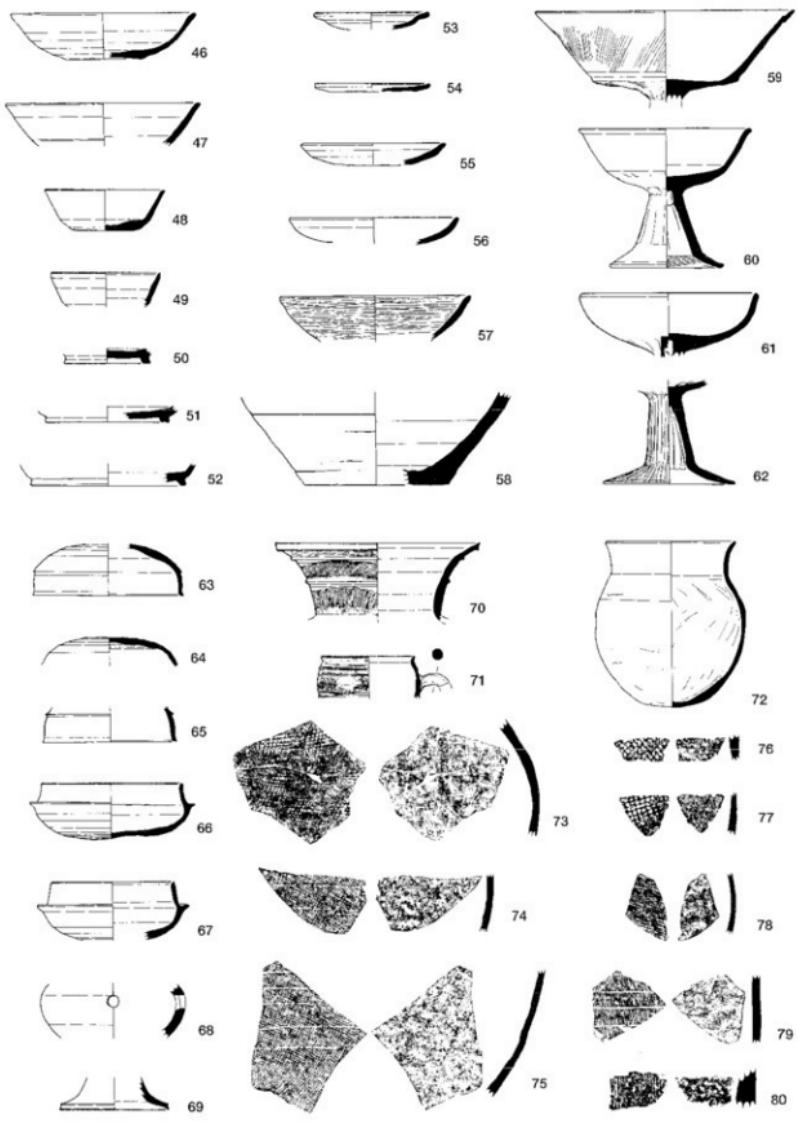


fig. 29 出土遺物実測図（2）

### もと やま 3. 本山遺跡 第33次調査

#### 1. はじめに

本山遺跡は現在の国道2号線をはさんで、南北に広がる遺跡である。地形的にみると、国道2号線の北側は更新世段丘面が浅い位置で現れるが、南側では縄文海進時の大きな海食崖があり、その南側には沖積地が大きく広がっている。

これまでの調査では、弥生時代前期から中期の竪穴住居、土坑、溝、流路などの遺構を確認しており、縄文時代晚期の土器や弥生時代前期から中期の土器、石製品、木製品が出土している。第12次調査で銅鐸が出土している点や、今回の調査地点の東側に隣接する第16次調査地では、弥生時代前期初頭の木製品が多量に検出されるなど、当時の農耕社会を復元していく上での貴重な資料が得られている。



fig. 30  
調査地位位置図  
1 : 2,500

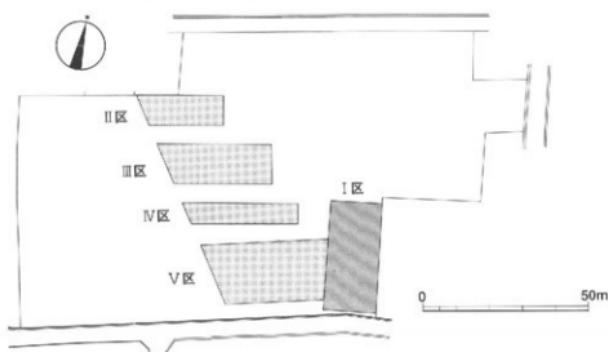


fig. 31  
調査区設定図

2. 調査の概要 試掘調査で文化財が確認された範囲のうち、工事影響部分について全面調査を実施した。調査可能な地点からⅠ区からⅤ区までを順に調査を実施した。

基本層序 盛土の下層に土間コンクリートがほぼ全面に存在し、さらに下層に近世以降の耕土・旧耕土が1~3層続き、遺構面基盤層（黒色小礫混じりシルトあるいは淡青灰色小礫混じりシルト質細砂）上面あるいは遺物包含層（淡黒色小礫混じりシルト）上面に至る。

Ⅰ区 調査対象地の南東部にあたり、約560m<sup>2</sup>が調査対象範囲であったが、軟弱地層で掘削深度が深い上に、緩傾斜の法面形成を施したため、実際に調査できたのは約250m<sup>2</sup>である。

検出遺構 流路2条、溝状遺構2条を検出した。弥生時代前期前半から中期のものと考えられる。

流路1 第16次調査地から続くものと考えられ、最深部は北東から南西を指向する。最大幅16.5m、最大の深さ約1mであり、埋土は灰色砂礫と灰色~黒灰色系のシルトから構成される。弥生時代前期古段階の完形品を含む土器とともに、鍬先や鋤未製品などの木製農耕具が出土している。Ⅰ区では流路1が段丘崖を切って流れていると考えられる。

また、流路1の最終埋没に近い時期に打ち込まれたと考えられる杭列を2列確認した。

杭列1 基盤層の淡青灰色礫混じりのシルト質細砂に杭が打ち込まれていた状態で確認した。横木として板材と自然木が南側に添えられたように遺存している。

杭列2 流路埋土内に雜然と打ち込まれているが、本来は杭列として営まれたものと考えられる。

流路2 東西方向を指向して流路1を切るもので、主となる埋土は暗乳色細砂~細礫である。最下層には暗灰色シルトが薄く堆積し、最上層から弥生時代中期の土器がわずかに出土した。



fig. 32 Ⅰ区平面図



fig. 33 Ⅰ区北半流路全景



fig. 34 Ⅰ区北半流路内杭列遺構 1

- II 区** 調査区西端で中世以降の溝状遺構を1条確認した。弥生時代前期から中期の遺物包含層は調査区の西半に薄く存在するだけで、東半は削平されているようである。
- S D04** 幅0.6~1.0m、深さ20cm前後で、埋土は淡黒色シルト塊を含む乳色粗砂~細礫である。
- III 区** 調査区南西隅で弥生時代前期の遺物包含層を切る、溝状の落ち込み1ヶ所を検出した。
- S X01** 埋土の大半は灰色細砂~細礫である。弥生時代前期の土器が出土している。
- IV 区** 調査区西端でS D05、調査区東端でS D06を確認した。
- S D05** 西から東へ流れる幅約3m、最大深さ1.5mの流路で、灰色砂礫を主たる埋土とする。概して磨滅した弥生時代前期の土器片が多数出土しているが、遺構面直上の遺物包含層を切っており、中期に下る可能性が高い土石流の痕跡と考えられる。
- S D06** 最大幅2.5m、深さ約35cmの溝状遺構で、埋土は褐色系のシルト質極細砂である。S D05と同様に遺物包含層を切っており、弥生時代中期の遺物が出土している。
- V 区** 最も面積が広い調査区であるが、ほぼ全域が流路内となっており、遺構面はほとんど残っていない。
- 流路 5** 西半部では流路3条を確認した。このうち最も北辺で確認した流路5は、上述したIV区 S D05から続く弥生時代中期の土石流の痕跡と考えられる。東半ではその流れが明確ではないが、I区流路2まで続くものと考えられる。
- 流路 3** 南辺で確認された流路で、調査区南西隅で確認できる最大幅は6m、最大深さ約1mとなる。流路3も東半ではその流れが明確ではない。
- 流路 4** 流路3と流路5に挟まれた流路4では、埋没過程で營まれた井堰と杭列7を確認した。
- 井堰** 南北方向で流路4に直行して營まれており、総延長は約4.6mである。流路南肩部分との取り合いは、杭材の遺存状態が悪く、明確ではない。北半約2m分はみかん割り材を2~3枚重ねて密に打ち込んでおり、横方向の材は全く確認できていない。南半の約3m分は20~30cm間隔のほぼ等間隔で丸木杭を合掌形に打ち込んで横木を固定しており、一部ではみかん割り材も併用している。またみかん割り材を横木として利用している部分もある。

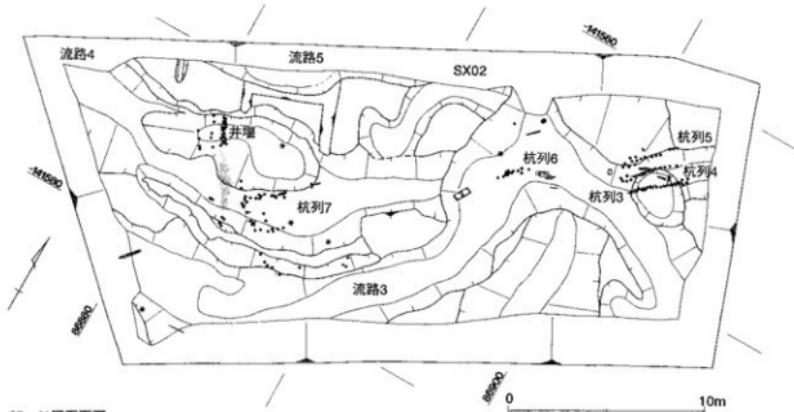


fig. 35 V区平面図



fig. 36 V区杭列3～5



fig. 37 V区流路4井堰



fig. 38  
V区流路4井堰，  
杭列7平・立面図

- 杭列 7 井堰の東側に隣接して営まれた杭列で、30~40cm間隔で丸木杭を主体に「ヨ」字形に打ち込んだものである。東側が開口している。抉りのある丸太材（直径20cm、長さ2m）を含む木材が南側に引っ掛けた状態で多数検出している。
- S X02 調査区北辺中央部で検出した断面V字形の溝状遺構で、西側を流路4に、東側を流路5に切られる。最大幅約2m、最大深さ70cm、検出長は約7mである。弥生土器が西半部の最下層に集中して出土しており、大型の壺底部が目立ち、弥生時代前期前半のものである。調査区北東隅部では、平行して打ち込まれた杭列3基（杭列3~5）を確認した。
- 杭列 3 みかん割り材を主体に構成される点が特徴的で、総延長は5.3mである。
- 杭列 4 概してみかん割り材を主体に構成され、総延長は5.0mである。杭列3の約1.4m北側で、杭列3に平行して営まれており、一連の遺構を構成していた可能性が考えられる。
- 杭列 5 丸木杭を主体としているが、西半部で遺存状態の良いみかん割り材を約70cm間隔で3本確認した。総延長4.8mである。
- 杭列 6 何れもが丸木杭であるが、規則性には欠ける。方向性からみて、杭列5と一連のものかもしれない。なお、杭列3~5あるいは杭列6の間には流路5が流下していたようで、杭列が欠けているものと考えている。
- 出土遺物** 出土遺物の大半は流路内より出土しており、未製品を含む木製農耕具と突帯文土器とともに弥生時代前期古段階の弥生土器がある。木製農耕具は流路内に点在しており、斧柄未製品1点、鍬未製品（2連）1点、円板形の木製品1点、鍬先1点などがある。また、直線刃磨製石包丁1点、サヌカイト大型剝片2点や台石1点などの石製品も出土している。流路の最終埋没は弥生時代中期（Ⅲ様式）まで下るようであり、流路最上層では弥生時代中期の遺物がわずかに出土する。流路内からは縄文時代後期の土器片もわずかに出土した。



fig. 39  
V区全景

3. まとめ 今回の調査では、調査対象面積が限定されていたなかで、弥生時代前期を中心とする集落の縁辺部の様相を明らかにできた。段丘崖より上位にあたる緩斜面地では、後世の開墾による平坦面確保のため、早くからの攢乱・削平もあったようで、顕著な遺構にはほとんど恵まれなかった。元来安定性に欠けた地質で、生活域としては適していなかったものと考えられる。

また、縄文海進時に形成されたとされる段丘崖をI区で確認し、国道2号線から南へ約60~70mも下った地点に存在することが判明した。これまでの当遺跡における発掘調査でも部分的に確認してきたが、今回の調査の結果、段丘崖がやや南へ張り出していたことが推定できるようになった。

一方、I区及びV区の流路内からは、未製品を含む木製農耕具とともに突帯文土器・弥生時代前期古段階の弥生土器が出土している。状況的には、木製農耕具・突帯文土器・前期古段階の弥生土器が共伴しているようであるが、流路内出土という資料の限界があり、これらの遺物が明らかに共伴するかどうかは俄には決しがたい。また、V区では流路とSX02の切り合い関係が認められることからも、弥生土器の詳細な整理作業を待った後、再検討が必要であろう。

ともあれ、I区やV区で確認した未製品を含む木製農耕具は、第16次調査出土遺物と合わせ、稲作開始期における農耕具製作技術の復元に大きく寄与するものと考えられ、重要な遺物である。

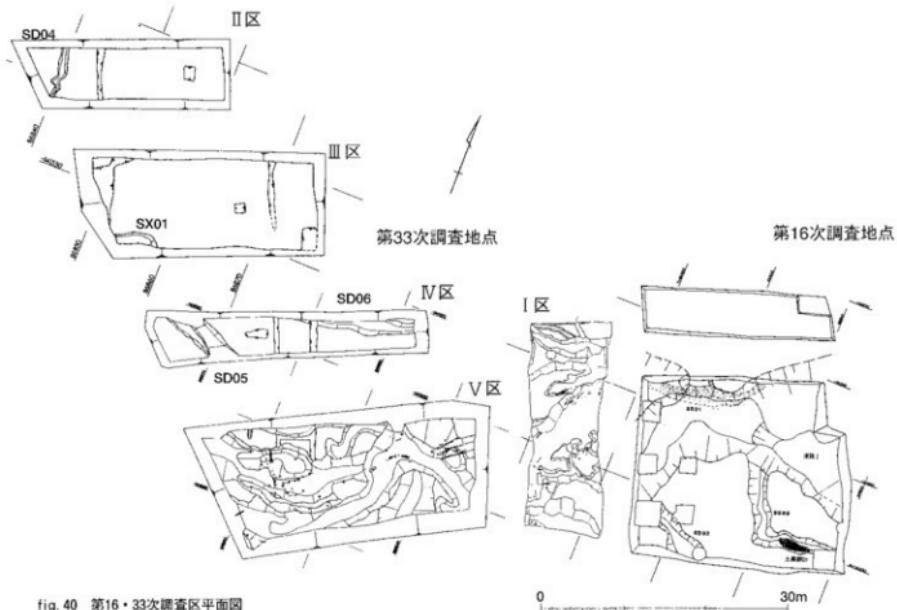


fig. 40 第16・33次調査区平面図

## もと やま 4. 本山遺跡 第35次調査

### 1. はじめに

本山遺跡は、六甲山系南麓に流れる要玄寺川西岸、標高約6~20mの複合扇状地の末端に位置している。遺跡の規模は、東灘区本山中町から本山南町にかけて、南北0.6km、東西0.6km、36haの範囲に分布していると考えられている。これまでに34回の発掘調査が施され、弥生時代と中世の集落跡や流路、河道などが検出されている。第12次調査では、生時代中期の集落周辺の湿地から、銅鐸や祭器と推定される石器類が出土している。



**第1遺構面** 中世の遺構面で、不整方向の複数の溝と偶蹄目の足跡を検出した。また、溝に沿って直径3～10cmの杭を數本検出した。検出状況から、耕作面として利用されていたと思われる。

**第2遺構面** 弥生時代中期の遺構面で、流路1条、土坑1基を検出した。

**S R01** 調査区西半で検出した。西肩は調査区外となっており、幅は不明であるが、深さは遺構面から約75cmである。遺物は、流路の上面に集中して出土しており、中層から下層にかけてはほとんど遺物は出土していない。

**S K01** S R01の東肩付近で検出した、直径約70cm、深さ約15cmの、平面形が円形の土坑である。

**3. まとめ** 調査の結果、弥生時代中期には、南西方向に流れる流路を検出した。また、中世には当地が耕作地として使用された痕跡を確認した。当調査区の東側には、六甲山系から派生した尾根筋が存在しており、地勢が安定した東側に遺構が広がるものと思われる。

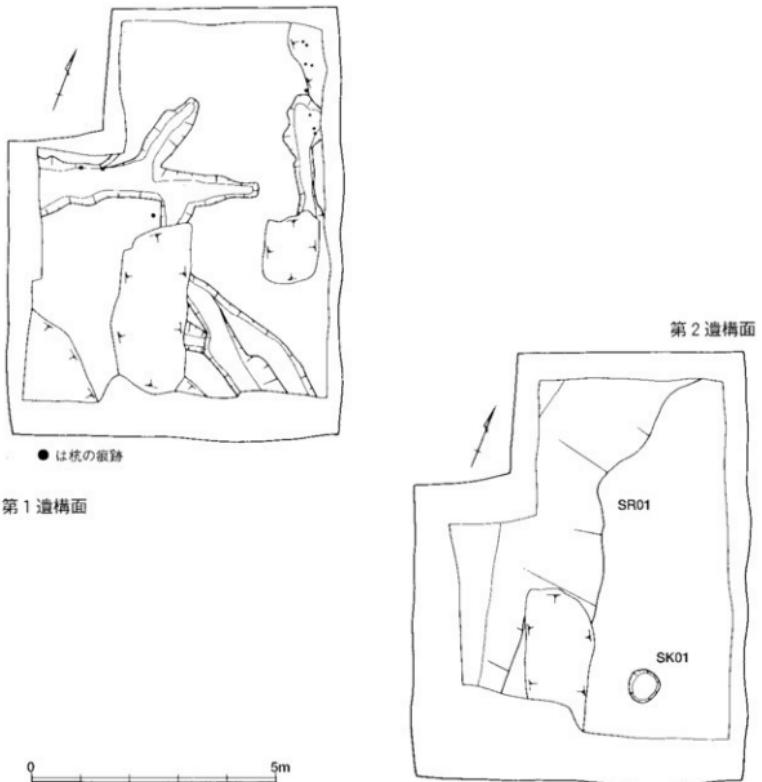


fig. 44 第1・2遺構面平面図

## 5. 八幡遺跡 第8次調査

## 1 はじめに

八幡遺跡は六甲山南麓石屋川右岸の傾斜地上に存在する遺跡で、遺跡名の示すとおり町内に八幡神社が鎮座している。八幡遺跡は平成8年からこれまで7次にわたり発掘調査を実施しており、遺構としては古墳時代の堅穴住居・奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代の掘立柱建物などを確認している。



fig. 45  
調査地位置図  
1 : 2,500

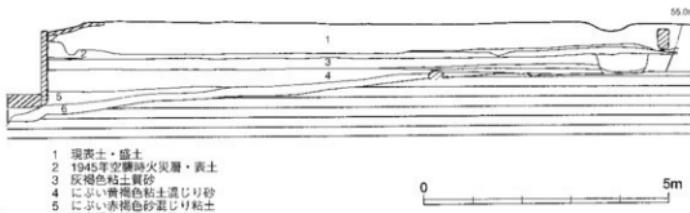


fig. 46  
調査区西壁断面図

### 2 調査の概要

今回の調査は、集合住宅建設に先立ち、工事の影響を受ける約140戸について実施した。

### 输出图像

調査の結果、遺構面を1面検出し、中世のものと推定される柵列と時期不明の土坑等の遺構を検出した。中世の土器・太平洋戦争当時の焼夷彈が出土している。

基本屬序

調査地は傾斜地で、現状は階段状に造成が行われ土地利用がなされている。遺構面は南北へ下る傾斜地となっており、調査地の北端で標高約54.0m、14m離れた南端で標高約53.0mを測る。現在の表土である造成土の下層に2a層となる旧表土（太平洋戦争の空襲による火災層？一部埋立）を、5a層となる暗赤褐色砂混じり粘土の下面で遺構面を検出した。

输出清晰

溝、中世のものと推定される柵列、時期不明の土坑等を確認した。溝は耕作痕状の幅の細いものである。

3. ま と め 今回の調査では遺物の出土量も少なく、遺構も柵列状のものなどを確認したに止まった。これまでに周辺で実施した調査では多くの遺構が確認されているが、当調査地点では顕著な遺構は確認されなかったことから、当調査地が周囲と比べやや傾斜の急な地点であり、局所的には、明確な痕跡が残る程には人々の活動が少ない場所であったと捉えられる。

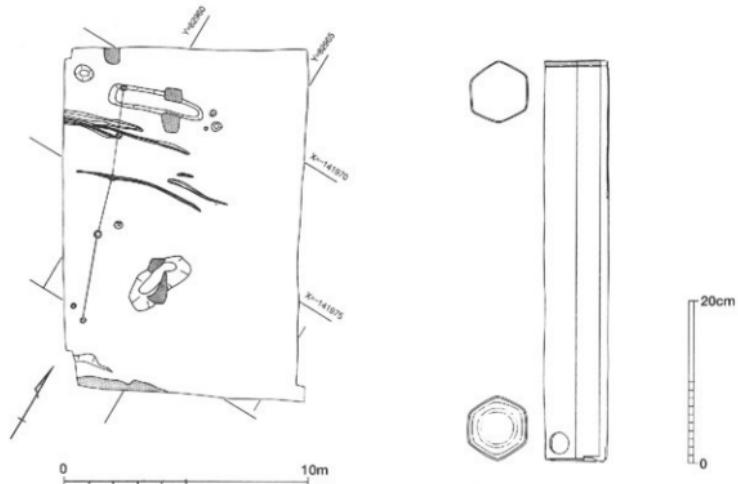


fig. 47 調査区平面図

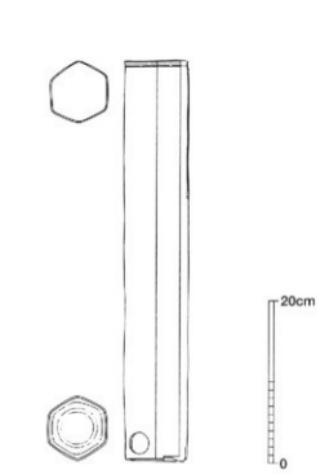


fig. 48 焼夷弾実測図



fig. 49  
調査区全景

## 6. 都賀遺跡 第17次調査

### 1. はじめに

都賀遺跡は、昭和62年度に実施した試掘調査により、はじめてその存在が確認された。これまでに実施した16次にわたる調査の結果、縄文時代から中世の遺構・遺物を確認しており、縄文時代早期の押型文土器を主体とする縄文土器、弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の堅穴住居などを検出している。

山手幹線の街路築造工事に伴う発掘調査は、平成10年度に第12次調査を実施しており、弥生時代中期、中世から近世の遺構、遺物を確認している。

今回の調査地は第14次調査地の西方に位置する。



fig. 50  
調査地位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

調査地は北から南へ向かって傾斜する、六甲山南麓の扇状地上に位置している。平成7年1月17日の阪神・淡路大震災では調査地周辺は大きな被害を受け、調査地には震災後仮設住宅が設置されていた。

調査地周辺は阪神間における交通至便な土地柄から、比較的早い段階に市街地化が進行した地区であり、今回の調査地でも、建物基礎、排水路、埋設管等による擾乱の影響が著しく、遺構面が確認できたのわずかな範囲であった。

調査地は北から南へ向かって下降しているのに加えて、全体的に東側に向かって下降しており、特に東半部では顕著であった。

**基本層序** 全体的に遺構面基盤層である黒褐色泥礫粗砂層（5層）まで擾乱を受けており、検出した高さは、浅い部分で現地表面から約40cmであった。中世を中心とした須恵器、土師器が出土しているほか、調査区西端付近で北宋銭（「元祐通宝」）が1点出土している。

**検出遺構** 調査区や東よりで溝1条、ピット3基を検出した。

**SD101** 幅60~70cm、深さは18cmを測る、ほぼ南北方向の溝である。遺物は出土していない。

**ピット** ピットはSD101以外は全て擾乱による影響を受けている。

長径22~60cm、深さは8~16cmである。建物等を構成するものであるかは確認することはできなかった。SD101から微細な中世の須恵器片1点が出土している。

3. まとめ 調査地は大きく擾乱、整地を受けていたが、一部で遺構を確認することができた。

遺構から遺物がほとんど出土していないため、詳細については不明であるが、SP101から中世の須恵器が出土しており、他の遺構も埋土の状況から中世であると考えられる。

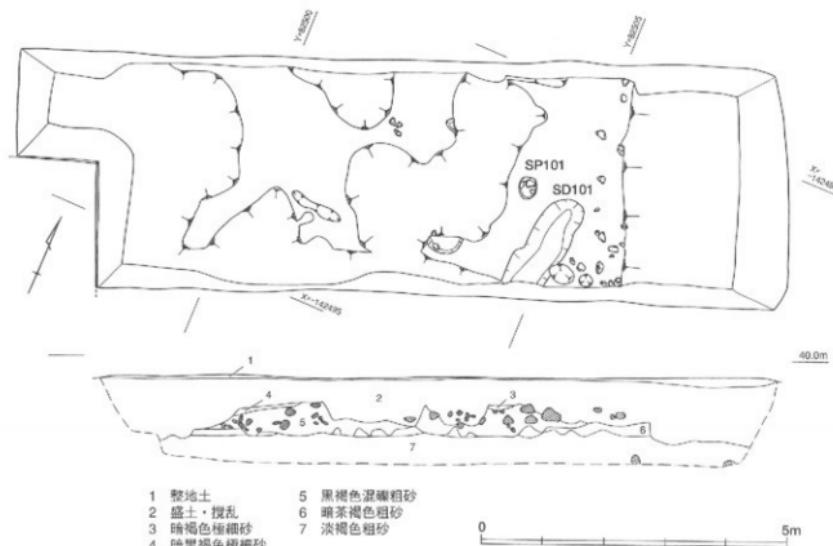


fig. 51 調査区平・断面図



fig. 52  
調査区全景

## にしもと めづか 7. 西求女塚古墳 第10次調査

### 1. はじめに

西求女塚古墳は、六甲山系南麓の花崗岩の崩壊土壌によって形成された複合扇状地の末端、標高6m付近に位置している。西求女塚古墳の調査は、1985年度の第1次調査をはじめとして今回で第10次調査となる。これまでの調査で、慶長元（1159）年の「慶長の大地震」によって埋葬施設を含め各所で地滑りを起こしており、崩れた埋葬施設内から三角縁神獣鏡7枚を含む舶載鏡12枚が発見されている。また、墳丘は地滑りとその後の造作により前方後円形になっていたが、墳形は前方部を東に向けた前方後方墳で、全長95m前後、後方部の1辺は55m前後、くびれ部幅が26mの規模であることが判明している。

また、古墳の周辺部調査では、中世の耕作面、『敏馬の泊』に関連すると考えられる奈良時代から平安時代の遺構が確認されている。また、同古墳の周溝の一部と考えられる落ち込みが検出されている。



fig. 53  
調査地位置図  
1 : 2,500

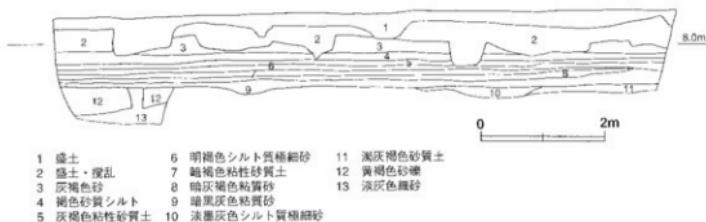


fig. 54 調査区西壁断面図

## 2. 調査の概要

### 基本層序

現地表面から60cmまでは現代の整地または旧耕土（1～3層）であり、同90cmまで褐色砂質シルト（4層）、灰褐色粘性砂質土（5層）、明褐色シルト質極細砂（6層）の上層の一群、同120cmまで暗灰褐色粘性砂質土（7層）、暗灰褐色粘質砂（8層）、暗黒灰色粘質砂（9層）の下層に大別して堆積している。地山層は黄褐色砂礫（12層）である。

### 上層

上層では、複数の面で遺構精査を行ったが遺構は検出していない。須恵器、土師器、瓦器などの中世の遺物が出土している。土層観察からは、マンガンの沈着層が複数あることから水田層が複数存在すると考えられるが、畦畔などの水田に伴う遺構は検出していない。

### 下層

下層では、9層上面で北西方向と南西方向に落ち込みを検出した。少量の中世の須恵器と土師器が出土している。

### 地山面

地山面では、調査地の北半で南西方向へ流れる流路を検出した。流路からは、須恵器・土師器の小片が少量出土したが時代を明確に決定づけるものはない。周辺の調査結果から、奈良時代から平安時代のものと思われる。また、南半では下層の細砂が幅30cmの溝状に吹き上がったように検出された。これは、地震による噴砂か地割れによる現象と考えられる。

## 3. まとめ

調査の結果、奈良時代から中世と考えられる水田層や流路を検出したが、西求女塚古墳に伴うような遺構・遺物は検出されなかった。

なお、地震の痕跡は、中世の水田層よりも確實に古いものと思われる。

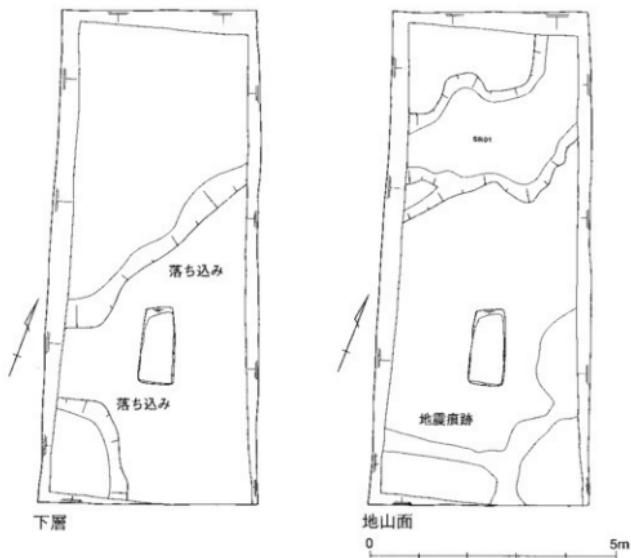


fig. 55 調査区平面図

## ひぐれ 8. 日暮遺跡 第15次調査

### 1. はじめに

日暮遺跡は、六甲山系南麓の沖積地末端に立地し、古代から中世当時の海岸線から数百mという至近距離に位置する、弥生時代後期から鎌倉時代、室町時代の集落遺跡である。

調査地周辺は市街地形成の時期が早く、從来遺跡の分布が明確でなかったが、昭和61年の市営住宅建設に伴う発掘調査で遺跡の存在と状況が明らかにされて以来、14次にわたる調査を実施しており、次第に遺跡の様相が明らかになりつつある。



fig. 56  
調査地位置図  
1 : 2,500

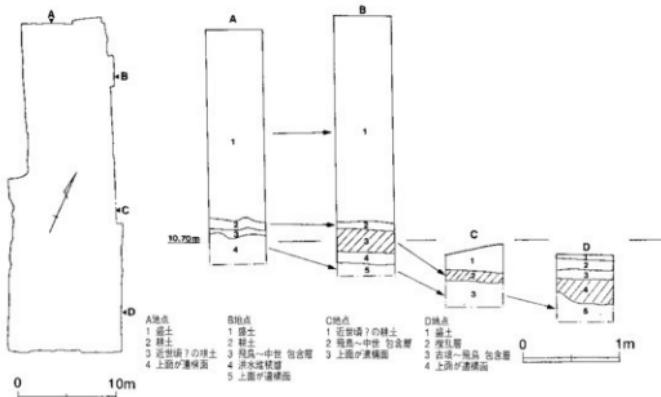


fig. 57  
調査区断面図

2. 調査の概要 今回の調査は、共同住宅建設に伴い、工事の影響が及ぶ範囲について実施した。

調査前の敷地の現況は、南北で段差があり、その比高差が約2mである。

#### 基本層序

北側2/3の盛土は分厚く、現地表面から遺物包含層直上までの深さは約2.3mを測る。南側の盛土は30~50cm程度で、遺物包含層は遺存しておらず、遺構面基盤層もかなり削平されていた。

また遺構面には、建物基礎等の後世の搅乱と、江戸時代末から明治時代初頭頃の耕作に伴う石の詰まった暗渠が、縦横に掘りこまれていた。

基本層序は、アスファルト・盛土層の下に耕土（黒灰色粘性砂質土）、古墳時代末から鎌倉時代頃の土器、土錘を含む灰褐色細砂～極細砂、その下層に黒色～黒褐色砂混じりシルトの堆積層が存在し、この上面で、上の層から踏み込まれた牛の足跡や遺構を確認した。

黒色～黒褐色砂混じりシルトは、北西から南東方向に徐々に下がっていく。またこの層は、50~60cmの厚さで堆積している部分もある。その下層は、土石流によって堆積したと考えられる黄褐色混疊粗砂が堆積している。

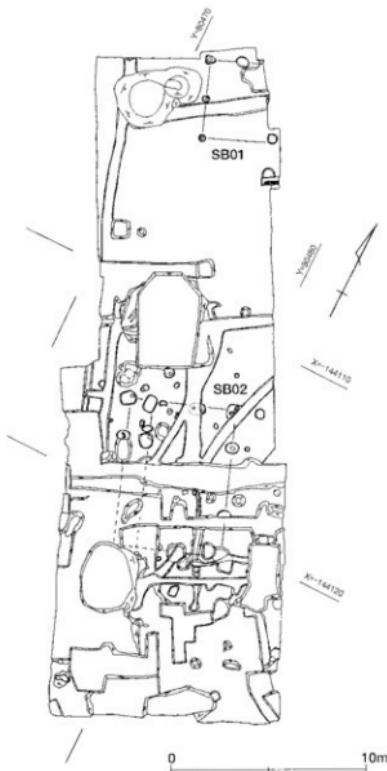


fig. 58  
調査区平面図



fig. 59 調査区全景



fig. 60 S B02

**検出遺構** 挖立柱建物 2 棟、ピットを検出した。

**S B01** 梁行 2 間 (4.0m)、桁行 2 間 (3.5m) 以上の建物規模がある、円形または梢円形の柱掘形をもつ柱穴によって構成される掘立柱建物である。建物東側の一部は調査区外に延びている。柱間の距離は、梁行方向は 2.0m の等間であるのに対して、桁行方向は、柱穴が抜けている部分があり、明確ではない。建物方位は、N22° W である。

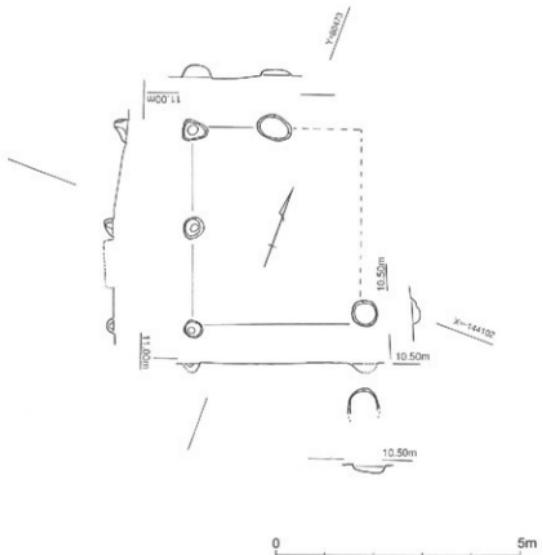


fig. 61 S B01平・断面図

## SB02

梁行2間(4.5m)、桁行3間(7.3m)で、西側に約1m程度の庇をもつ掘立柱建物である。柱穴の掘形は方形または隅円方形である。南西部の柱穴は、後世の建物基礎工事によって削り取られ残存していない。柱間の距離は、梁行方向は2.0~2.5m、桁行方向は、1.7~3.5mの不等間隔である。建物方位は、N22°Wである。

これらの建物は、側柱で構成された建物であるため、土間の家屋か倉庫と考えられる。

これらの建物の柱掘形からは遺物がほとんど出土しないため、建物の正確な年代は不明であるが、上層の遺物包含層及び柱穴掘形内出土の細片の土器から、およそ飛鳥時代から平安時代の時期に収まるものと判断される。

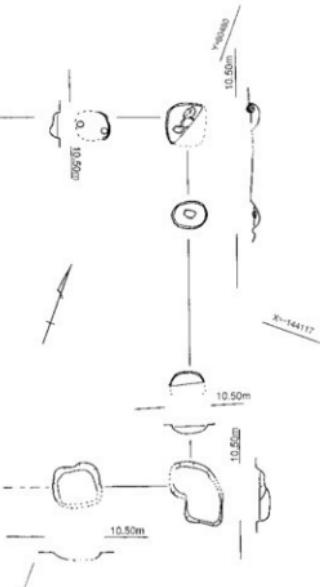
## 3. まとめ

今回の調査では、飛鳥時代から平安時代の掘立柱建物2棟とピットを検出した。平成元、6、7年度に周辺地の発掘調査を実施しているが、その際に当該時期の建物群を確認している。建物群の性格は未だ不明であるが、今回検出した建物もそれら建物群の一部であろう。

また、調査地の東側に隣接する敷地の一部を調査した(第16次調査一本書275~276頁参照)が、ピットを2基確認したのみであった。この部分は、北西から南東方向に下がる地形となり、洪水堆積層が遺構面上で確認され、河川の影響を受けやすい地域へ徐々に変化していくものと考えられる。この状況と、今回の調査地の東側で実施した第14次調査結果からみて、当遺跡の東端は、概ね今回の調査地よりやや東付近であると判断される。

なお、この遺跡からは、当時の海岸線に近く、漁撈具である土錐や蛸壺が多く出土することから、海と何らかの関わりのある人々の集落址であると考えられるが、漁民の村であると判断する資料にはいまだ乏しく、断言はできない。

fig.62  
SB02平・断面図



## 9. 目暮遺跡 第17次調査

1. はじめに

日暮遺跡は生田川左岸の平坦地に立地する遺跡で、昭和61年に遺跡の存在が確認され、初めての調査が行われた。以来これまでに16回の発掘調査を実施しており、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物を確認している。今回の調査地に近接する地点の調査では、南東に位置する第11次調査（平成7年度調査）・第13次調査（平成8年度調査）において、中世の畠跡、古代の掘立柱建物群などを確認し、北西に位置する第12次調査（平成7年度調査）では中世と古代の耕作地2面を確認している。



fig. 63  
調査地位置図  
1 : 2,500

## 2. 調査の概要

今回の調査は、集合住宅建設に先立ち、工事の影響を受ける約200m<sup>2</sup>について実施した。

基本層序

調査の結果、2枚の遺構面とそれぞれに対応する遺物包含層を確認した。それぞれの標高は、現地表面が約13.0m、第1遺構面（4a層上面）が約12.2m、第2遺構面（5a層上面ないし下面）が約12.0mないし12.1mである。

第1课 搬而

4a層上面で検出した偶跡目=牛の飼育地跡である。地表上に密集して残された牛の足跡を洪水砂によってパックされた状態で検出した。洪水砂から出土した土器は少量で、時期的な判断は困難である。第11・12次調査では平安時代後期の遺物が出土している。

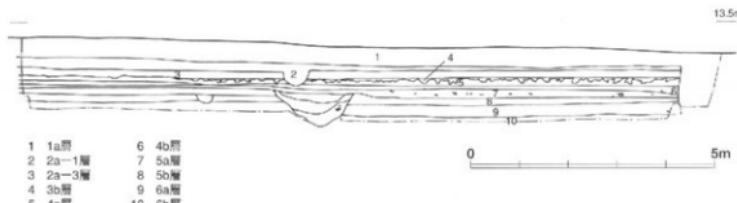


fig. 64 検査区東側断面図



fig. 65 第1遺構面全景



fig. 66 第2遺構面全景

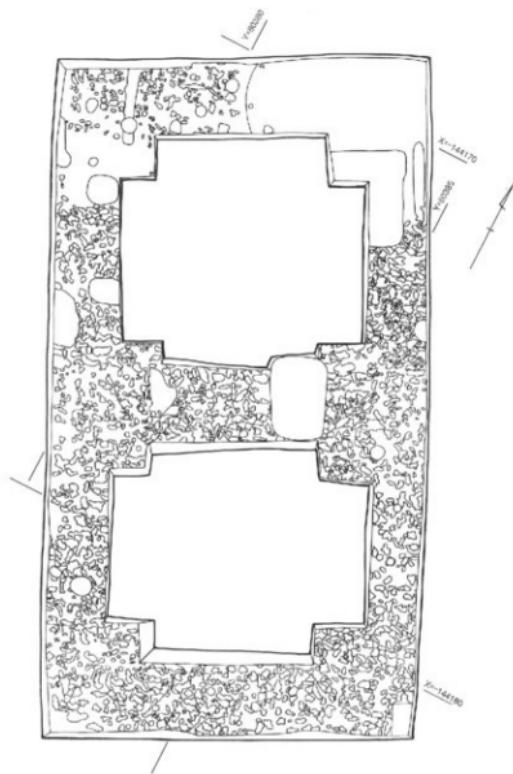


fig. 67  
第1遺構面平面図

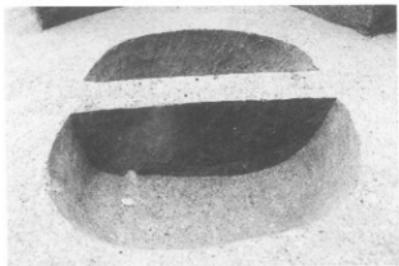


fig. 68 SK01断面

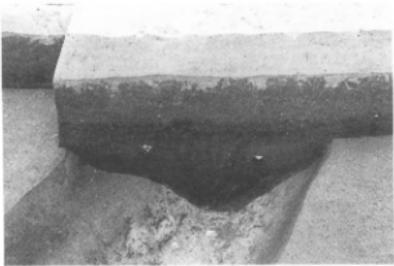
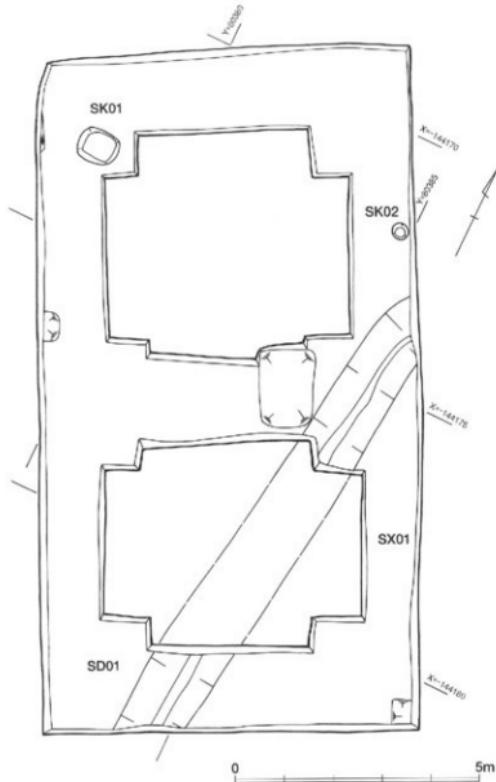


fig. 69 SD01断面

足跡は調査地一面に密集しているが、そのなかで西隅部分に空白域のあることが注意される。飼育場に何らかの区画施設のあったことを示している。

第2遺構面 5a層上面ないし下面で確認した遺構面である。5a層が地表土であり、検出面は違うものの、両者を基本的に同一の遺構面に帰属するものとして判断した。

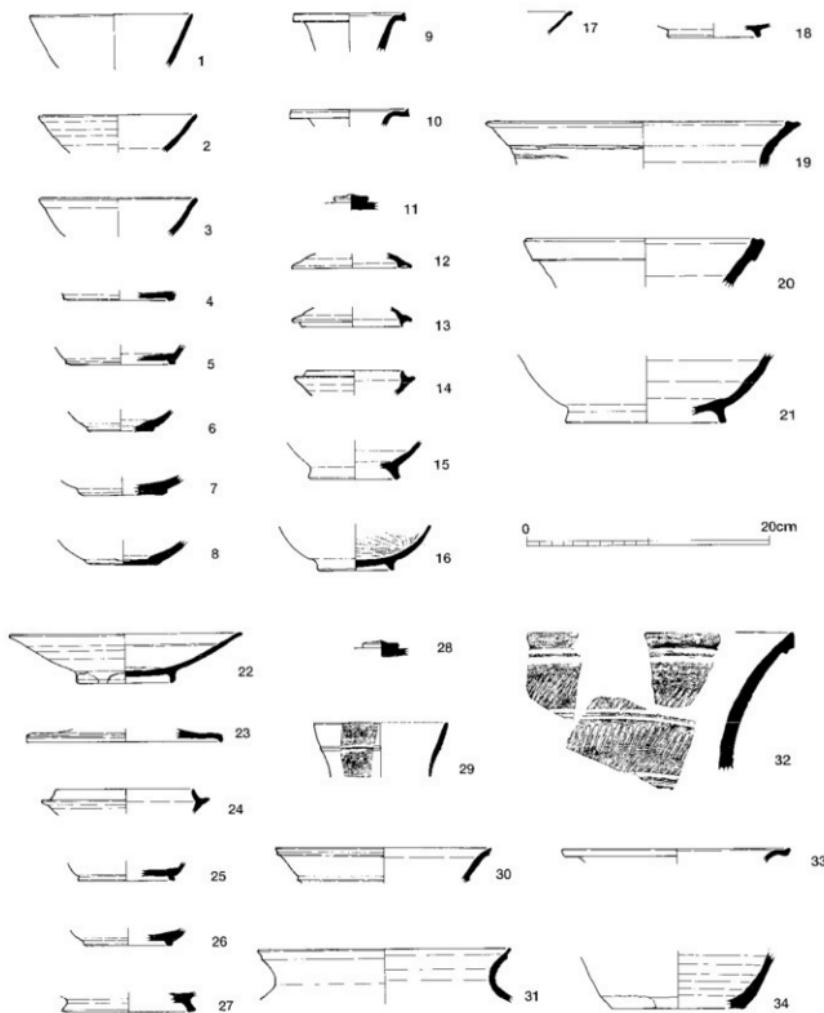
fig. 70  
第2遺構面平面図

- 検出遺構 検出した遺構には、溝1条、土坑1基、土器溜まり1ヶ所、小土坑等がある。第11～13次調査の成果を勘案すれば、古墳時代から平安時代の遺構面と考えられる。
- S D01 幅約1.2～1.5m、深さ約70cmの薬研堀状の溝である。南北方向に直線的に延びるが、調査地東壁付近で東へ屈曲する気配がある。土師器・須恵器などが出土している。
- S K01 径80cm×67cm、深さ46cmの平面隅円方形の土坑である。底面・壁面が赤く焼け、炭も遺存しており、中で火を焚いたことが明らかである。埋土からは少量の土器細片が出土した。
- S X01 5a層内で、南北約6mの範囲において比較的遺存状況の良い土器の集中が面的に見られた。古墳時代前期の土器で須恵器は含まれない。高坏を多く含む。
3. まとめ 今回の調査地は、第11～13次調査地と接続した位置にあるが、検出した遺構の内容には異同が多い。これを表にすれば下記のとおりとなる。
- 第1遺構面では、各地点で確認された遺構が異なっている。今後調査が進展すれば、洪水砂にパックされたかたちの平安時代後期の農村における土地利用のありかたが具体的に判明することになり、興味深い資料になるものと予想される。
- 第2遺構面は、同一面で古墳時代から平安時代前期までの長い期間の遺構・遺物を確認している。第11・12次調査では奈良時代を中心とする遺物が多く出土し、大型の掘立柱建物等が多く検出するなど律令期の遺跡として注目されるが、その北側に隣接する今回の調査地では当該時期の遺構は検出していない。一方、第11～13次調査で確認されなかった、古墳時代前期の遺構・遺物を確認したのは新たな知見である。

方 位	調査次数	第1遺構面（平安後期）	第2遺構面（古墳～平安前期）
北 ↑ ↓ 南	第13次	耕作地（鋤溝ないし区画溝）	耕作地（鋤溝）
	第17次	牛飼育地（足跡）	土器溜まり・溝・土坑
南	第11・12次	耕作地（畠畝）	掘立柱建物



fig. 71 S X01



1~21 4層 22~34 5層

fig. 72 出土遺物実測図 (1)

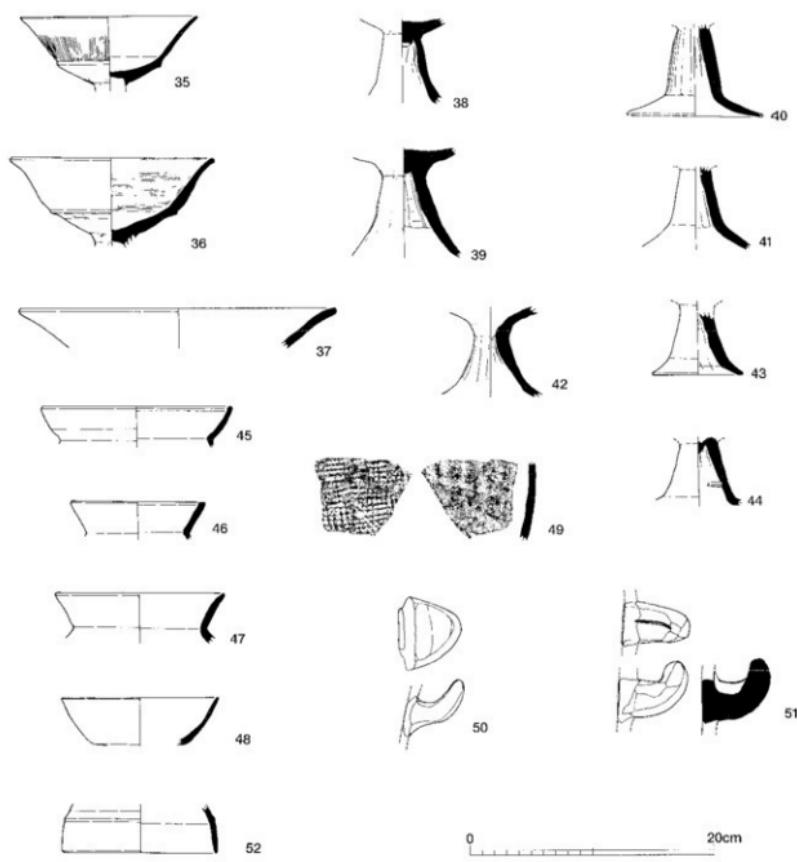


fig. 73 出土遺物実測図（2）

35~37・42~51 SX01  
38~41 5箇 (SX01の遺物の可能性大)  
52 SD01

## 10. 日暮遺跡 第18次調査

1. はじめに

日暮遺跡は、六甲山南麓の沖積地末端に位置する、弥生時代後期から鎌倉時代、室町時代の集落遺跡として周知されている。

遺跡周辺は、市街地形成の時期が早く、遺跡の分布が明確でなかったが、これまでに実施した調査の結果、次第に遺跡の様相が明らかになりつつある。



fig. 74  
調査地位置図  
1 : 2,500

## 2. 調査の概要

今回の調査地は、平成11年度に調査を実施した、第15・16次調査地（ともに本書参照）に隣接した地点にある。

基本屬序

瓦礫、コンクリート片を主体とする現代の整地土が10~30cmの厚みで存在する。整地土の下層には、黄褐色~茶褐色粘性砂質土（旧耕土）が厚さ10~20cm程度、一様に堆積する。その下層は、北半部では洪水による褐色系の粗砂~細砂が堆積しており、遺物包含層は確認されない。南半部には暗褐色粘性砂質土（飛鳥時代から平安時代の土器を含む）が厚さ10~20cm程度堆積し、その下層に前記の洪砂が薄く堆積している部分がある。

遺構は黒色砂混じりシルト上面で検出した。

遺構面には、柱穴、ピットとともに、現代の建物基礎と、江戸時代末から明治時代初頭頃の耕作に伴う石の詰まった暗渠が掘り込まれていた。

黒色～黒褐色砂混じりシルトは、北西から南東方向に下がる。また、この層の下層では、土石流によって堆積したと考えられる黄褐色泥礫細砂～粗砂を確認した。

検出遺構 堀立柱建物 1 棟、ピットを検出した。

SB01 2間(3.8m) × 2間(3.5m) 程度の建物規模がある、円形または梢円形の掘形をもつ柱穴から構成される堀立柱建物である。建物西側部分は若干の未調査部分を挟んで第15次調査地と接している。この未調査部分は後世の擾乱が著しいため断言はできないが、建物が西に2間以上延びる可能性は低いと考えられる。建物方位は、N25°Wである。

この建物は、側柱で構成された建物であるため、土間の家屋か倉庫と考えられる。

建物の柱掘形からは遺物がほとんど出土しないため、建物の正確な年代は不明であるが、上層の遺物包含層出土遺物とこれまでの調査成果を考え合わせると、およそ飛鳥時代から平安時代の時期に収まるものと判断される。

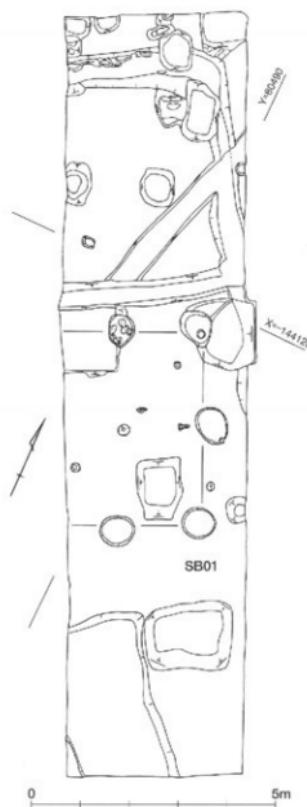


fig. 75 調査区平面図



fig. 76 調査区全景

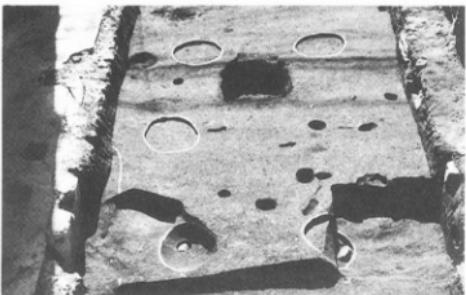


fig. 77 SB01

## SD01

調査区北端部～中央部で確認された逆L字形に曲がる浅い流路である。埋土は北半分に堆積する洪水砂（褐色系の粗砂～細砂）と同質であり、洪水が遺構検出層の一部を削った痕跡であると考えられる。なお、同様の流れの痕跡は、今回の調査区の北側の第16次調査地においても確認している。

## 足跡

調査区のほぼ中央で、人の足跡を2ヶ所確認した。いずれも長さ20cm、幅12cm、深さ2～3cm程度のもので、親指の位置が確認できることから、左右足の1歩分（長さ約80cm）である。上記の洪水砂が足跡の底を埋めていることから、砂が溜まって固くならない段階で踏み込まれたものと判断される。

## ビット

数基のビットを検出したが、いずれも小規模で浅いものである。出土遺物が皆無のため、時期やそれらの用途は不明である。

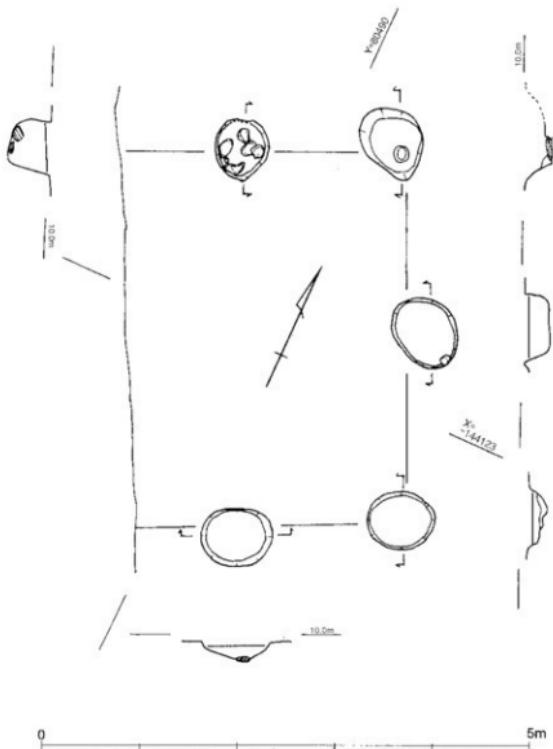


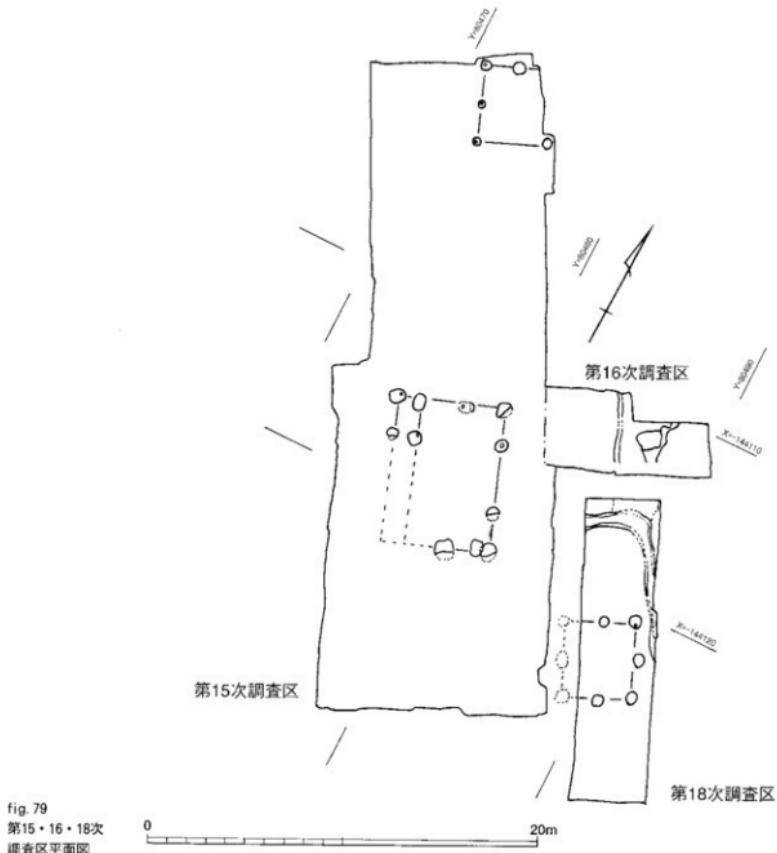
fig. 78 SD01平・断面図

3. ま と め 今回の調査では、飛鳥時代から平安時代の掘立柱建物1棟と洪水の痕跡と考えられる流路、足跡、時期不明のピットを検出した。

周辺地の調査でも当該時期の建物群を検出しており、今回発見された建物は、それら建物群の一部を構成するものと判断される。

また、調査地は北西から南東方向に下がる地形となっており、洪水による堆積層である褐色系細砂～極細砂が遺構面上で確認され、河川の影響を受けやすい地域へ徐々に変化していくものと思われる。

以上のような状況は、第15・16次調査の調査結果を追認するものであり、当遺跡の東限が、概ね今回の調査地より若干東付近に存在するであろうことを示唆する。



## ひょうごつ 11. 兵庫津遺跡 第18次調査

### 1. はじめに

兵庫津遺跡は、神戸市中央部の海岸部に位置する、平安時代から江戸時代の複合遺跡として周知されている。

古くは、「大輪田泊」と呼ばれ、文献上にもたびたび登場する。特に平清盛により経ヶ島が築造され、日宋貿易の拠点とされたことは著名である。

また中世後期においても瀬戸内海運の主要港として栄えた。このことは、「兵庫北関入船納帳」などの文書からも窺うことができる。

その後、天正年間の兵庫城築城に伴い、町もある程度の城郭化が進められたが、町割りは多分に中世の様相を残すものと思われ、前出の「入船納帳」にみられる地名が江戸時代の絵図においても散見される。



fig. 80  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

今回の調査地は、第15次調査地の南約250mで、標高約2mの西から東へ傾斜する地点に位置する。調査は2分割して行い、まず西区・中央区の調査を実施した後、東区の調査を実施した。なお、工事影響深度の関係で、調査は工事仮B.M.-100cmまで実施した。

#### 基本層序

現地表面以下の土層は、戦災整地層・炭層・赤褐色焼土・淡黄色粘質土あるいは暗青灰色シルト質砂・焼土・灰黄色シルト質土である。

#### 第1遺構面

戦災整地層除去後の焼土層上面で検出した、19世紀中頃以降の遺構面である。西区の焼土層上面で、炭化物の層が存在する。木材片なども確認したが、全て細片である。

#### 検出遺構

溝、瓦片で囲んだ土坑、ピット約10基を検出した。

#### SK01

瓦片で囲んだ土坑で、下層の焼土層を整地した後に構築している。南北幅約1mで、東西幅は後世の削平のため不明である。上面は叩き締められて固い。

- SP06 径45×38cm、深さは約50cmを測る。下層埋土から出土した土師器小皿のうち1点に金箔と墨書〔千早振荒振 神モ八千矛乃神 乃命仁何曾 年賀目弥〕が確認できた。
- 溝 道路側溝と考えられる溝で、2段の石積みで、幅30cm、底はモルタルを施す。掘形幅は約2m、深さは約30cmを測る。現在の道路とは方向が異なるが、古地図から検証できる道路の方向とほぼ一致する。道路は、江戸時代以降明治期、あるいは戦後の区画整理の段階までこの方向であったと考えられる。また、下層で検出した建物の方向とも合致する。
- 第2遺構面 検出遺構 黄褐色砂質土上面で検出した、19世紀初頭から中頃の遺構面である。西区で溝、礎石を検出したほか、ピットを数基検出した。
- SD01 西区北側で検出した東西方向の溝で、幅約35cm、深さ約10cmである。周囲のコンクリート基礎により不明な点があるが、北側から別の溝が接続するようである。焼土・炭混じりのにぶい黄褐色砂質土を埋土とする。瓦片・染付が出土している。
- 礎石 西区で大型の石材を用いた、礎石と考えられる遺構を2基検出した。それぞれ40~50cm大の石を3石根石として据え、その上に30cm大前後の平らな石を載せている。2基の心々間は約1.7mで、それぞれの一一番上に位置する石のレベルは等しい。根石を据える掘形の規模は約1mで、根石を据えるのにはぎりぎりの大きさである。深さは約40cmである。検出したのは2基のみであるため詳細は不明であるが、礎石と考えた場合、相当規模の根石を据えていることから、蔵などの規模の大きな建物の存在が想定できる。方向は、第3遺構面で検出した礎石等の並びに平行する。

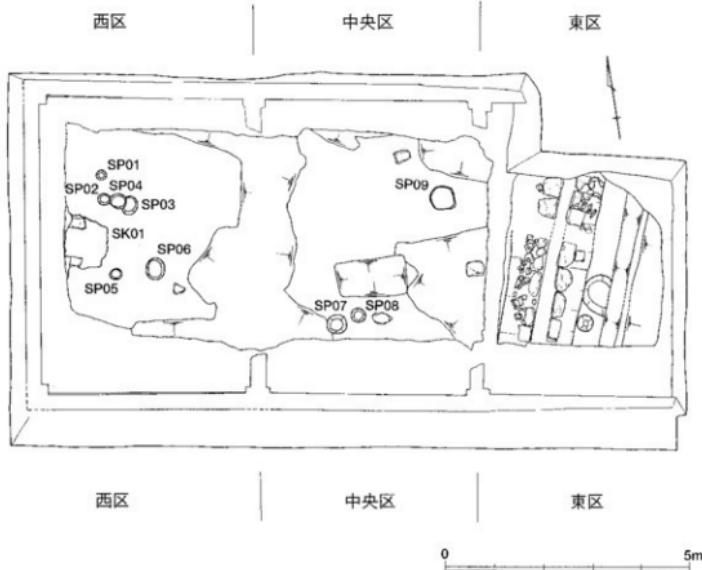


fig. 81 第1遺構面平面図



fig. 82 中央区・西区第2遺構面全景

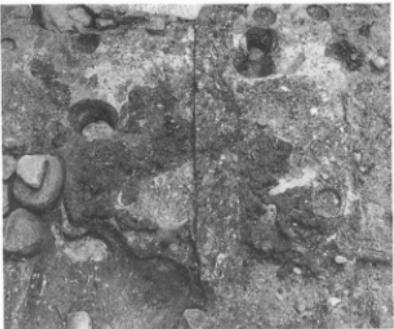


fig. 83 西区炭検出状況

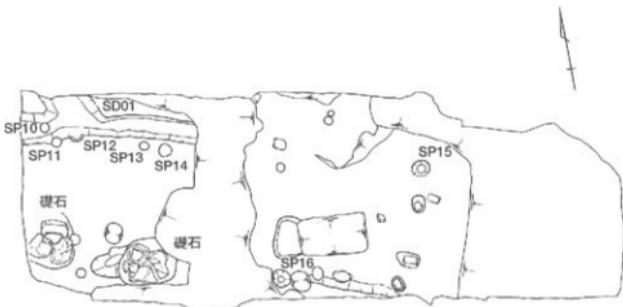
**第3遺構面** 褐灰色粘性細砂上面で検出した、19世紀初頭の遺構面である。遺構は西区及び中央区北半に集中しており、中央区南半以東は遺構を確認できなかった。

**SK02** 陶器の皿で蓋をした壺を、正立させた状態で据えていた。皿の上には約20cm大の石材があり、重しとして封印しているようにも考えられる。皿は直径約22cmで、白色釉が施され、内面に紺色釉を用いて馬の絵を描いている。壺は口径約17cm、器高約20cmである。壺内部には、現時点では材質等は不明であるが、握り拳大のものが納められていた。

**溝状落ち** 中央区北端で、第1遺構面東区の南北溝に直交する方向で、小石を並べた溝状の落ちを検出した。幅は約60cmと思われる。石材は15cm大前後の角礫を使用している。

この溝状落ちと平行して南側に、間隔が1.5mと1mの礎石列を検出した。また、礎石列と落ちの間に、間隔が1.3mほどのピット列を3基（S P33・34・36）検出した。

**ピット** ピットの大半は、西区・中央区の北半部分で検出した。西区南半では2基を検出したのみである。ピットのうち、S P22・24からは陶器・鉄片が、S P25からは陶磁器・瓦片・鉄片が、S P30からは瓦片・染付・土師器が出土している。また、S P29は東部に径約25cm大の方形の石を据えている。

fig. 84  
第2遺構面平面図

0 5m



fig. 85 中央区・西区第3遺構面全景



fig. 86 SK02

3. ま と め 今回の調査では3面の遺構面を検出した。複数の焼土を含む土層や焼けた瓦片を確認していることから、何度か焼失しては再建を繰り返したことが窺える。しかし、部分的に整地や盛土が施されており、同時性の把握には困難を生じた。

また、調査面積と掘削深度の関係から、町屋の全体像を描むまでには至らなかったが、建物の一部と道路の検出から、町割りの方向を検証できた。

遺物は、陶磁器・土師器・瓦片などが出土した。銅銭も出土しており、総数約100点を数える。銅銭は全て寛永通宝と考えられる。そのほか金属器としては、煙管なども出土している。漁撈具は、土鉢や釣針などが極少量出土した。

兵庫津遺跡はこれまでの調査で中世・近世の遺物が豊富に出土しており、また町屋の復元も可能になりつつある。そのほか、人々の暮らしぶりを彷彿とさせる遺物も出土しており、貴重な中世遺跡・近世遺跡として認知されつつある。また各地の陶器類の出土は、当時の流通機構などを知る上で重要な資料である。今回の調査で、このような兵庫津遺跡を理解する上で一資料を追加することができたものと思われる。

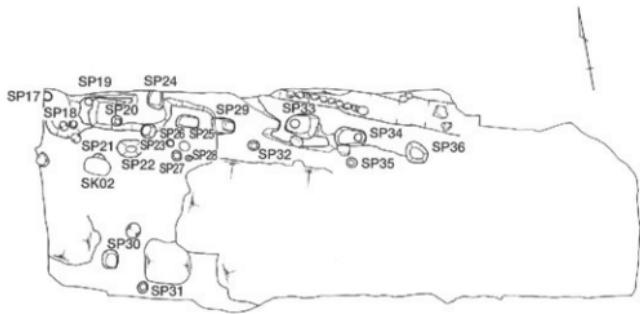


fig. 87  
第3遺構面平面図

## ひょうごつ 12. 兵庫津遺跡 第19次調査

### 1. はじめに

兵庫津遺跡は、神戸市中央部の海岸部に位置する平安時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。

周辺の調査では、中世から近世・近代の町割と町屋に関する遺構が確認されており、多くの成果を納めている。



fig. 88  
調査地位置図  
1 : 2,500

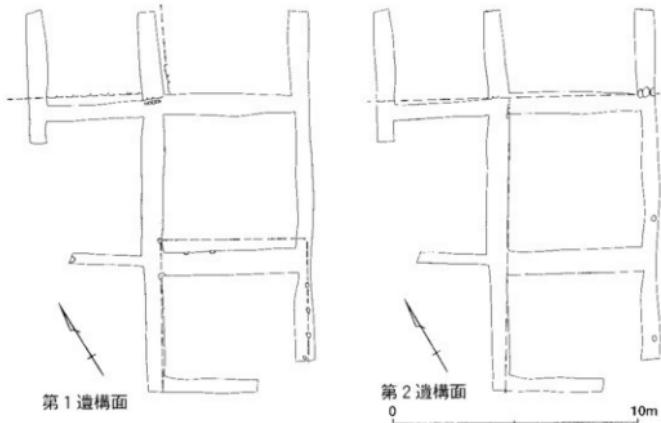


fig. 89  
第1・2遺構面  
平面図

2. 調査の概要 盛土（厚さ40cm）下層約20cmで遺物包含層（厚さ10cm）があり、近代の土器を含む。その下層の灰褐色シルト上面で江戸時代後期の遺構を検出した。これを第1遺構面とする。この下面には部分的に焼土層と盛砂が存在しており、以下多數の遺構面が存在しているが、工事による影響深度の関係から、第2遺構面まで調査を実施している。

遺構としては、建物と土間、石垣等による町割の状況が確認できたほか、上層と下層では上層の建物が狭くなる傾向が見られた。また道路状遺構と思われる部分も検出した。

3. まとめ しかし、狭い範囲でのトレンチ調査であったために、各遺構の有機的な関係や詳細な規模等を確認するには至らなかった。周辺部の調査で確認されている町屋の変遷の状況については、ある程度追認できる結果となったが、第2遺構面以下の下層の状況が調査しきれていないため、全体の流れとして一致するかどうかは不透明である。

なお、江戸時代の絵図の記載による道路が今回の調査で確認されているが、周辺の調査によってさらに追加資料を重ね、追認作業を進めていく必要がある。



## ひょうごつ 13. 兵庫津遺跡 第20次調査

### 1. はじめに

兵庫津遺跡は、J R 兵庫駅の東側に広がる古代から近世に及ぶ複合遺跡である。

兵庫津の史料上の初見は、『行基年譜』にある天平2年の攝津国菟原郡宇治郷に船院・尼院を設置するという記事である。その後、平安時代末に平清盛が大輪田泊を修築し、鎌倉時代に東大寺僧重源が絶ケ島の修築を行った。延慶元年、東大寺が港に出入りする船から「升米」「置石料」などの関税をかけ、興福寺も暦応元年から「商船目錢」などの税をかけるようになった。室町時代には、日明貿易の拠点として栄え、将軍の兵庫下向の記事も散見される。しかし、応仁・文明の乱は、兵庫津にも多大な被害を及ぼし、攝津堺の港にその地位を奪われることになる。兵庫津の本格的な復興は天正9年(1581)年、池田氏が兵庫城を築いてからのことと言われている。その後、池田氏領地替えにより、当地は豊臣家直轄領となるが、慶長元年(1596)年の震災により再び被害を被った。しかし、江戸時代には尼崎藩領から天領となり物資流通の拠点的港町として栄えることとなった。

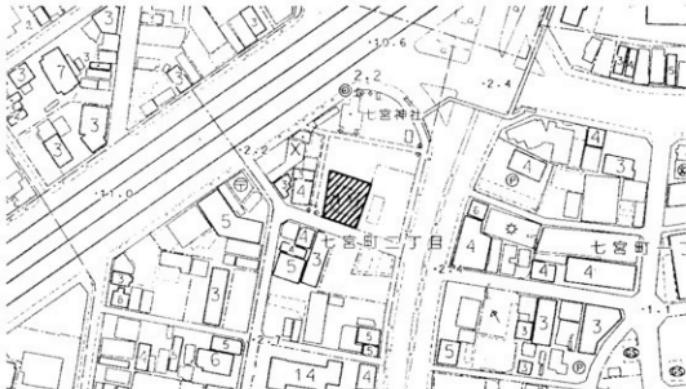


fig. 94  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

今回の調査地は兵庫津遺跡の北東部に位置する七宮神社の南にあり、元禄9年の兵庫津絵図の「北宮内町」に位置している。

今回の調査では、慶長大震災前後から幕末頃までの計9枚の遺構面を確認した。以下の記述は現地調査段階での見解であり、詳細は整理作業の進展に伴って再度検討したい。

#### 第1 遺構面

調査区南東隅で、計10基の陶衣壺と考えられる、主として土師質壺を据え置いた遺構を検出した。ただし、これに伴う町屋の区画等は、後世の擾乱などで明確ではない。

土師器壺・陶器壺のほか、調査区東半部で丁銀形土製品が出土しているが、これらの陶衣壺に伴うかは明確ではない。

#### 第2 遺構面

後述する宝永大火面の上面で検出した遺構面で、竈、土坑などを確認した。

S K111 東西約1m、南北約0.8m、深さ約0.1mの土坑で、12枚の銭貨が銹着状態で出土した。

竈は2基検出したが、これに伴う町屋（建物）の区画等は明確ではない。

- 第3遺構面 宝永5（1708）年の大火によるものと考えられる焼土層で覆われた遺構面で、9区画の町屋群（SB01～09）を検出した。各町屋は壁を共有して建っていたものと思われる。
- SB01 南北約7.8m、東西約4m以上で、西辺に土間の一部を検出した。東辺に東西方向の丸太材を間隔をおいて置き、上に南北方向に篠竹を密に並べた上に、ござ状の敷物を敷いた施設が炭化して残存していた。
- SB02 南北約4m、東西約3.5m以上で、東辺の石列はL字状に屈曲し南半は若干斜面となり、この部分は2列の石組みとなっている。西辺中央やや南に一辺約45cm、残存高さ約17cmの炉壇を検出しており、SB02は茶室遺構と考えられる。炉壇遺構は兵庫県下では管見に触れないが、堺市堺環濠跡で検出されている。この町屋からは、多量の瓦が出土している。
- SB04 南北約7.8m、東西約5.5mで東半部が土間と考えられるが、残存状態が悪い。壁材及びSB01と同様の炭化材の一部を検出した。床面に数個の礎石と見られる石が残る。
- この町家は、SB01比して約60cm、SB06に比して約30cm高く台状になっている。この区画は、第5遺構面でも周囲の町屋より一段高いという特徴をもっている。
- 当町屋ベース土の下底近くで20枚弱の土師器小皿が集中する個所があり、地鎮遺構と考えられる。
- SB05 南北約3m以上、東西約5.5mで、炭化した屋根材と屋根の上に乗せていたと考えられる川原石を検出した。東半部が土間となっており、6個の礎石が残存していた。

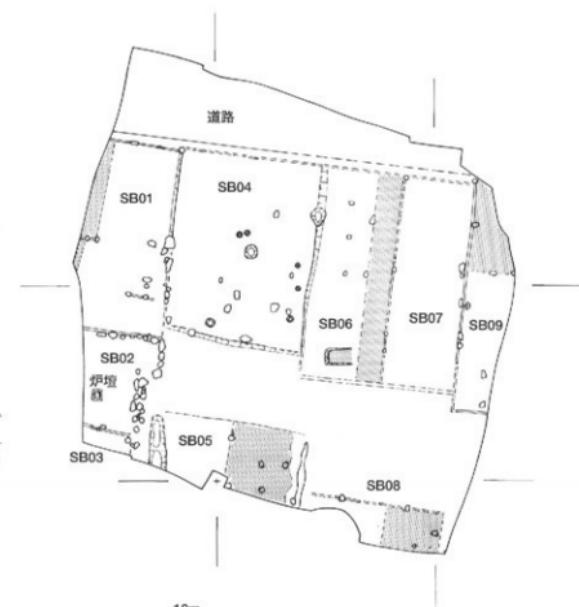


fig. 95  
第3遺構面平面図

**S B06** 南北約9m、東西約3.5mで東半部が土間と考えられる。炭化した屋根材と屋根の上に乗せていたと考えられる川原石を検出した。南端にも東西方向の土間状遺構があるが、性格は不明である。ただこの周辺から、陶磁器、土師器、錢貨、雁首銭と共に土人形（仏像・船）が出土している。また南北方向の土間除去中に直径約25cm、深さ約5cmの小ピットを検出し、計25枚の錢貨が出土した。地鎮遺構の可能性がある。

**道路遺構** 調査地区的北辺、南北最大幅約3.5m、東西検出幅約15mは厚さ約1～2cmの土を幾層にも積み上げて造成した道路である。この道は元禄9年の兵庫津絵図にある、七宮神社参道から東に派生する東西方向の小道に相当するものと考えられる。なお、この道は戦前まで盛土を重ねつつ使用されていたものである。



fig. 96  
第3遺構面全景



fig. 97 S B01炭化材・遺物出土状況



fig. 98 S B04地鎮遺構

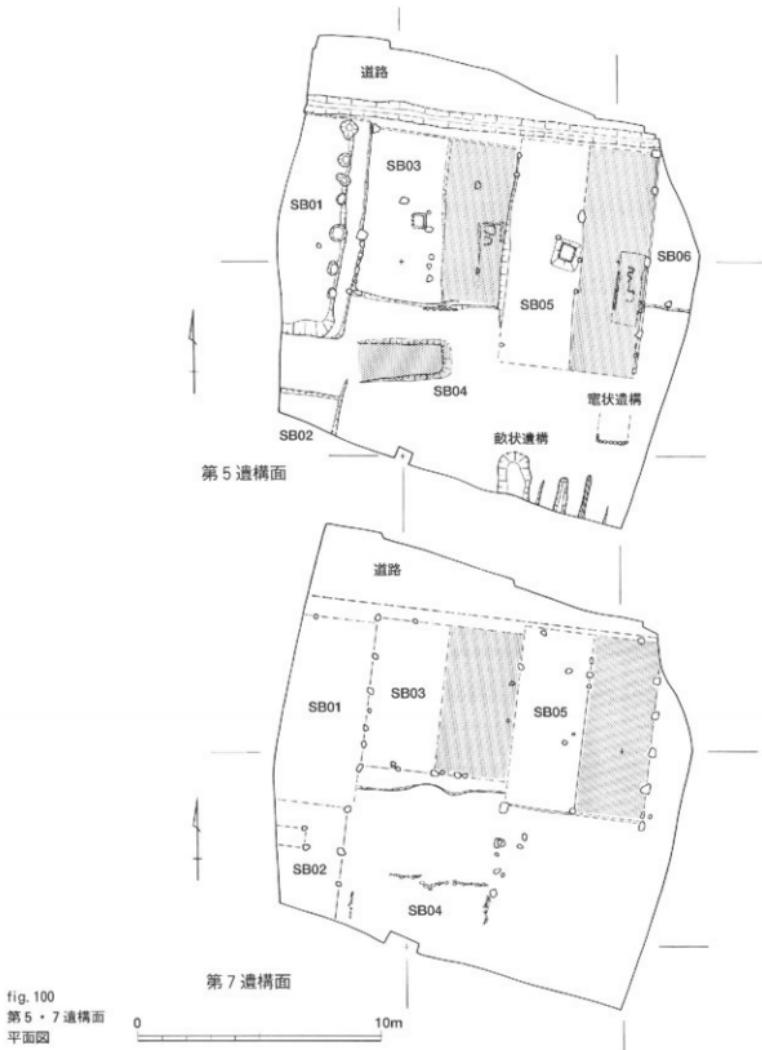
- 第4遺構面** 第3遺構面のS B01・02・03・05および08の生活面の直下で、ほぼ同位置で新たな生活面を検出した（S B01～05）。
- 第5遺構面** 第3・4面遺構面のベース土を除去した後に検出した町屋群である。S B01～06の建物を検出した。17世紀後半から末頃と考えられる。
- S B01 南北約9m、東西約3m以上で、東辺に柱抜き取り跡と考えられる土坑が計7基ある。北から2番目の土坑から、丹波焼の擂鉢が出土した。
- S B02 南北約1.5m以上、東西約2.5m以上で、低い段によって囲われた部分を1つの町屋と考えた。東西方向の段状部の北側も町屋内の可能性があるが、明確ではない。
- S B03 南北約7m、東西約6mで、第3遺構面S B04の位置及び規模をほぼ踏襲する。東半が土間となり、東辺中央から南に竈が設置される。西半の中央やや東よりに、一辺約50cmの囲炉裏状遺構がある。この町屋も第3遺構面S B04同様、周囲の建物群から一段高くなっている。S B03床面とS B01の床面との比高差は約60cmである。
- S B04 S B03の南側に、東西方向の土間状遺構があることから、この周間に建物の存在を想定したが、区画する施設が何もなく現時点ではその性格を明確にできない。
- S B05 第3遺構面のS B06・07の地区に相当する町屋で、この時期には1棟であったことが判明した。東西約6mである。南北規模は南端の攢乱穴で確定できないが、東半土間の土層の分布範囲より約9mはあったものと思われる。東半に竈、西半に囲炉裏状遺構があることは、S B03と共に通す。またその位置もこれと一致している。
- 西半床面上から多くの陶磁器、土師器、土製品と共に、50枚以上の銭貨が出土した。銭貨の中には直径2.6cmの絵銭（橋合戦）と、直径3.9cmの大型銭貨状品（絵銭と考えられるが肉眼では確定できない）が含まれる。また、東壁土中から銭貨1枚と鉄製刀子片が出土し第3遺構面S B03で想定したと同様、建築儀礼の可能性も考慮される。



fig. 99  
第5遺構面全景

**竪状遺構** SB 05の南東に竪の残存部分と考えられる石組が存在するが、周囲に建物の痕跡もなく、その性格は不明と言わざるをえない。

**道路遺構** SB 01・02の北側に、幅約0.8m、深さ約0.3m、残存長約7mの溝状遺構があり、道路南辺を区切る施設と考えられる。



- 第6遺構面** 第5遺構面SB03・05の直下で検出した町屋で、遺物の様相もほとんど変化していないものと考えられる。17世紀後半を中心とする時期に属する。
- 第7遺構面** 第4遺構面のベース土を除去した後に検出した町屋で、計5棟の建物が復元されるが、SB05以外は明確ではない。17世紀前半から中頃と考えられる。
- SB05** 南北約7.5m、東西約5.5mで東半が土間面と考えられるが、若干の硬化面が広がるのみである。南辺中央の礎石は五輪塔の水輪を転用している。  
床面から陶磁器、土師器、瓦片、鉄製品、煙管や錢貨が出土した。
- 道路遺構** 当該時期も調査区北側には、道路遺構が存在したことが土層から推定される。
- 第8遺構面** 調査区東半の中央部には擾乱穴があり、その断面土層に断層を一部確認した。この断層をもつ土層の上面を追求して検出したのが第8遺構面である。この面は出土遺物からみて16世紀末から17世紀初めと考えられ、当断層は慶長大震災時のものと推定される。  
東西に並ぶ計4棟の町屋群を検出した。



fig. 101  
第9遺構面平面図



fig. 102 審1



fig. 103 審1西側生活面遺物出土状況

- 第9遺構面** 第8遺構面直下の生活面で、竈を3基検出した。16世紀末頃と考えられる。
- 竈1 竈1及びその西側に広がる生活面は、第8遺構面SB02の直下で検出した。竈1の上面はSB02床面から上に出ており、SB02に伴うものとも考えられるが、竈とそれに伴う土間の方向がSB02の軸と若干異なることや土間がSB02西半生活面の下に潜り込むこと等から一時期古いものと考えた。ただしSB02段階での竈1の使用を否定するものではない。床面から唐津焼皿(胎土目)、土器類、鉄器、煙管や錢貨等が出土した。
- 竈2 竈2は東側に開口するもので、周囲に土間状の硬化部が残存した。この竈に伴う建物の範囲については明確ではない。
- 道路遺構** 当期の道路遺構の存否については、工事影響深度との関係で遺構面を十分に追求できなかったことも影響し断定が困難であるが、第8遺構面とはかなり様相の異なる建物群が想定されることや、調査区西壁土層の検討からこの時期には道路がなかった可能性がある。ただし、兵庫津の街区の整備時期の問題とも関わることから、さらに検討を加えたい。
- 出土遺物** 現在遺物整理を充分に実施できていないが、以下主な遺物について説明する。
- 錢貨** 今回の調査で出土した錢貨の総数は約500枚を数えるが、そのうちの450枚について集計を行なった結果を下記の表に示した。
- 宝永大火時の町屋及びその直下で検出した、第3・4遺構面から出土した錢貨に1697年以降発行された新寛永通寶を含み、1739年以降の寛永通寶鐵錢を含まないことは、この焼土層の年代を宝永5(1708)年と想定することと抵触しない。
- 第3遺構面の地鎮遺構とみられる小ビットから元祐通寶の模鋳錢(所謂叶手元祐)が出土している。叶手元祐は近世期の模鋳錢といわれており、今回の出土状態もそれを示す。
- 第4遺構面ベース土から慶長通寶と考えられる錢貨が出土した。慶長通寶は当時の公式記録にない錢貨で、鑄造時期や公銘・私銘の別も明確ではない。市内では初見と思われる。
- 第5・第6遺構面は、その検出状態から近接した時期を推定できる。錢貨の構成比率もそれを示すものと考えられるが、上層の第5遺構面に新寛永通寶を1枚ではあるが含んでおり、第5遺構面が1697年を若干経過した時期ということを想定させる。

出土錢貨表

	宋 錢 (模鋳 錢を含 む)	明 錢 (模鋳 錢を含 む)	古寛永通寶 1636年 1659年	寛永(文)錢 1668年 1683年	新寛永通寶 1697年 1781年	寛永鉄錢 1739年 1739年	その 他
宝永大火層検出まで			10		38	3	
宝永大火層を覆う盛土	1	1	8	8	34		無文錢1
宝永大火時の町屋(第3遺構面・ 1708年)及び直下検出の町屋 (4遺構面)	3		55	37	21		
第3・第4遺構面 ベース土	4	1	32	7	1		慶□□寶1
第5遺構面 町屋	2	1	44	14	1		繪錢2
第6遺構面 町屋	6		47	14			繪錢1
第6遺構面 ベース土			11				
第7遺構面 町屋	6		10				
第8遺構面(推定慶長期) 町屋	9	1					
第9遺構面 町屋	13						無文錢1
計	44	4	217	80	95	3	統計 450



1



2

大版高津銭（寛保元年・1741）

第3面SB04 ベース土



3



4



5



6



7

江戸猿江銭（寛保期）

叶手元祐

第3面SB06 SK221



8



9



10



11



12

四ツ宝銭（宝永5年・1708）

江戸猿江銭（寛保期）

第3面SB09



13



14



15



16

江戸深川十万坪銭（寛保期）

宝永5年（1708）焼土層



17



18



19



20

肥前長崎銭（明治4年・1767）



21



22



23



24



25

fig. 104 出土錢貨拓影（1）

宝永焼土層を覆う土層



1



2



3



4



5  
模鍛銭



6  
無文銭

第9面 SB01



7



8



9



10  
模鍛銭



11  
模鍛銭



12  
模鍛銭

第8面 SB02



13



14



15



16



17



18

第7面 SB05



19



20



21



22

第6面 SB02



23



24



25



29

萩原銭 (元禄13~宝永4年・1700~1707)

第5面 SB03



26



27



28

加治木錢？背「治」？

第5面 SB05

fig. 105 出土銭貨拓影 (2)

第5遺構面出土銭貨のなかに、明代の洪武通寶の模鋳銭で、近世期に薩摩で鋳造されたといわれる「加治木錢」と思われるものがあるが、より検討を加えて結論を得たい。

また第5遺構面出土銭貨のなかには絵銭があり、絵銭出現時期を考える上で貴重である。

第6遺構面は1668年発行の寛永通寶文銭を含み、そのベース土中にも1点の文銭を含むことから、時期は17世紀第3四半期頃と考えられよう。

第7遺構面出土銭貨は、宋銭及び1636年発行の古寛永通寶のみで、寛永通寶文銭を含まない。よって当遺構面は、1636年～1668年頃と考えられよう。

第8面遺構面は、慶長大震災（1596年）頃と考えられるが、出土銭貨からみても古寛永通寶を含まず、この推定をある程度裏付けることができる。

第8・9遺構面出土銭貨には、宋・明銭と共に模鋳銭・無文銭が含まれる。当期の出土銭数は前代に比べ少ないが、模銭令の問題とも関連する、貴重な資料である。

陶磁器  
土師器

第6遺構面以前に属す陶磁器・土師器は、今回の出土遺物の大半を占めているが、内容については、具体的に把握できていない。ただ第6遺構面から第3遺構面の遺物群は、17世紀後半から18世紀初頭の様相を知る上で、重要な資料となろう。

第7遺構面の遺物に、土師器鉢があるがこれは16世紀の播磨を中心に分布するもので、17世紀半ばまで残存することを確認できた。土師器小皿は、手づくね成形が大半で、輥轆成形は数個体に留まるようである。第6遺構面以降の土師器小皿はほぼ輥轆成形に限られ、手づくね成形から輥轆成形への転換点が、第7と第6遺構面の間にあることが知られる。

第8・9遺構面の土師器小皿は、個体数は多くないが手づくね成形が主体のようである。第8面のベース土までは輥轆成形のものを含むが、第9面及びそのベース土には含まない。

唐津焼皿については充分観察ができていないが、第7遺構面は砂目のみで、第8遺構面およびそのベース土段階で胎土目が混じり、第9遺構面で胎土目のみとなるものと見られる。

輸入磁器については、極めてその数が少ないが、第9遺構面のベース土出土のものに、陶器質胎土の磁器が含まれ注目される。

煙管

各遺構面から多くの煙管が出土している。宝永大火層を覆う盛土層から出土した煙管には古泉弘氏編年の第5段階から第6段階（18世紀後半から19世紀）のものを含んでいる。

第3遺構面の煙管は、第4段階で18世紀前半に相当する。

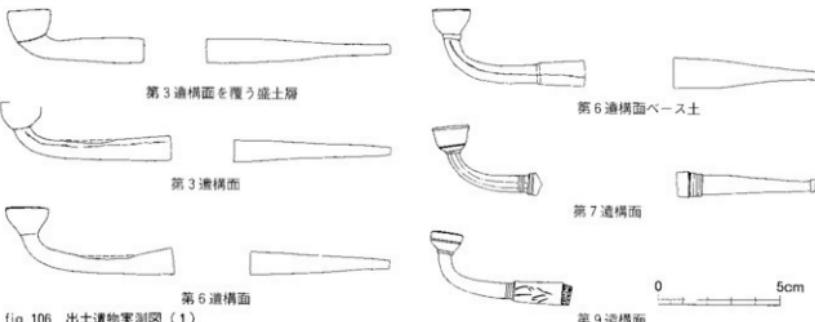


fig. 106 出土遺物実測図（1）

第6遺構面例も第4段階に属すが、第3遺構面のものより型式的には古くなるものと考えられ、17世紀代と考えられよう。

第6遺構面ベース土出土例は、首部に肩があり、火皿と首部の接合部に補強帯がある第2段階と、補強帯が消失したややあたらしい段階のものがある。首部の肩はかなり緩やかで、これを重視するなら第3段階と考えることもできる。第3段階は17世紀後半とされる。

第7・9遺構面出土の煙管は、ともに17世紀前半とされる第2段階のものである。ただ両者を比較すると、第9遺構面例の方が首部の湾曲度が大きくなり古い様相を示している。

#### 丁銀形土製品

丁銀形土製品は、長さ約7.7cm、幅約3.3cm、厚さ約0.8cmのものである。文字からみて元文丁銀または、文政丁銀を模したものと考えられるが、両者の通用には約7年の重複期間があるため、いずれをモデルとしているか断定できない。

表面上下に「文」字、その間を6区に分け、上下4区に「寶」字、中央2区に「大黒」及び「恵比寿」を表す。片方の「文」字直下に1カ所の貫通孔が、裏面に刺突文がある。丁銀形土製品はもう1点調査区北西部の、現代の水道管設置溝の埋土から出土している。一端を欠失しているが、上記例よりやや大型と思われる。文様構成はほぼ一致するが、字体等は異なり、裏面にも「文」字が見られる。

丁銀形土製品は、神戸市内では北区萩原遺跡でも出土している。

**8. ま と め** 今回の調査面積は大規模とは言えないが、16世紀末頃から幕末頃と推定される計9枚の生活面を検出し、当地区の町屋群の変遷等を把握するうえでの貴重な資料を得た。今後の整理作業によって、多くの仏像・神像を表す土人形等の比定、変遷が判れば当地における民間信仰の実態に迫る一助となる可能性がある。

なお、調査区西壁際で下層遺構の存否を確認するため、一部断ち割りを行なったが、14世紀後半頃の遺構、遺物がかなりの密度で存在することが確認できた。14世紀後半頃の遺構面直下は、標高0mとなっており湧水がみられ、これが最終遺構面と考えられる。



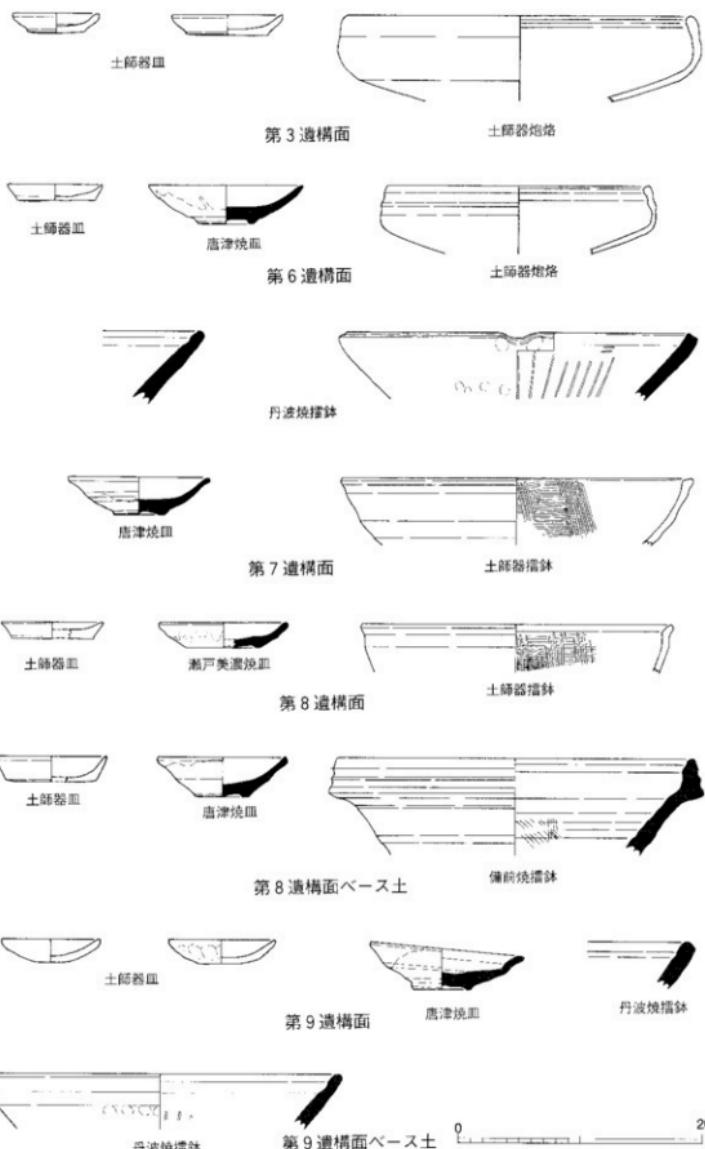


fig. 108 出土遺物実測図（3）

## ひょうごつ 14. 兵庫津遺跡 第21次調査

### 1. はじめに

兵庫津遺跡は、古湊川河口南側に位置する港湾施設とそれに付随する寺院、町屋の遺構を総称したものである。この遺跡は、古代からの五泊のひとつである大輪田泊の名称で知られた古湊を、平安時代末期に平清盛が改修して以来、盛衰を重ねながら港湾都市として発展してきた。

兵庫津の氏神として、古くから人々の信仰を集める七宮神社は、平成7年1月17日の阪神・淡路大震災で、社務所や多くの石造品が損壊した。今回の調査は、当社の社務所兼居宅の再建工事に伴うものである。現地表高は2.6~3m前後である。



fig. 109  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

工事によって影響を受ける約280m<sup>2</sup>について、設計G.L.-1.1mまでは、建築予定部分全面の発掘を、それ以下については、トレンチによる調査を行った。

#### 基本層序

当該地の基本層序は以下の通りである。

- ①瓦礫混じり褐色砂質土（瓦礫、コンクリートを主体とする現代の整地土層）
- ②瓦礫混じり赤褐色土（第2次世界大戦時の空襲による焼土層：局部的に残る）
- ③炭混じり黒褐色土（戦災直前の地表面）
- ④瓦礫混じり暗黃褐色砂質土（明治から昭和期前半の整地土）
- ⑤黒褐色砂質土（第1遺構面：19世紀後半、西半分は焼土面、現地表面-60cm）
- ⑥黄褐色混じり褐色～淡黒褐色中砂・細砂
- ⑦黄褐色粗砂混じり黒褐色砂質土
- ⑧黄灰褐色粗砂（第2遺構面：19世紀中頃、大量の陶磁器片、鉄滓、金属製品が含まれる。  
西側が厚く、東側は薄い）
- ⑨黄灰褐色粘質土（第3遺構面：19世紀前半、これから下は概ね、褐色系粗砂～中砂、砂質土が交互に積まれる。西側が高く、東側は低い地形）
- ⑩黄灰褐色粗砂～黒褐色砂質土の互層

- ⑪黄灰褐色粘性砂質土（第4遺構面：18世紀後半から19世紀前半）
- ⑫黄灰褐色粗砂
- ⑬黒色粘質土混じり暗褐色砂質土（第5遺構面：17世紀後半から18世紀前半、起伏を持つ）
- ⑭暗褐色砂質土（土壤化、耕土？）
- ⑮黄灰褐色～褐色混じり暗褐色中砂（第6遺構面：16世紀後半から17世紀前半、T.P. 0 m）
- ⑯黄灰褐色粗砂（第7遺構面：13世紀後半から16世紀頃、遺構が確認されるが、湧水のため遺構の精査は不可能、海拔-30cm、現地表面-3.3～3.4m）

- 第1遺構面** 東部約1／3程度に広がる黒褐色砂質土を除去した段階で検出した遺構面である。出土遺物から、江戸時代末から明治時代初め（19世紀後半）の遺構面と判断される。
- 胞衣壺** 調査地中央や北寄りで3個体検出した。この部分は、黒褐色砂質土は堆積しておらず、黄灰褐色粗砂面を少し掘り込んだ状態で検出した。直径約15cm、高さ約10～15cmの素焼きの壺を用い、同質の偏平な蓋を伴う。うち一つには壺の両側面に「神林」「祐吉」という墨書銘があり、蓋の各面には、「寿」「袍（器？）」と書かれていた。
- 埋桶遺構** 胞衣壺の東側には、直径約40cmの桶らしきものを埋めた痕跡が残っており、中から有機質が板状に固まつたものが出土している。この遺構も胞衣等を納めたものと推定される。
- 埋瓶遺構** 調査地中央や東寄りで、直径約50cmの陶器瓶の下半分が据えられた状態で検出された。内壁には、漆喰状のものが塗られていた。底のあたりから、銅貨18枚（大小あり）、鉄錢1枚（孔あき）、鉄、銅製品が数点出土した。
- かわらけ皿溜め** 調査地北東部で、かわらけ、陶器小皿が、約20枚重ねられた状態で発見された。口縁部どうしを重ね合わせたものもある。また、かわらけ皿は透明な釉薬がかけられている。

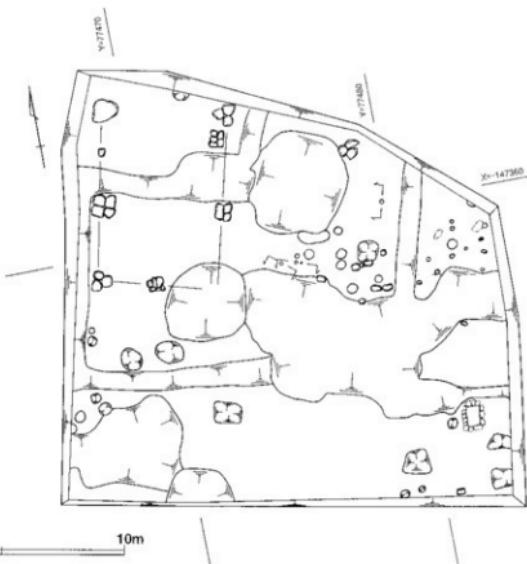


fig. 110  
第1・2遺構面  
平面図



fig. 111 第1遺構面施衣壺・埋石遺構



fig. 112 第2遺構面全景

**第2遺構面** 調査地北西部の黄灰褐色粗砂上面で、礎石建物を1棟確認した。江戸時代後期（19世紀中頃）の遺構面と考えられる。

**礎石建物** 40～50cm大の石を組み合わせて礎石としている。北西隅で見つかったものには、その上に一辺80cm大の平たい石を載せていることから、検出された礎石の大半は根石部分で、本来はその上にもう一石置かれていたものと判断される。今回の調査では2×2間の規模を検出したが、北、西側に建物は広がると考えられる。礎石の下、その周辺から時代を決定できる遺物は出土しなかった。

また、黄灰褐色粗砂の上層からは、東端部で拳大～人頭大の石がまとまって出土した。その中には、灯籠の基部と思われる蓮台や一石五輪塔の一部も含まれる。

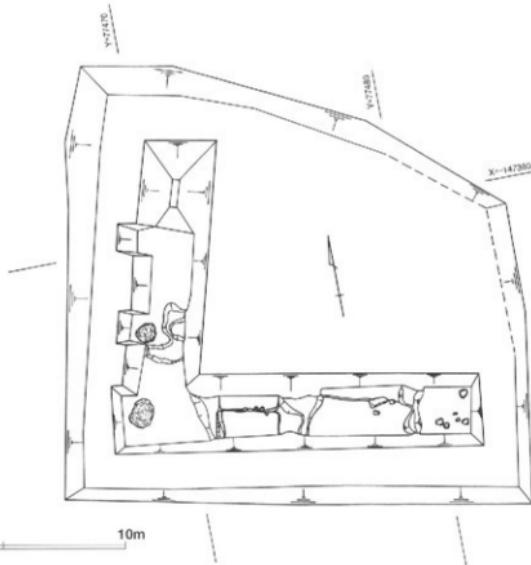
fig. 113  
第3遺構面平面図



fig. 114 1 レンチ第3遺構面全景



fig. 115 2 レンチ第3遺構面全景

**第3遺構面** 黄灰褐色粘質土上面で、調査地中央に大きく掘られた廃棄物の処理坑の壁面に、宝篋印塔の基部が露出していた。これは、天地を逆にして据えられており、礎石として利用されたものと考えられる。その下に人頭大の石を数個置いて、礎石の沈下を防ぐ処置が施されていた。この遺構の発見された深度は、設計G.L.-1.1mを大幅に越えてしまうため、宝篋印塔の周囲の調査に止めた。

第3遺構面以下の遺構面については、L字形のトレンチによる調査を行った。

南北方向のトレンチである1トレンチの南半部で、粘土を直径70~80cm、厚さ5cm程度に敷きつめ、中央部が凹んだ遺構を2基確認した。これらは、礎石の下に敷いて沈下を防ぐ工夫と考えられる。

東西方向のトレンチである2トレンチでは、丸瓦を並べて暗渠にした遺構や石列、瓦や骨製品の出土した落ち込み、礎石に用いられたと考えられる直径40~50cmの大いの石などを検出した。また、2トレンチ西端では、壁土と思われるスサ入りの焼土片が細かく割れて出土している。

これらの遺構は、江戸時代後期頃（19世紀前半）のものと推定される。

**第4遺構面** 2トレンチで、土坑、落ち込みを確認した。土坑は直径1.5m、深さ約80cmで、瓦と陶磁器、石が大量に投棄されていた。瓦には棟瓦を含む。また瓦当には、珠文帯に三つ巴を付けたものと16弁の菊花文を付けたものがある。

これらの遺構は、江戸時代後期頃（18世紀後半から19世紀前半）のものと推定される。

**第5遺構面** 土壌化した層である暗褐色砂質土の上によく似た土を土堤状に積み上げ、砂を40cm程度積み、さらに同じような土堤を造り、砂を30cmほど盛り上げて、平坦面を造る。

このようにしてできた平坦面をどのように利用したかは、トレンチ調査のため明確ではない。わずかな出土遺物から江戸時代中期頃（17世紀後半から18世紀前半頃）と推定される。

第6遺構面 暗褐色砂質土を除去した段階で、足跡状の窪みが確認されたが、顕著な遺構は発見できなかった。土の土壤化した状況から判断すると、耕作土であった可能性が高い。

第7遺構面 黄灰褐色～褐色混じり暗褐色中砂（第6遺構面基盤層）を除去していく段階で、湧水が激しくなる。この層の下部には13～16世紀の土器、陶磁器を含む。さらにその下の黄灰褐色粗砂面では、ピット、土坑等が検出されたが、湧水で精査、図化等が困難であった。

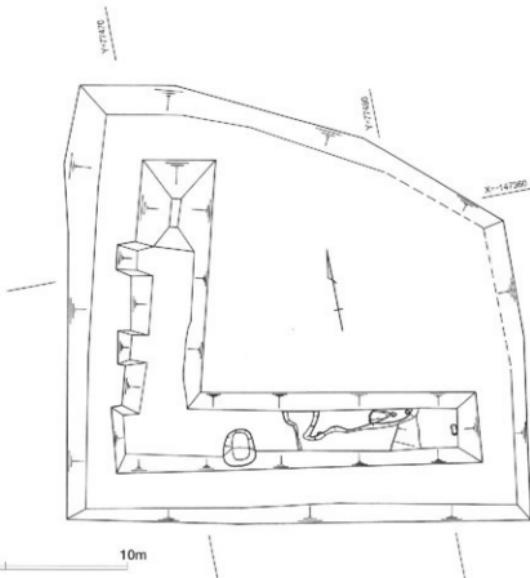


fig. 116  
第4遺構面平面図

0

10m



fig. 117 2 トレンチ第4遺構面全景



fig. 118 土坑遺物出土状況